

---

# 双壁の背中

あおかな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双壁の背中

### 【Nコード】

N7225S

### 【作者名】

あおかな

### 【あらすじ】

主人公ヒロトは王都にある王立スコピリオット学園へ入学する当日、学園の門にドラゴリーネの姫であるルオンを拾う。

なりゆきでルオンと契約関係を結んだヒロトもまたルオン以上の隠し事をしているのだが、ルオンは全部承知した上でヒロトとの契約を結んでしまった。

あくまでも平凡な高校生を演じるヒロトだが、将来の軍幹部候補生やハルフといった種族の生徒達からルオンを守る平凡な高校生生活から一歩外れた学園生活が始まる。

ぶろろーぐ

ぶろろーぐ

これは妄想でも空想でもない。

目の前で繰り広げられて行く日常生活では想像の付かない世界が広がっていく。試しにと少年は頬を抓って見た。じんわりとした痛みが痛覚を刺激するだけで眠りに就いていると思っていた自分自身は起きる兆しすら見せなかった。

空虚を切る音と金属が合わさった鈍い音が少年の耳に劈く。少年は目を見開いて非日常的な光景をただ見るだけしか出来なかった。ぐるりと視線が合わさる。

瞳孔が開いた獣の瞳に少年は慄いた。ペタリとその場に座りこんで、歯を鳴らした。少年は恐怖で震える身体を抑え込むだけで精一杯だった。

「どうしたあ？ ヒロト、こんなんでも怖気ついちゃったのか？ これくらいでへばってどうする？ お前の力はこんなもんだったのか？」

真剣の切っ先を眉間に当たるか当たらないかギリギリの所に出される。少しでも動けば血が滲み出てくるのが分かり、少年 ヒロトは震える身体を動かさないうちに必死に歯を食いしばった。

逆光で男の顔は見えないが、ヒロトはこの男のことを重々承知していた。この男はヒロトの叔父に当たり、アドゥプティドでは知らない人はいないくらいの剣の達人でもあった。

叔父がニカリと陽気な笑顔を浮かべているのだろうけども、ヒロトには叔父の笑顔ですら恐怖の対象だ。

ヒロトは叔父に剣術を学んでいた。基礎はもちろんのこと仕込まれたと言えば仕込まれた。だが叔父が教えるほとんどは基礎的な内

容ではなかった。叔父は荒廃とした大地にヒロトを連れて行つては実戦でヒロトに技術を身に付けさせたのだ。

新鮮なシエルター内の空気とは違い、大地の空気は酷く汚れており、マスク無しでは肺が十分も持たない。しかし叔父は口元にマフラーを巻き付け、ゴーグルを掛けただけでシエルター外に出て行つた。ヒロトもまた十分な防御スーツを着ることなく、シエルターの外へ出ていた。

要は慣れだと言つたものだが、ヒロトもまた一般人が身につける防御スーツを着用することなく、外へ出られるようになった。

「まっ、まだまだああああ！　僕は！！」

転がっていた真剣の柄を握り締めるとヒロトは叔父に果敢に向かつていく。

「そうだよ、ヒロト。その目だ」

ニイッと叔父は陽気に笑うと真剣を斜めに下ろして、無防備に頭を晒した。

## 門前の邂逅

砂埃が舞い上がる。細々とした砂が口や鼻、耳の穴へ侵入しようとしていた。少年は首に巻いていたマフラーを口元まで引き上げた。ゴーグル越しに少年は薄紅色の防壁に囲われた街並みを眺めた。荒廃とした大地は既に人が住まう地としては成立しない。弱肉強食のトップに立っていた人間はシエルターへと退避した今、壮絶なるトップ争いがシエルターの外で行われていた。

スコピリオット王立スパット学園。

第一洲のシエルター内に作られたこの学園は魔法属性による差別を許さず、魔力ランク付けに捕われず、平等に生徒を扱う。王国の先頭に立つ者として、政治学、法律学、経済学を中心に学び、どんな困難をも柔軟に、かつ適正適度な対応出来るようになる指導者を育成することを目的とした世界最大の学園でもある。

「おお、やっぱりすごいなー」

收容所のように高く聳え立つ門扉は、白壁に映えるような漆黒の塗装がされた網門だった。横目で扉の上を見ると、有刺鉄線が張り巡らされており、ますます監獄のようだとヒロトは思っただった。これで電流が走っていればまさしく收容所だ。

電流は走っているのか確かめたくて、ヒロトはたまたま持っていた石を有刺鉄線に向けて投げた。

「うわぁ……」

バチリと火花が散り、焦げた石がヒロトの足元に転がる。石からは出るはずがない煙が走り、高压電流が有刺鉄線に走っていることを物語っていた。

高压電流が走っているのは理解したが、ヒロトは別のものが張り巡らされていると思っていたので、高压電流は意外だった。侵入者でも人だけでなく人間以外のものも弾くように扉を設置されているようだ。

「ここまで嚴重に作る必要性は……あるんだよなあ……残念ながら」  
突如起こった暴風により長めに作られたマフラーが揺れる。ばたばたと揺れ動くマフラー。ヒロトは門扉を後ろにして、回れ右をして振り返った。門扉の前に到着していた時から気付いていたただならぬ気配。

学園に来たとしても避けらそうにない運命にヒロトは溜息すら出なかった。

「わお」

本来、この場にいるはずがないドラゴリーネの幼生体。ドラゴリーネには西洋型と東洋型と二種類にタイプが分けられ、凶暴度は西洋型よりも東洋型の方が上とされている。そしてヒロトの前には凶暴度の高い東洋型。東洋型・西洋型に共通して魔術属性のタイプは最もドラゴリーネの中でも高貴とされている金色の鱗を持ち、銀の瞳を持ち合わせていた。

金の鱗、銀の瞳はドラゴリーネの中でも純血種であり、ドラゴリーネを統率する王族の血筋だ。

希少種どころの話ではなく、ほとんど伝説と思われていたドラゴリーネにヒロトはじつと観察していた。

キラリと光る銀の瞳はヒロトを食いるように見つめていて、ヒロトの中を探っていた。

「……………」

このドラゴリーネはシエルター間を走るリニア車に紛れ込んでいたか。はたまた人化して、人間の迫害を受けつつひっそりと生き延びているとされるドラゴリーネの子か。何処かの研究所から逃げ出してきたドラゴリーネか。だが、このドラゴリーネは王族の血筋を引いているものだろう。誰かが偶然捕獲していた一匹が脱走してきたという説を取るのが最良だ。

思い付くままに思考を巡らせてみたが、この場でドラゴリーネと接触するのは良くないだろう。ヒロトはこの学園に入るからには戦闘能力皆無の一般生徒としての道を歩むつもりだったのだから。

入学早々、思い浮かべた事柄が崩れ落ちていくのには問題があった。

ヒロトは一步一步緩やかにドラゴリーネの幼生体との距離を縮めていく。この幼生体はヒロトを見ても怖がる素振りを一切見せずにヒロトに対して恐怖心を持っていないようだ。しゃがんで幼生体を見ると、鱗が光りに反射してより綺麗に見える。ヒロトは幼生体の頭を撫でる。気持ち良さそうに頭を摺り寄せてくる様は愛玩動物さながらの体だった。

愛玩動物と言ってもヒロトが生きているこの時代には犬や猫といった動物がいないため、癒しの動物に触れたのもヒロトは初めてのことだった。心が荒んだ時に動物に触れると癒されると何かの文献で目にしたことがあったヒロトは本当なんだなと思ったが、今は心を鬼にすることが先決だった。いくら目の前のドラゴリーネの幼生体が愛らしくても、懐かれては困るのだ。

「…………… 此処は君がいて良い場所じゃないんだよ？ シェルターの外に行つてね。誰かに見付かる前に逃げるんだよ？」

「きゅー」

愛らしく小首を傾げて鳴き声を上げる。この場に放置すれば希少な鱗や血を使って悪事を仕掛けない。ドラゴリーネの中でも血統はトップなのだ。血肉を使ったことでの効能が測り知れない。正直、ヒロトもこのドラゴリーネの血肉がどれほどの力を自分に与えるかわからない。だがヒロトはそこまで貪欲に力を欲しているわけではないので、安全な場所へ逃がすことしか考えなかった。

うるうるヒロトを見上げてくる愛玩動物は少なからずヒロトに好意的な印象を持っているようで、首を振ってヒロトに甘えてくる。「あーどうすっかな……………」

どうやら完全に懐かれてしまったようだ。

幼生体を連れて学園に入ることとは出来ないだろうし、第一ドラゴリーネに懐かれること自体有り得ないのだ。ドラゴリーネと人間の接触は皆無に等しい。研究所職員やアドップティド出身者、対ドラ

ゴリーネ戦争時に従事していた人の他、一般人が接触するのはまずない。

ヒロトが生まれ育ったアドップティドにはたくさんのドラゴリーネを使役する人達がいたし、ヒロトの叔父が第一線でドラゴリーネを使役している人物だった。ヒロトもドラゴリーネの扱い方については一般人以上の知識を持ち合わせているが、ここまで特定のドラゴリーネに懐かれたのは初めてだ。

故郷であるアドップティドの匂いが染みついていると薫ったのか、ヒロト自身の波長を感じ取ったのか定かではないにしても、ドラゴリーネに人間の匂いを覚えさせるのは危険があつた。

ドラゴリーネは自分の力が強い者と認めたら、その人物に対して絶対的な忠誠を誓いを立て生涯その人物に仕えるという特徴を持った種族だ。だがその習性は王族に限定し、スコピリオット王国ではドラゴリーネの王族が仕えた人間がスコピリオット王国を継ぐという変わった継承の仕方をしている。

王権を狙うがためにドラゴリーネを捕獲し、無理に契約を結ばせることがあるらしい。ドラゴリーネ専用の研究所を作り、どのような人間がドラゴリーネに選ばれるのか研究している施設と噂されているが、実体はドラゴリーネを使った実験施設だ。

近年、ドラゴリーネの鱗を摂取すればシエルター外では吸えない新鮮な空気を吸えるようになることが判明し、鱗から生成された金属は切れないものはないと言われ、刃物類に加工されるようになった。

「……お前、俺の匂いが分かっていると云うのか？」

人の言葉を話すことが出来ない幼生体。百歳を超えていれば言語も通じるようになるがそこまでの年齢に達していないか、百歳手前か。

「コミュニケーション取れないのが一番面倒だよな……」

言葉が通じなければ、コミュニケーションも含めて相手の気持ち伝えるには限界がある。ヒロトはポケットの中から豆を取り出し

て、幼生体の口元へやる。すんすんと鼻を鳴らした後、幼生体は豆を咀嚼した。

「きゅ？」

こてんと首を傾げる幼生体を放っておくほどヒロトも鋼の心を持ち合わせているわけではないので、はあっと溜息を吐いて幼生体の額に人差し指を充てるとマルーを唱え始める。

「これで喋れるようになったはずだろう？」

「何故話せるようにしたのだ」

存大な口調で聞いてくる姿はさすが王族といったところか。

## 門前の邂逅 2

「コミュニケーションを図るためだ。ドラゴリーネの発音はまだ解明途中のものが多いからな。これは俺が調査した試験薬だ」

「コミュニケーションね。貴様変わっているな。突如現れたドラゴリーネが人間に懐いた時点で人間は恐れをなして逃げ出すのが一般的だ。貴様は逃げ出すどころか、ドラゴリーネが懐いた人間だ。貴様、何者だ？」

きらりと銀の瞳が一瞬輝き、ヒロトをじっと睨む。幼生体であっても、王族の身分。威厳は幼生体の時点で見ているようだ。ただの人間であれば、屈服しそうになるほどの殺気だがヒロトは諸ともせずにつつと嘲笑した。

「愚問だね。俺は俺でしかないよ。……ただアドツプテイドにいた、と言えば多少なりとも理解は出来るんじゃないのかな？」

「なるほど、我が領地の出身者であったか。だったら、尚更。私の身分を知っておきながらそのような口を叩けるとはな……気に入った、我は貴様の配下に就いてやるうではないか」

「俺は始めからそのつもりで試験薬を食べさせたんだけどね」

「貴様！ 最初から我を！！」

「権力争いに巻き込まれるのはゴメンだけど、お前を此処に放置しているほど俺は悪ではないからな。ドラゴリーネの幼生体、しかも王族の証を持つ幼生体を他人が見付けたらどのような反応を示すか分かっていて、お前も俺の前に現れたのだろうか？ 俺は慈善でお前を保護してやるうとしているだけだよ」

ポケットの中に入っていたリボンを取り出して幼生体の首に蝶々結びに巻いてやると可愛げが増して、ヒロトは幼生体の頭を撫でた。

「子ども扱いするでない！！ 大体、このリボンは何のつもりだ！」

短い手を伸ばして撫でている手を退けようとするが、届かずもがく姿が可愛くてヒロトは笑った。

「あー俺さ、これから学校に行かなきゃいけないんだ。ハーフがいても純血のドラゴリーネの幼生体を学校の中に連れて入れれば混乱するだろうが。リボンに姿隠し（バニツフェ）のマルーを掛けておいたからね。あと首輪がわりかなあ」

「な、なんと！ 貴様、我を動物扱いしおつてっ！！ 我をどこまで愚弄する気なのだ！？」

「愚弄なんてしてないよ。言っただろう？ 俺は権力争いに巻き込まれるのはゴメンなんだ」

見失つてもすぐに分かるようにちゃんと鈴付きの首輪を着けたらもっと可愛くなるのかなとヒロトは思った。怪訝そうに睨みつけてきても愛らしさは変わらずに大きな銀の瞳でヒロトを見てくる。

「貴様よりも強いマルーを持っていれば我を見破ることも可能ぞ。

それに何故姿隠し（バニツフェ）が使えるのだ？ そのマルーは王族が持つ属性しか使えぬもの。貴様のような一般人が使える術式ではなかったはずだが」

「確かに俺はそこら辺にいる一般人だ。ちょっとだけドラゴリーネに詳しい、ちょっとだけ嗜みとして剣が使える一般人だ」

「一般人は剣を持たぬぞ。持つのはシエルター外のザコを倒す討伐隊だけだ」

「……なんだ、そこまで知ってるんだ。でも俺はあくまでも嗜んでいる程度にしか過ぎないよ」

「貴様がそういうなら今は納得しといてやろうではないか。」

我、ルオン・G・スコピリオツヒはヒロト・アガムントと契約す」

聞きなれない言葉が脳内に流れ、包帯に包まれている右手がじわりと熱を持ち始める。ヒロトを中心に契約術式が形成、展開されヒロトは銀色の光に包まれる。基本的に人間・ドラゴリーネ共通として術式は発動主の持つ属性の色で構成される。大体が瞳の色と関係しているため、幼生体の場合銀色だ。

右手を覆っていた包帯が弾き飛び、包帯の下から見慣れぬ丸い銀色の宝石が出てきた。術式を唱えていた幼生体　ルオンの目の色

が変わる。王族の紋様が宝石に刻み込まれた後、光が止む。じつとルオンは宝石を見詰めた。

「……貴様、もしや」

「俺は、普通の一般人でありたいんだよ。権力争いは望んじやいな  
い」

「ほう、この学園に入ること自体、権力争いから逃れることは叶わぬと思うがな」

学園のことを知っていきそうな口調で言うルオンにヒロトはフツと口角を上げると、ヒロトは言った。

「ああ、この学園の噂を聞いているのか。第一継承者は何でも知っているんだな」

「我らのことを道具として扱わぬ者達が集まる学園だと聞くが、実体はどうだが知れぬな。学園が隠しがついても内情は自然と耳に入ってくるもんだ」

「へえ、多くは語らないということとは良くない噂の方が多いだ。もしかして、此処に入るために送り込まれた？」

「何故そう思う」

「そう思うのが妥当じゃないのか？ だけど王族級のお前が学園に入ったところで優遇されるどころか面倒な扱いになるのは目に見えているよな。これは俺の仮定だが、お前は自分のパートナーとなる人間を探しに学園に入ってこいと命令された。だがお前はまだ幼生体のままの姿で人化を取ることが出来ない。困ったお前はこの場に待機して、ある程度力の持った奴が現れるのを待った結果、俺が現れたというところかな？」

「……………」

「無言は肯定と受け取ってもいいのかな。だが俺はお前を匿いながら学園に通うなんてごめんだね。もう一度言うが俺は権力争いとか面倒なことは避けたいんだ。特に国が絡んでくる大きなことにはな  
「お前じゃない、我が名はルオンだ」

訂正しろと言うルオンを無視して、ヒロトは肩を撫で下ろしながら

ら言った。

「ただお前は俺の了承無しに勝手に契約を結んでしまった。契約解除するには俺がお前の死だ。俺はこんな所でさっさと死ぬつもりは一切ないからな。仕方ないから契約主ではいてやるよ。巻き込もうとするなら禁術でもなんでも使って契約解除してやるから」

「お前という名前じゃないと言っている。我が名は」

「名前はモノを縛るというからな。無闇に名前を名乗るもんじゃないぞ。しかもお前が言っている名前は親から与えられた名前だ。その名前を俺が口にするのはお前を縛ることになる。ま、俺とお前は契約で結ばれてしまっているから俺が何と呼ぼうが勝手なんだがな」  
「安心しろ。我が名は高名な故、他の者に名乗ったことはないのだ。そもそも契約者と家族以外名前を名乗らぬし、成体になるまで名前を公表しないのが通例だ。よって我が名はまだドラゴリーネの間でも名前が通っておらん」

「それでも俺は呼ばないよ。お前なんかルーで十分だ」

「なっ！ 貴様、我をそんな扱いにしているのか!？」

「俺が良いと思っっている。それに一回名前を付けた時点で『ルオン』ではなくて、『ルー』だ」

ぐつと唇を噛み締めるルオン　ルーにヒロトは厭味つたらしく頭を撫でてやった。短い手で撫でている手を叩き落とそうとしてくるが届かない。

「貴様、我を縛り付けるとは何事だ!」

「俺が望んでやったんだ、素直に聞きやがれ。それとももつと変な名前の方が良かったのか？ 放送コードに引つかかるような猥褻な言葉とかバツ印で隠されるような隠語とか。俺のセンスを舐めないでほしいよな」

「貴様、どれほどまでに我を侮辱する気だ!？」

「じゃあ、ルーも俺のこと名前で呼んでくれたらちゃんと名前で呼んでやるよ」

牙を剥きだしにして唸るルー。愛玩動物として一日中観賞してい

ても飽きない可愛らしさだった。

「ぐっ……」

「どうなんだ？」

「……ひ、ひっヒロト」

「ん？ なんだい、ルオン」

顎の下を擦ってやるとルオンは顔を赤らめてそっぽを向いてしまった。

「あ、後で覚えておけよ！」

「覚えていたらね。さて、と。いい加減学園内へ入ろうか。ルオンは忘れていたようにだけど、ルオンの姿を消しているから傍目から見れば俺は変な人だし。誰も見てないことを祈るしかないがな」

ひよいとルオンを持ち上げて抱き抱えたとじたばたと暴れるルオン。はあと溜息を吐いた後、ヒロトは肩にルオンを乗せて学園の門を仰ぎ見た。

## 血の気が盛んなお年頃

「この機械を試してもらおう！ 一列に並べー！」

上級生の声にグループごとに固まっていた新入生が我先にと並び始める。

机に置かれていた機械を遠目に見たヒロトは眉間に皺を寄せてぼやいた。

「何がどの種族も属性も差別しないだよ…思い切り差別しているじゃないか」

「所詮、人間なんぞ自らの種族と相反するモノとは共存出来ぬと言いたいのだろうな……」

ヒロトの肩で謙遜するルオンにヒロトは苦笑するだけだった。

「共存していたアドップテイド出身者は異質にされるわけだな」

「アドップテイドは別の意味で異質だ。シエルター外の駆除など好き好んで行かないわ」

「それもそうだけどな。戦闘好きだと思われているんだろうな。または血が好きなバケモノだとね」

ぎゅつと右手を握り締める。

「否定は出来ないな。元々ドラゴリーネは血に飢えた動物だから仕方ないと言ってしまうえば、それまでなのだろうが。アドップテイドは軍人を養成する街として栄え始めたし、武芸を嗜むためにはドラゴリーネとの戦闘も重要だった。やがて人化に成功したドラゴリーネは人間との間に子孫を儲けるようになった、と。この学園の目的もまたその子孫を飼い殺すための施設のうちの一つにすぎんな。それにここは第一洲。国の施設も集まる場所だ。軍関連施設も多い。あの機械で調べて、学園で育成した後軍へ送り込むつもりなのだろう」

「へーやり方が汚いのは前から変わっていないんだな。さんざんアドップテイドでやってきたことなのに」

皮肉めいた眩き。ルオンは苦笑いを浮かべるだけだった。公にされていけないが、アドップテイドにないと知らない事実。それを吹聴するつもりはないし、言ったところで誰も信じないだろう。

「ねえ、キミ。さつきから独り言大きくない？　なんか変わっている人だと思われちゃうよ」

後ろから声が掛けられ、振り向くと少女が二人、笑顔を浮かべて立っていた。

「そういうあなたはもっと変わり者だと言われるんじゃないのか？」

「よく言われる。ねえ、キミ名前は？　あたし、サクルーウエ。第一洲の出身なんだ！　サクって呼んで！」

ケラケラと笑う少女　サクはすつと手を差し出してきた。ヒロトの肩にいるルオンはニヤリと笑っていた。ルオンの姿が見えていれば、デコピンなり殴るなり出来るのだがそれが出来ないのをヒロトは悔しがった。大きく手が打てないヒロトが楽しかったのか、ルオンは腹を抱えて笑い出した。

「私、マニフォルド。マニって呼んでください」

「マニにサクね。俺はヒロト。今日、第一洲に来たばかりなんだ」

「ほー第一洲にしては珍しい他シエルター出身者だね！　他のシエルター出身者はハルフの人だけだと思ってたー人間も住めたんだねー」

「あんな奴らと一緒にしてほしくないんだけど」

偏見も良いところだ。だけでもヒロト自身ハルフと一緒にされたくないし、同一の思考を持っていると思っただけ欲しくないのが本音だった。

いつでも血が見たがり、気は短い。些細なことにいちいち腹を立てていると言っても過言ではないのだ。

それが本能と言ってしまえば仕方のないの一言で収まってしまっただが、収まってくれないのが彼らの特徴でもある。

すると更に後方から紅色の髪の毛を持った三人組みの少年達が肩を揺らして近寄ってきた。じりじりと伝わってくるのは殺気。新入

生の中にもハルフがいてもおかしくないのに、反感を貰うような口調で言ったヒロトにも責任はあるが、ヒロトはわざと挑発したのだ。その証拠にこの三人組の少年以外にも殺気を走らせてくる者がいる。「なんだあ。お前、ハルフを馬鹿にしているのか？」

「馬鹿になんかしてないよ。ただ血の気が多い奴らと一緒にされたくないだけだし。そうやってすぐにケン力を売ってくるから他のシエルター出身者は気の荒い者が多いと勘違いされやすいんだし。少しは自分の行動に気を配ったらどうなのかな」

「ヒロト君って結構言うんだねえ」

「ヒロト！ 何やってんのよ、馬鹿じゃないの！？ ハルフを煽るような真似して！」

罵るサクにヒロトは耳を貸さずに三人の前に立った。

「て、テメエ！ ハルフを馬鹿にするのも大概にしとけよ！！」

ばちりばちりと火花を立てて、紅色の髪の毛の少年は腕に鱗を出現させ肉体を強化し始める。腕は紅色の髪の毛と同じく紅色に染まっていた。残りの二人も肉体を強化し、牙と鱗、角を生やす。

それを見て、怖気付くどころかヒロトは面白いと言ったように口角を上げた。

「おお、こんな所でドラゴ化しなくても」

「一族の恥晒しが。あんな低俗がいるから一族は下賤に見られるのを知らんのか」

「知ってるからこそ逆らっちゃうもんなんだよねえ。自分の行動を顧みないのはルオンだって同じさ。さて、どうしたものか」

虫ケラを見るような金色の瞳でルオンは三人の少年達を見下した。ハルフとはいえ、ルオンと同種。同種のモノがする行動を良く思っていないようだ。ヒロトがルオンと同種ならば同じ反応をしていた。

「ヒロト、貴様！ さらに我を馬鹿にしたな！？」

「さあ、な。でもハルフにしては力の弱いようだな。お前の気配を確認出来ないようじゃ……………」

「その口黙りやがれ！！」

少年にとってはヒロトは独り言を言っているようにしか見えない。独り言に愚弄されて怒らないハルフはいない。

ぐっと拳を握り締めて振りかぶる。狙うは頬。威力は顔面の骨を砕くほどだろう。

がぎい、ん…と鈍い鋼鉄が混じり合う音が講堂内に響く。

鋼鉄に強化させた腕で受け止める。火花が飛び散ったのは属性同士が反発したためだ。属性は大体髪の色と目の色で決まる。紅色の髪を持つ少年の属性は『火』だ。ならば火属性に克つ水属性の鋼鉄を身に纏えばいい。

一瞬で少年が繰り出してくる攻撃属性を見極め、受け止めるには動態視力と反射能力が必要だ。

ハルフが繰り出してくるスピードは音速に及ぶ。年齢の若いハルフならどうにか一般人でも視界に留められる速さだが、人間の血が混じっていないドラゴリーネ相手だと視界内に留めることなく即死するスピードだ。

この少年はハルフの中でもスピードがまだ遅い方だったようだ。

「おっと、あぶね」

「な!？」

「マルーを詠唱しないでだ!？」

驚愕する少年。受け止められた鱗が蒸発しバラバラと落ち始める。鱗はすぐに再生するにしても、剥がれ落ちる時・再生する時に強烈な痛みを帯びると言う。痛覚麻痺ストレージの肉体効果を掛けていれば話は別だが。

ヒロトは両腕に凝氷アイシーの肉体効果のマルーと共に痛覚麻痺ストレージのマルーを同時発動、展開する。

## 血の気が盛んなお年頃2

はあっと肩に乗っているルオンが盛大に溜息を吐いた。

「ヒロト、さつさと片を付けては我がつまらぬではないか」

「あーとさだだったから仕方ないでしょ。それに速く退けないと溶けても知らないよ」

「テメエ、ふざけんな！」

別方向から降りかかろうとしているのは炎矢だ。ファイボル ヒロトに到達する前にセ氏百度の冷気に当てられ、消滅する。ちつと舌打ちをし、少年は更なる攻撃を仕掛けようとマルーを詠唱し始める。ぱちぱちと火花が飛ぶ音と共に腕に纏う焰。

相反する属性のマルーを使うと分かっているにもかかわらず、負けると悟った時にあつさり引くだろう。それを少年はしない。半分しか受け継いでいなくともドラゴリーネのプライドがそうさせているのか。

ハルフは元々考えは人間寄りではないので、ヒロトが持つ考えは彼らにとって邪道だ。

「ふざけるなと言われても。講堂が燃えたら堪らないだろ。そんなことも考えられないほど稚拙な頭を持っているのか？ 範囲指定講堂内、以下を持ってセ氏マイナス百度の全面凝氷とする」オルアイシー

ちよつと待てという声が講堂内のあちこちから上がる。ヒロトを中心とし、講堂の床が凍り始める。

各々が結界を張ったり、肉体効果として保温を施していく。

「ほお、広範囲の指定が出来るのか。やるな、ヒロト」

「ヒロト君、すごい……」

関心するルオンにヒロトは苦笑いを浮かべた。

圧倒的な不利の状態を形成された少年は舌打ちをするしか出来なかった。下手すれば自身の身体が全面凝氷の対象となり、凍ってし

まう恐れがあつたからだ。全面凝氷に対抗出来るほどの火属性のマルーを扱えれば、全身を焔に覆つて対抗可能だが、そこまでのマルー力を少年は持ち合わせていないようだ。

「くっ、くそおおおー！」

ぴりりぴりりと少年の足元から氷が形成されていき、少年は足を固定される。

基本的に自分の持つ属性と反発する属性のマルーの使用不可能のため、少年は自己保温能力に賭けるしかなかった。

顔が徐々に蒼褪めていき、生気が奪われそうになった時、制止の声がかかった。

「はい、そこまでー君、マルーを解いてくれないかな。学園内での殺傷は王国が定めている法律に基づいているんだよね」

「ああ、そうなんですか。てっきり除外対象かと思つてました」

除外対象である幹部養成施設を含む軍関連施設内での殺傷は法律に準拠されない規定となつている。

王立学園にしても実体は軍幹部養成施設と言っても過言でないため、ヒロトは準拠しないと思つていたのだ。

解除のマルーを唱え、ヒロトはふうつと肩の力を抜いた。制止した上級生と思われるネクタイを締めた青年を見遣る。

「ああ、そこは新入生の誰もが思うことなんだよね。内外にも我が学園のことはおのずと知られているし。一応王国の機密事項ではレベル4くらいに位置付けられているんだけどね」

「そうだったんですか。俺は風の噂で耳にしただけなんですけど、そんな重要事項を話しても良かったんですか？ 隣国からのスパイだつている可能性だつて捨て切れなない。……俺もその一人かもしれないんですけど」

先輩から発せられる殺気にも似た空気にルオンは気付かれないように息を潜める。無詠唱でヒロトはルオンに掛けていたマルーを強化し、ルオンを隠した。

「それはないと思うよ、ヒロト君」

「何で？」

ヒロトの後ろにいたサクが口出ししてくる。

「学園の門があったでしょ？ あれは学園に入学する上での第一関門。悪意を持った訪問者を弾く仕組みになっているのよ」

「へえ、学園の門を潜り抜ける時点で悪意を持っていなければ関門は突破出来るんじゃないの？」

「そ、それは公表されていないんですっ！ 学園が軍関係者養成施設だと知られていても門の秘密までは」

「マニは軍志願しない方が良いね。すぐに喋ってしまいそうだから  
「あ……」

門だけじゃないとヒロトは感付いていた。門の秘密が外部に知られているならヒロトも耳にしているはずだ。だが知らない。

おそらくは学園内でのカリキュラムで記憶が矯正されて、軍を退役したとしても話さないような仕組みが確立していると考えるのが妥当だろう。

「まあ、気にしない方がいいよ。カリキュラムを積んでいけばどんなヒトでも軍関係者の一人になれるくらいまでに成長するから」

「……………」  
恐ろしいと思った。

「君たちが騒ぎ起こしてくれたおかげで判別作業が滞ってしまった。あ、君は特別科に決定しているから教室へ向かってね。異論は許さないから」

「そんなことが認められると言うんですか。先輩が何しているか俺には理解できませんけど、濫用になるんじゃないでしょうか」

「言ったよね。異論は許さないと  
「……………」

ぐつとヒロトは唇を噛み締めた。ぎらりと光る瞳に怖気付いたのではない。ただ意見が認められないのが悔しかった。一度先輩は目蓋を伏せてからヒロトの肩へ視線をやった。

「それに、君何で彼を連れているのかな？」

「彼、とは？」

「君の肩に乗っているドラゴリーネの幼生体のことだよ。昨日一匹脱走してるんだよね。学園はドラゴリーネの保護もしているんだ」

「そうだったんですか。てっきり研究という名前で縛り付けたドラゴリーネが脱走したもものばかり思っていました」

「ヒロト、言いすぎだよ！」

「ヒロト君……」

「ほう、君一般人だよ。何でそこまで知ってるのかな」

「知り合いと風の噂で小耳に挟んだだけです。常識程度に知っているだけですって」

「常識の範疇から既に外れている……ちょっと来てもらおうか」

ぐっと腕を掴まれる。どうせヒロトの意見など聞いてくれないのだからとヒロトは何も言わずに先輩に引きずられていった。

ざわめきの止まない講堂には心配するサクとマニが残された。

## 人型を取ってみる

「……あんなこと言わなくなつてよかつたんじゃないのか？」

「お前が騒ぎを起こすのが悪い。久しぶりだな、ヒロト。元気にしてたか」

「元気じゃなかったら、こんな所へ来るか」

「ヒロト、紹介しろ」

今まで気配を殺していたルオンが口を開く。先輩が敵ではないと認識したらしい。

「ああ、ルオン様か。ヒロト、よく見付けたな。しかも首輪付きか  
…既に手懐けているとは思っていなかったよ」

「……様付けしなくても良いわ。で、ヒロト。我にこ奴を紹介する  
が良い。貴様との関係が知りたい」

「簡単に説明すればヒロトがこの学園に來た理由を作った人、かな。  
ヒロトとはアドップティドの幼学校時代からの親友さ。名前はシュ  
エ・アガテ。美化委員長してます」

「ほーヒロトが来るきっかけとな。ヒロト、話を聞いておらんぞ」  
「言う必要がなかったからね」

「なっ!？」

ぱっさりと切り捨てたヒロトにルオンはふざけるなど言わんばかりに牙を剥き出す。

「ハルフの統制だよ。純血の君には分からないかもしれないけども、  
人間の手には負えなくなつてきているんだよ」

「ヒロトも人間のはずだが……」  
唸るルオン。

「ヒロト、契約時にルオンに記憶の一部をやらなかったのか？」

「必要ないだろ。右手に持っているコレが十分、俺のことを証明しているじゃないか」

「それはそうだけでも……まあヒロトが必要ないと判断したなら必要

なかつたんだろうね」

「我はヒロトと契約を結んでいるんだぞ。我に知らぬことがあつては困るのだ」

「必要ならヒロトから情報を引き出せば良い話だろう？ そんな小さなこともルオン様は出来ないんですか？」

「貴様！ 我を扱けにするつもりか！？」

ヒロトの肩から降りて空中で浮遊し、ギツと睨み付けるルオンにヒロトは苦笑いを浮かべるだけだった。

「そんなに俺のことを知っておいてルオンは後悔しないのか？」

「わざわざ自分から火の海に飛び込もうとする神経が我には信じられないのだ。何故、ヒロトは学園へ来ようと思ったのだ」

「一時的な隠れ蓑と協力者を探すには持つてこいだらう？ 学園はアドップテイドや学園の外と違って、将来を担う者達の集まりだからね。学園に入るくらいの頭脳と武芸があるくらいの生徒がごろごろ転がっているんだ。ハルフの統制を学園で行って実践向きだと証明出来れば自分のスキルアップにも出来るしね」

ヒロトの代わりにシュエが答えた。

「それだけの能力がヒロトに備わつてるとでも？」

「それはルオン様自身が分かつているのでは？ ヒロトと契約することでもルオン様にもメリットがある。契約というものはデメリットもメリットの関係でもあるからね。利益になることを第一に考え、デメリットを最小限に抑える。ヒロトにとってルオン様はデメリットではないと思つただけで違つた？」

チツと舌打ちするルオンにヒロトは苦笑した。

「まあ、俺はのんびり学校生活を楽しもうと思うよ。それを邪魔しない程度で駆除作業を手伝うよ」

「駆除作業か。我が種族以外にようやく大地に現れた新種を喜ぶべきか喜ばないでおくべきか」

シエルター外での大地の状況を思い出して、ルオンは顔を顰める。「ま、喜んでおいたら？ ルオン以外にも強い奴が現れるかもしれ

ないよ？」

「我は隠れている身だぞ、自らほいほい出て行ってどうするっていうんだ」

「隠れていただけじゃ身体鈍っちゃうって。ルオンはまだ幼生体だから人化出来ないんだよなあ。面倒だから大きくなるか」

「は！？ 貴様、我をなんだと…！」

「はいはい、そこまでね。ルオン様、ヒロト。楽しい学園生活を送れよ」

牙を剥き出しにして唸るルオンを宥めたシュエはそのまま去って行ってしまった。

「く…我も人化出来れば…」

「だから一時的に人化させようかと提案してるじゃないか」

「そこまでしなくても良いわ！」

「良いんだ？ もうちょいで成体になれるのは分かるけどもさ。今すぐにでもなっておいた方が便利な時があるよ。特に俺が便利だ」

「いやだな。我は時間の通りに成長していきたいと思っているんだ。貴様の手を借りようなんて真似はしない」

「そ。他の奴はすぐに成体になりたがるんだけど、お前は変わっているんだな」

「ほっておけ。成体から老体になるまでの期間は長いのに比べて成体になるまでの期間は短い。それまでの時間を我は大切にしたいだけだ」

「千年を超える寿命かあ。でもあまりにも時間が長いと何していいか逆に分からなくなるよな。何もしないでただ天命を待つか、気が触れておかしくなるか。長いともどかしいな」

## 人型を取ってみる2

「ただ殺戮を好むようなドラゴリーネになりたくないし、人間にいろいろな扱われるような実験動物でいたくない。平和ボケしているようなヒロトのようにもなりたくないな」

「平和ボケしているかなあ。それでも結構気を張っていたりするんだけど」

皮肉を言うてくるルオンに対して、くすくすと笑うだけのヒロトにルオンは怪訝そうにヒロトを見た。

「まあとにかく、今ヒロトがすべきことはこの学園を謳歌することだろうがな。謳歌といっても芝生でゴロゴロ転がっているようなだけだと我は即刻契約を解除するがな」

廊下から見える中庭の芝生を見て、ルオンは嘲笑した。

昼寝には最適な芝生。森の中でも開けた場所にある中庭は日光浴をする分には申し分ない暖かさだろう。所々にある石のベンチもクッションを持参すれば快適に眠れるだろう。提案された煩惱がヒロトの頭を過ったが、小刻みに振って邪念を吹き飛ばした。

「はいはい。昼寝のためにこんな所に来るくらいだったら別の所で昼寝するね。あんな所だといつ襲撃に遭ってもおかしくない。こちらから迎え打つには便利そうだけど。こうも校舎から堂々としている場所で暢気に昼寝する神経は俺にはないなあ」

「日が照っていると影シヤデーが使えないしな。我らにとつて太陽は恵みだが、日光浴も出来ないのが悔しいわ……」

「ああ、ドラゴリーネは光合成も使えるんだっけか」

目以外の皮膚を覆う鱗を使って、ドラゴリーネは体内で二酸化炭素を酸素に変換し呼吸している。えら呼吸と仕組みを同じくして、シエルター外に漂っている六価クロムを浄化する作用を持ち合わせている。

人間を構成する物質の一部が六価クロムへと変化しているために

生きられる。有機物質を变化出来ないから人間はシエルターで防護して空気を浄化しないと生きられない。これが現在でも超越しえない境地だ。

ドラゴリーネは万能な動物と言っても過言ではない。今や人間がこの先生きられるか左右している存在でもあるのだ。

「ただどルオンの鱗だと酸素を作るところか反射して作れなさそうにも思えるな。綺麗だからいいけどさ」

すつとルオンの鱗に手を伸ばし、一枚剥ぎ取る。ペリ、と乾いた音と共に剥がれ、ヒロトの手のひらに太陽光を浴びた鱗が乗っていた。

「貴様！ 我の高貴な鱗を……！」

「減るもんじゃないし、別に構わないじゃないか。それに一つ聞きたいことがあったのをすつかり忘れていたよ」

「……………なんだ」

すつかり拗ねてしまったルオンにヒロトはルオンの頭を撫でた。

「ルオンは、俺の盾になるの？」

「さあ、な。貴様次第であろうよ。我はヒロトと契約を結んだ。それが事実であり、一度契約したら契約主の死亡が契約破棄条件となる」

「そう、か。分かった。我ヒロト・アガムントは契約を結びルオンへの成長変頂<sup>グロウパニ</sup>を命ずる」

「貴様、何をするっ！」

ルオンの制止を聞かずにヒロトはマルーを展開する。ルオンを中心に複雑怪奇な呪文が広がり、陣から広がった呪文の蔭がルオンの身体に巻き付く。

どくりとルオンの身体が跳ね、内側から眩い光を放っていく。一定の光を放った後、ルオンがいたところに現れたのは十四歳から十五歳くらいの一の少女だった。ぱちりと大きな瞳を開けると銀色の虹彩を持ち、金色の髪の毛を靡かせていた。

「おお、ルオンは雌だったのか」

「……ドラゴリーネに雌雄は関係ない」

むすりとそつぽを向くルオンは、小袖にスカートを合わせたような和洋折衷の服装をしていた。靴はブーツを合わせ、ハイソックスを履くという何とも言えない格好をしている。

腰まで長い金色の髪の毛と白い肌、銀色の瞳は獣化していた時と変わらない色を持っているようだ。

東洋型とはいえ、服装まで準拠しているとは思っていなかったの  
で、ヒロトは上から下までじっくりと見た。

「まあ、雌形体だと口の悪いお姫様だな」

「どうして成長させた」

ぎつと銀色の瞳を向けてくる。殺気を帯びた眼光はまっすぐヒロトを射っていた。

「成長させたのは人化の場合だけだよ。肉体の年齢は変わっちゃいない。首輪の力で人間と同じ力に抑えているはずだから、まあよくてハルフ扱いにされるんじゃないかな」

「我が半分と同じ扱いだと!? ヒロト、お前…!」

ルオンのような純血にとって、ハルフと同じ扱いにされるのは侮辱行為に当たるのはヒロトも知っていた。高貴で傲慢で鋼のようなプライドを持っている純血に対して侮辱行為を働くこと自体、他の貴族のドラゴリーネに睨まれるだろう。睨まれる貴族のドラゴリーネもないからこそ、叩けた。

ぶわりとマルーを開放させて、手のひらに術式を編み込む。

「強すぎる力はセーブしなきゃいけない。お前のマルーは一般人には毒なんだよ。自覚しろ。無闇やたらにマルーを開放するな」

「開放などしていない。我はいつも通りに動いているだけだ」

すぐに答えるルオンにヒロトは溜息を吐いた。

「はあ、とにかく。お前もこの学園に入学するように組み込むからぐつと指を組んで、術式を展開し始める。」

記憶を弄ることは禁術に値するので、口頭の術式形成だけでは不十分なのだ。口頭での術式形成の他に指で術式を組むことによって

成功率を高める。指で術式形成には順序通りに組まなければ、即行術展開は難しくなり、それなりの代価を払う。術者の身体の一部であつたり術者を中心としてその周りにあつたものだったり、代価は様々な方法で支払われる。

危険を顧みずに術を展開したヒロトにルオンはもしもの場合を想定して、術の代価になりうるものをヒロトの周りに氷柱を転がす。

「うん、これでたぶん大丈夫なはずだ」

「ヒロト、我に学生まがいをしると言っているのか」

「まがいじゃなくて、本当の学生だけでもね。制服は自分で生成するよ。それくらい力はあつたらう？」

ふっと笑うヒロト。

「……お前が言うならば仕方ない。学生生活とやらに付き合つてやることにしようではないか」

ルオンは胸を張って鼻を鳴らした。

## にわめ

スピアット学園の制服はブレザー決められており、学科ごとにネクタイの色が違っている。新生は一律で紺色のネクタイの着用が義務付けられている。

新生と上級生では明らかに習っている魔法学の知識の違いが出てくるので、無闇にケンカを挑まれないようにするためである。一部の新生が力試しとして上級生に勝負を挑むことも無きにしもあらずだが、大抵は上級生に打ちのめされる場合が多い。

学園自体、一つの街を形成しているために他のシエルターへ行くことが出来ないのも、鬱憤晴らしに細々として喧嘩が絶えない。たださえ空間の狭いシエルター内。面積は東京二十三区と同等の規模があるが、毎日暮らしていると狭く窮屈に感じるし、血気盛んな思春期の高校生たちが揃っているのも理由の一つにある。

シエルターという檻。シエルターの外へ出たくとも、重厚な装備無しでは出られない。万が一外へ出た場合は十分も肺が持たずに死亡してしまう。肺を持ったとしても、生体反応に敏感なドラゴリーネ以外の多種生物が人間というご馳走を逃すはずがないのだ。確実とまではいかないがシエルターの外へ出ても生存出来る人間もいるのだが、公表されておらず実際に見た者もないので幻とされている。その人間の多くはアドップテイド出身者ということしか分かっていない。

アドップテイドというのはかつてあったシエルターの名前であり、ドラゴリーネと人間が共存し、ドラゴリーネ側がシエルター内に初めて居住を持った場所である。純血のドラゴリーネが王政を敷き、世界統治機構から独立していたドラゴリーネが統治していた国家であった。アドップテイドに住んでいた人間はドラゴリーネと親密関係を持っており、ドラゴリーネが持つシエルター外で生きられる知識、人間が持つ知識を共有していたため、当時の政府はアドップテ

イドに対して協力せよと通達があつたが、アドップティド側はこれを拒否し続けており、今も他シエルターとの外交を絶つたままだ。ただ自分達以外の人間をシエルター内へ入れないだけで、人の往来を禁じているわけではない。ドラゴリーネという種族が出てきた後のシエルター外の異種生物の生態調査をしているのはアドップティドの居住者であるし、完全に世界統治機構と縁を切っているわけではない。世界統治機構からもシエルターを襲ってくる異種生物の駆除をアドップティドに申し込んでおり、アドップティドは駆除と生態調査で成り立っているような国家だ。

それでも国家として成り立っているのはドラゴリーネの寿命が長いのと、人間との間に誕生したハルフが共存しあっているからだ。ハルフは呼吸器官が人間と同じ仕組みを取っているために完全にドラゴリーネではないのでシエルター外で生存していくのは不可能だ。その研究も人間、ドラゴリーネが協力しあつて改善しようとしている。この研究が進めば、人間の肺機能をドラゴリーネと同じものにし、シエルターの外でも生活出来るようになるかと踏んでいる。その研究が外部で行われているのがこのスピアット学園というわけだ。

アドップティドには教育機関は幼学校しか存在せず、多くのハルフは成年を迎える前にアドップティドを離れた後、この学園へやってくる。というよりも世界統治機構が全ての子どもはスピアット学園に入学し、学ぶという規定があるためだ。アドップティド側も了承しており、基本的に十四、五歳の年齢で入学してくる。

入学後は卒業するまで学園のシエルターから出られず、入校するだけでも事前に書類を申請するなど諸々の手続きが必要になってくる。食糧などの物資は各シエルターで生産することが決まりになっているために他のシエルターとの交流も必要ない。だからシエルター間を往来する定期便も予約無しでは搭乗することも叶わない。

唯一他のシエルターへ行くのが許されるのが年末年始だけ。里帰りする生徒もいれば、里帰りせずそのまま残る者も少なくない。この学園は外界から閉ざされた所なのだ。

そして学園には大きな特徴があった。

ファミリーネームを名乗らないことだ。

規則的には生徒の平等を図っているため、庶民と貴族の区別が付かないようにしているのだが、一定階級の貴族はどうしても顔が割れやすい。権力を誇示する生徒も多いためか、区別が付かないのははっきり言って無理な話だ。

という学園の内情をヒロトはマニとサクに聞いたのだった。

「一番、権力を見せたがるのが武術大会だね」

「ほとんど教科書を揃えて鞆の中にしまい込みながらマニは言った。」

「武術大会？」

「学園で一番、武術に秀でている奴を決める大会だよ。半年に一回のペースで開かれてる」

「ほう、それで。その大会はどちらが強いのだ？」

興味を持ったとルオンは続きを言うように促した。ルオンが興味を持つこと自体珍しいと思ったが、始祖よりもドラゴリーネは感情を持ってしていると聞いたことがあったヒロトは自己納得させてサクの話に耳を傾けた。

「主に人間側を中心としたグループとハルフ側を中心としたグループがあつて、実質的には人間対ハルフの抗争に近い。殺さなきゃ大丈夫という場合が多いから毎回負傷者が絶えないよ」

「殺さなきゃ大丈夫というのがミソだね。つまりは意識混濁者を出したつて、後遺症を持つたつて息をしていれば良いということだ」

「残酷な話、そうなるんだよね。アドップテイド出身者には武芸では叶わないからハルフ優位の状態……でも救いなのがアドップテイド側にリーダーがいないこと。有力者がいても人と契約していたりするから武術大会は人間側が勝つよ」

肩を撫で下ろす。

「腐ってるな。まあ腐ってるのは元からだから仕方ないのか」

「へえ、面白いな。勝者には何が与えられるんだ？ そんな命を掛

けた闘いをするんだ、命に変えられるような対価がなければ闘う理  
由が見出せないな」

「ヒロト君、出るの?」

心配げにマニが訊ねる。

「んー 武術大会には特別な条件があるのだろうか？ 俺はその条件を知らないし、揃ったとしても勝てるはずないよ」

ルオンもまた有力者　　ドラゴリーネ側からしてみれば、崇拜される立場にあるが、ヒロトと契約を結んでいるためにアドップテイド側に着けない。傲慢なルオンがそれを承知で契約を結んできたのだし、ルオンの力は人間と同レベルまで引き下げられている。そう簡単にドラゴリーネ側に気付かれるはずがないのだ。

「ヒロトならエントリーされてるぞ。測定しなかったのはヒロトだけだし」

「は？ どういうことだ…」

「測定に参加しなかったし、ヒロトはハルフと闘って勝利した。その結果もあつて一年で例外に認めると学園側の声があつたらしいよ。去年の優勝者　　ハルフ側のトップが闘ってみたいと直々のお願ひもあつたと噂が流れているし」

「ケンカを買ったのが仇になったようだな」

はつと鼻で笑うルオンにヒロトは苦笑した。椅子に座って足を組み高慢に言い放つルオンに対して、ヒロトは嘆いた。

「大人しく殴られていればよかったのかよ……」

「そう言ってるのではない。貴様は人の話をよく聞かんか」

「聞いている聞いている。耳が詰まりそうなくらい聞いておりますとも」

「それは我に対する嫌味か」

「ルオンちゃんも見てたんだね！」

「ああ、見てる分には面白かったな。それより、何だ。その『ルオンちゃん』というのは！」

「可愛いからいいんじゃない？」

机に頬杖を着いて、ヒロトは前に座ってるルオンに微笑む。顔を真っ赤にさせて憤慨するルオンを揶揄するのはとても楽しいとヒロ

トは思う。

「な……！？ 可愛いだと！？ 貴様、目がおかしいんじゃないの？  
！？ 我が取り出して洗浄してあげようぞ！」

「グロいから！ 目を洗浄しても変わらないから！」  
ルオンが言うのと冗談に聞こえないから不思議だ。本気で目を取り  
出しかねない。

「では視力がおかしいのか？ 視力検査をしよう！ マニ、視力検  
査の準備をするのだ！」

「え、え……？」

戸惑うマニ。準備した方が良いの？とヒロトに目で訴えかける。  
「何を無茶ぶってるんだ。困ってるだろう？ それに俺の目は正常  
に機能しているし、視力も2.0だ。問題は何も無い。それより俺  
はお前の思考が問題に思えてくるんだけど。分かった、俺が洗っ  
てやろう」

「我が狂っているとしても言いたいのか。我は正常な脳をしておるぞ。  
ヒロト、貴様の方がおかしくなったんじゃないのか？」

むっとしてヒロトを睨むルオン。

「二人は仲が良いんだねえ」

「どこが！」

「マニ、どこを見てそう言うのだ！？ レポート用紙五十枚で述べ  
てみよ！」

「見ていて飽きないし、二人が喋っているとコントみたい。すごく相  
性が良いように見えるね」

「こんな傲慢女王様と相性が良いなんて……！」

さらりと事実を述べるマニは意外にも毒舌かもしれない。頂垂れ  
るヒロトにっこりと笑みを浮かべてルオンは肩を叩いた。

「誰が傲慢女王様だと言いたいのかな？」

「……わざわざ時を止めて言うことじゃないだろうよ」

先ほどまで話していたマニとサクは笑顔のまま静止している。

各々の席で座っているクラスメイトもホームルームを続けていた

担任も話している途中で口が開いたままだ。

「まあ、この茶番劇を続けていく者があるのもどうかと我は思っがな。……

我の術式に干渉してくる者がいるようだ」

「相手はハルフだからルオン狙いかな」

「生憎だけでも。我の人化は公に晒しておらぬ。我のマルーに当てられて探してきた奴か、はたまた……」

ふう、と浅く息を吐くとルオンは唇を尖らせて、ヒロトを睨み付ける。言いかけたところでルオンは視線をヒロトから教室の扉に凭れかかっていた少年へ移した。

「へえ、君が講堂で征圧した生徒かな？」

貼り付けたような笑みを浮かべて、少年はまっすぐヒロトとルオンの元へ歩いてくる。少年の視線の先にはルオンがいたが、ルオンはふるりと首を振って否定した。

「我じゃないぞ」

「そんなのあなたじゃないってことくらい分かってるよ。僕はそっちの子に聞いているんだ」

「征圧したからなんか問題でもあるんですか？ 既に生徒会長から

お咎めを受けてるんですけども」

「僕は去年の武術大会の優勝者なんだ。君と是非とも闘ってみたくてね。試合を申し込みにきたんだ」

「ああ、あなたがそうなんですか。ということはあなたがハルフ側のトップということですかね」

興味無さそうにヒロトは言う。

「そうらしいね。僕はそんなつもりはなかったんだけどもね。……

ところでさ、何で君がその方と一緒にいるのかな？」

ピリピリとした空気に変わってくる。

彼が言っているのはルオンのことだろう。だがヒロトから明かそうとせずに彼 デリタルに問う。

「その方、とは？」

「何故、純血であるルオン様がここにおいて、君のような人間という

のだと問いているんだ！」

ギツと殺気混じりの睨みを利かせてくる。

ヒロト達の後ろの窓ガラスにヒビが入る。少年を中心にマルーが円形に展開され、電気を帯びる。ぱしりぱしりと走る電流にヒロトは指先で小さく防御陣を展開させた。感電しても害はないだろうが、高圧電流に変えることはすぐには出来る。保険として展開させるには早めに手を打っておいた方が得策だ。

## この1

「おい、ルオン。純血だと知ってるぞ、お前の姿は知られてなかったんじゃないかったのか？」

「我の知ったことか。それに貴様、名を名乗らず我の前にいると言うのか？ 頭が高いわ！」

「これは申し訳ありませんでした、ルオン様：俺はデリタルという者です。この学園ではハルフ側の指揮を執らせていただいております。俺はあなたを保護しに参ったのです」

跪いて胸に手を当てて敬礼するデリタル。こうしているとルオンの位が高いのだなとヒロトは実感した。しかしデリタルの進言にルオンは顔を顰めた。

「我を保護、だと？ 笑わせるな。貴様のような無礼な奴の加護を受けてたまるか」

「何故ですか！？ 確かに彼はハルフを圧倒する力を持っているかもしれませんが！ ですがあなたの傍にいれるほどの器では…！」

ちらりとヒロトを睨み据え、デリタルは食い下がる。

「ヒロトを見下すのは我が禁ず。ヒロトは我と契約したのだ。これがどういいう意味を持っているか、貴様の小さな脳で理解出来るかえ…？」

「っ。本当にルオン様はヒロトという男と契約を結んだのですか？」

「二度同じことは言わん。我はヒロトと契約した」

「ヒロトにはあなたを守るだけの力があるとしても言いたいのですか？ 我は言わなかったか。ヒロトを見下すのは禁ずと。ヒロトは我と同じ立場にあるべきもので。貴様のような半分しか血が正統に繋がっていない者が我に口答えするでないっ！」

「これは失礼致しました。私の無礼をお詫び申し上げます」

「土下座しろ」

「ルオン、それはやりすぎだよ」

「我は賤のなつてない者は傍に置くつもりはないのだ。無論、ヒロトも然り」

「へえ俺を賤けるとでも言いたいのか？ 愚問だな、俺は誰かの支配下に下るつもりは一切ないね」

「ほう。それでこそ、我が契約者だ」

ふむふむと納得するルオンにデリタルはふるふると身体を震わせて、徐々にマルーを拡散させていく。

「僕は、認めないぞ！ 貴様のような人間が契約者だなんて……！ ルオン様は我々、ハルフが傍にあるべく存在である！ 人間の貴様がルオン様の隣にいるべきお方ではないっ！」

「ヒロト、時間を止めたままやり合うのか」

暢気に欠伸をしつつ、ルオンはデリタルが拡散、展開しつつあるマルーを弾いていく。ピリピリとした空気が教室を包むもヒロトとルオンは全くデリタルの叫びを丸無視してどう対応するか話していた。

「じゃあ、ルオンが別次元開けよ。俺は繋ぐの得意じゃないんだ」

「ほう、ヒロトにも苦手なジャンルがあるのか」

ふむと合点がいったように頷く。

「うお、急に攻撃してくるなよ！」

「今から攻撃しますと言って攻撃してくる奴はいないと思うんだが、貴様はすぐに防げるからいいだろう。留意すべき点は時間を止めていても教室の備品が破壊されることか」

馬鹿にするようにルオンはデリタルが放ってきた火矢を水壁で防ぐ。  
ファイアボールウオータウォール

「だから別次元を開けと言っているのだ。備品を直すのが一番面倒なんだよ。俺は大雑把だからな、細かい作業をするのは俺の担当分野じゃないんだ」

「ほう、今日はお前の不得意な分野を知るいい機会だな。良いだろう、我が直々に我が空間へ招待してくれるわ。感謝するがいい。デリタルとか言っただな、貴様の力も見ておこうか。まやかしの学園に

いる奴の力も我は知っておく必要があるからな」

「おお！ ルオン様に力を見ていただけなんなんて、恐悦至極にございます！！ こんな奴すぐに倒して見せますから見ていてください！！」

「こんな奴扱いされちゃったなあ……」

苦笑いするヒロトに対して、ルオンはすごく怪訝に顔を歪めていた。

ヒロトを侮辱するなど言っただはすなのにとぼやいたルオンを見て、ヒロトは言った。

「まあ、仕方ないよ。相手はそこまで思考が追い付いていないんだ。力関係を見せてやった方がデリタルさんも納得するって」

「君が僕に勝つと言いたいのかい？」

「当然。そうだ、ルオンが別次元を開いてくれないからこれで戦わないかい？」

ヒロトは生成した木刀をデリタルに投げる。

「木刀だと？ 戦闘力ではハルフの方が上だと分かっている、木刀で勝負を挑もうとしているのか？ 君はとんだチャレンジャーだな」

「俺は真剣の方が得意っちゃ得意なんだけどね。うっかり殺しちゃうと面倒だし」

「ハルフを殺す！？ 馬鹿言うのも大概にしておいた方が良くないんじゃないか！？」

「それは、さ。实力を見てから言っただ方がいいと思うよっ！」

ぶんと大きく振りかぶり、ヒロトはデリタルの頭上に木刀を叩き落とす。

右に避けられ、そのまま肩へと狙いを変更して斜めに振り下ろした。木刀同士が交わり、木が擦れて木片が飛び散る。カタカタと木刀同士が揺れ、木刀を握り締めている力が余計に入る。

「ヒロト、我が別次元を作り出せないようなことを言うでない！

我は作らないだけだっ！」

「はいはい。小煩い姑を持ったような気分だな……」

「小姑とは何ぞ!? 小癩な!!」

激昂してルオンはカマイタチを放つ。一旦、ヒロトとデリタルは間合いを取り、それぞれ木刀を構える。

デリタルはまっすぐと剣先をヒロトの喉元へ突き付け、ヒロトは真正面に構えた。

「ルオン、別次元を作ってくれないか? クラスメイトを傷付けたくないんだ」

「……貴様の頼みであるならば仕方ない。我が作った次元を楽しむがいいわ!」

はあと溜息を吐いて、ルオンは自分の席に座る。机を肘掛け代わりに使つてゆつたりと足を組む姿はさながら女王様と言ったところか。左手を掲げるとルオンはふつと息を手のひらへ向けて吐き出す。ルオンを中心に異次元へ繋がる術式が展開され、ヒロトとデリタルも術式に飲み込まれていく。

デリタルはルオンのマルーに当てられたのか恍惚といった表情を浮かべていた。

ハルフには純血であるルオンのマルーが強かったのか、息を荒げて堪能しているようだ。

形成された次元は現実世界と似たような形。一定以上のマルーを保持していなければ、術展開は不可能だ。一人を次元に入れ込むのは容易いが、二人以上となるとバランスが崩れやすく次元を保つにも一苦労である。

「ルオン、マルーを垂れ流しにするな」

デリタルの顔を見て、ヒロトは溜息を吐いた。彼を見て、自分が落ち着こうとは思ってもみなかったがヒロトも若干酔いそうになったのは事実だ。

「垂れ流しなどしてないわ!」

「お前のマルーは一般人には毒なんだよ。規制とか自粛するとか自覚とかすればいいんじゃないか?」

「ふざけるでない! 我は何もしておらんわ! 変な言いがかりを

付けるでないっ！」

「そっだよ。これほどまでの威力、権力溢れるものを人間なぞに渡しておくわけにはいかない…この勝負、僕が勝たせてもらっつっ！」

バシリと脳天目掛けて下ろされる木刀を受け止める。

ルオンのマルーに影響されて、デリタルは半ドラゴ化し始めていた。

先ほどよりも打ち込まれる力が強い。自分よりも上質なマルーを味わった時、力が倍増し感覚も鋭くなる。

## にの1の2

ルオンのマルーは多分、この世の中では一番のマルーの質だろうから当てられたら最後。取りつかれて他のマルーを味わえなくなる。味わえなくなるのではなくて、満足出来なくなるのだ。

血走っているデリタルの瞳はもはや人間ではなくて、一匹の猛獣だ。

面倒になってきたとばかりにヒロトは溜息を吐くとルオンに愚痴を零した。

「あーあ、これじゃあ逆効果だ。どうしてくれる」

「知らぬわ！ 集中しないと舌を噛むぞ」

「そんなへましないよっ、と！」

両手は塞がっていて、出せない。となれば攻撃主体は足になる。木刀を使わせることによって、組印の術式は封じ込められたが、足からの攻撃に反応するのが一步遅れた。

視認してから防御へ移るまでにコンマ〇・一秒ほど。蹴りが脇腹を掠める。一旦足を自分の方へ戻すと足の裏を腹に叩きこもつと攻撃を繰り出してくる。まともに食らったら内臓のダメージは測り知れない。

いくら反射神経が良かろうとも至近距離では反応仕切れない。

人間離れをした力に押され、ヒロトは後退しつつあった。

「押されているではないか」

「お前のマルーに触発されたんだっ！ それがなかったらすぐに決着付けてる！」

「言い訳とは見苦しいな」

ふと笑ってルオンはさつさとしりと促す。

「黙ってる、こういう力比べは得意じゃないんだ」

「ルオン様にデカい口を叩くな！！」

「デカい口も何も。主人は俺だから別にどんな口を叩いたって構わ

ないだろう?」

カチンときたのかデリタルの力がより強くなる。

「ヒロト、お前は煽るのが好きだな。さては踏まれて喜ぶ性質か」  
「生憎、そんな変態な趣味は持ち合わせていないよ。だから、さっ  
!」

一度離れ、ヒロトは構えを独特のものへ変える。

左手一本で木刀を持ち、右足を前に出して腰を低く落とす。相手の鳩尾へ向けて一気に足を踏み出し、一撃で相手を昏倒させる技だ。この法は相手がドラゴリーネ化している時に限られ、威力は身体を覆っている鱗を弾いて内臓へ到達するほどだ。

鉾物の中でドラゴリーネの鱗は最も硬く、打ち破ることが出来るのはこの技を扱う流派の会得者だけ。この流派自体ドラゴリーネの界限では危険視されているが、ドラゴリーネのプライドからか危険と分かっているにも勝負を挑んでしまう者が多い。

「貴様、その流派は……」

「何だ、知ってたんだ。だったらこの威力がどれほどまでのものか知ってるはずだよな?」

「何処の出身だ!？」

「さて、何処でしょう?」

ニツコリとヒロトは踏み込むタイミングを窺う。

プライドが高かったのはデリタルも同じだったようで、間合いを詰めてくる。

「くっ!」

「どうやら流派は知っていても対処法は知らないみたいだね」

この技は一突きで終わらない。一度小幅に踏み出した後、もう一度踏み出して体重を掛けた一突きをするのだ。

「ぐは…っ!」

見事鳩尾に刺さり、デリタルは腹を抱えてその場に跪く。荒く息を吐き続け、げほりと血を吐き出した。半ドラゴ化していた身体が人のものへと戻る。急所を突かれては半ドラゴ化を維持出来なくな

る。むしろ鳩尾を突かれれば人間だって呼吸するのが辛い、そこはハルフと言ったところか。

「身体、主に皮膚組織の作りが人と違うのだろう。デリタルはそこまで苦しそうにしていなかった。ヒロトが力を抜いた可能性もあったが。」

「ほう、意外とやるな。その流派を見るのは初めてだったぞ。会得者は既にいないと思っていたがヒロトが会得していたとは予想外だった。見事なものだ。さすがに我も攻撃されたら危ないだろうな」「本来、人化してるドラゴリーネに使っちゃいけないだけだね。デリタルは半ドラゴ化してたし。ルオンが負けたら他のドラゴリーネに示しが付かなくなるな」

それはそれで困るとヒロトは苦笑する。

「まあ、我には強力な守りがあるからな。それに我は自分の身は最低限自分で守る主義だ。ヒロトに頼む時は我が危険になった時に頼むでしょう。それで、デリタルよ」

「は、い…」

デリタルはようやく息を整えて、ゆっくりと立ち上がる。鳩尾が痛むのか腹を摩っていた。

「貴様の太刀筋は見事なものだったな。だが感情に揺さぶられて我を忘れて打ち込むと筋が乱れるようだ。もっと心を落ち着かせる必要があるな。デリタル、貴様は負けた。冷静になれたのであればどういう意味だか理解出来るであろう?」

「敗者は勝者の下に就く。ですか?」

「そうだ。貴様もヒロトと同じく私の配下になるが良い。契約関係はそれ以上結べないが光栄であろう?」

「そう、ですね。今の僕じゃヒロトに勝てる見込みはまずないだろうな。ヒロト、俺にその流派を教えてほしい。僕はもっと強くなりたいんだ!」

こくりと頷くデリタルに対して、ヒロトは溜息を吐いた。

「却下だな。この流派は俺で止めるから。次代に教えるつもりは全

くないんだ。だからデリタルに教えることは出来ない」

「どうしてだ？」

「この流派は人もドラゴリーネも殺すことが出来る危険な技だからね。人とドラゴリーネが歩み寄って共存していくためにはこの流派を殺さないといけないんだ」

「お前に教えた人は悔やむだろうな」

鼻で嘲笑してくるルオンをよそにヒロトは教えてもらった人の顔を脳裏に過らせた。

「そうだろうね。この流派は過信した人間が考案してしまったものだからね。自分で止めたかったようだけど、俺が見よう見真似で会得してしまった…だから俺はこの流派を教えるつもりはないし、俺は弟子を作るつもりはないよ」

「だが外ではドラゴリーネの他にも動物が生まれつつある。それを駆除するために、その流派を使う者が出始めるだろうよ」

「教えてもらった人と俺が会得したのはシエルターの外だし、この流派は口伝なんだ。文書も俺が燃やしてきたし、体得時には古代語を使用するから読めないよ」

流派を会得するためだけに勉強した古代存在したと言われている日本語を思い出した。直線と曲線で構成された日本語は文章としてあるだけで、式を構成することが出来る。だが文章として紙やフィルタに書いてあるだけで式は発動してしまう。構成上は非常に簡易に作られている者であり、使用者によっては誰でも使える魔法なのだ。つまり何気ない文字だとしても、一文字一文字が構成対象であるために魔法を使うことが可能となるために禁術とされている。日本語だけは言霊が宿るとされていたせいか、何気なく日常会話に含めただけで発動するという。

ドラゴリーネでも旧アジア地区に棲息していたドラゴリーネしか使えない。旧アジア地区は現在、プレートテクトニクスの影響を受け、一万メートルほどの高さまで隆起したため土地自体存在していない。原典を探しに行こうと思っても土地がなければ探しにも行け

ない。生存者に聞こうにも旧アジア地区生存のドラゴリーネはドラゴリーネの中でも稀少で、絶滅阻止指定にされているほどに頭数が少ない。政府によって管理されているドラゴリーネも少数おり、古代語とともに口伝の流派を復活させる目的もあると言われているので、容易に教えられない。日本語自体、言語の中でも習得するのが簡単とされているだけにこれ以上口を割れない。またこの流派は攻撃だけを目的としているために悪用されれば、醜い争いが再び起きかねないのだ。だからなのか口伝でも教授はシエルターの外で行われる。反乱分子が生まれてしまった場合にドラゴリーネが残るために発案された流派なのだ。シエルターの外へ行けなければ流派を会得出来ないのと同じ。何人も習得しようとしたが条件が叶わず習得出来なかった者がいたのをヒロトは目にしてきた。

## にの2

「シエルターの外だと…？　どんな防御服を作ったって、人間がシエルターの外へ出て生きて帰ってこられた者はいないと聞いているんだが……」

「んー俺が住んでいた所は特別なんだ」

ヒロトはこれ以上聞かないでくれとばかりに口を濁す。状況をある程度知っているルオンはふむと頷いた後、デリタルに言った。

「ほう。仕方ないから今はそれだけに留めておいてやるうではないか。分かったな、デリタル」

「は、い」

「うん。素直で宜しい。これでお前達は友達だ。我を守る要人でもあるがな」

「はいっ！　あなたの傍にいられるならば……」

輝くデリタルの瞳を見て、ヒロトは凶鑑に載っていた犬のようだと思った。犬は犬でも愛玩用の犬でなく、狩猟用の飼い主にしか懐かない特殊な犬だ。

「それでデリタル、我は人間側に付いているが人間と慣れ合うのはヒロトのみだ。我の力はヒロトによって管理されている。学園にいる他のドラゴリーネに我の存在が知られても困るのだ」

「ルオン様の力を隠したいのは分かりましたが、ルオン様のマルーはお強い。人間と同等に力を抑えられていたとしても気付く者はすぐに出てくると思いますが……」

「俺が弱いとでも言いたげだな」

不満げにヒロトは溜息を零す。力の差を見ても怯まないとところがハルフと言ったところか。もっと本気を出せばよかったかとヒロトは考えたが、もう一度力を示したところで屈服する相手ではないのを知っているのではない。

「ヒロトの力が未知数なのは分かっているが、ヒロトもまた学園に

来てから目立ちすぎた。少しは力を抑えて自粛した方が影響を与えないと思うんだが」

「俺もまた人間側にとってもドラゴリーネ側にとっても脅威の存在として早くも認識されつつあるということだな」

「言ってしまうえばそうなりますね。ハルフを相手にしても怯む様子もなければ手のひらで転がすように闘っていた。この学園の側面は軍備機関と言っても過言じゃないですから、武術大会で結果を残せばすぐに軍からの召集が来てもおかしくないと思います」

「軍備機関ね。武術大会もそうだが、争わずにいられないんだな。人間とドラゴリーネの他にこのシエルターに動物は存在しないというのに何の脅威に備えて軍備を整えているんだろうか……」

「外に残っているドラゴリーネの他に異種生物が誕生しているとの発表がありましたし。防護服を準備出来れば異種生物を撃退するのでしょうか」

「ようやく生物が見つかったというのにも関わらず、自己が危険だと判断すれば倒す。ドラゴリーネと人間、どちらが醜いのか……」

シエルターの外の生物を思い出して、ヒロトはくすりと笑った。

彼らもまた大量絶滅から難を逃れたか、環境に対応しようとして生まれた生物の一つなのだ。どの生物も必死に生きようとしているだけ。邪魔する権利など持ち合わせていないはずなのに。

「君はどちらの味方をしているんだ？ 人間も嫌っているように俺は見えるんだが」

「どちらの答えも不正解だ。俺はどちらとも嫌っている。中途半端になっっている奴を山ほど見たせいだろうな。どちらが嫌いかわかれればどちらとも嫌いだ」

「随分はつきり言うんだね」

「だって身勝手じゃないか。自分達の争いで行き場を失くした拳句、共存という道を歩もうとしないのだから……」

「この学園の生徒会に言っただけでやりたいな」

「生徒会が何故出てくるのだ？ 変な真似事を行っていると言うの

か

「この学園は国から独立して発言する権限を持ち合わせているからね。この学園で権力を握っているのは生徒会と言っても過言じゃないんだよ」

「なんか面倒なんだな…俺間違つて学園に来てしまったかもしれない……」

「我と会ったことに後悔していると言いたいのか!」

はあと大袈裟に肩を撫で下ろして、残念がるヒロトに八重歯を剥き出しにして唸るルオン。

「そんなこと言ってるつもりはないよ。何を勘違いしているんだ。それに俺はルオンに巻き込まれた方だ」

「我と出会わなければよかったとも言いたいのか…?」

「ルオン様を悲しませるとは貴様、ただじゃおけない!! ルオン様を無碍に扱うなっ!!」

眉を下げて切なそうにヒロトを仰ぎ見るルオンに心を奪われたデリタルはヒロトの胸倉を掴み上げた。

「別にルオンと会ったことを後悔しているわけじゃないさ。俺が悔やんだのはこの学園のシステムだよ。一生徒でしかないのに、国と同等の発言権を有しているのが残念だと思っただけさ。この学園は野放しに出来ない HALF の子どもを入学させることが多い。逆を言えば HALF の子どもがクーデターを企てることだってあり得る話だつて言ってるんだ。現に生徒会を中心とした派閥はクーデターを企てているのだろうか? 生徒会は人間と HALF の半々で構成されていると聞くしな。世間体では HALF を嫌っているフリをしておいて、裏では HALF の味方をしている人間だっている。一学生の意見を取り入れるのも国にとっては良い意見のうちに入ると思うが寝首を掻かれるのは非常に滑稽な話だ」

「……確かに滑稽な話ではあるな。だが、何でそこまでお前は詳しいのだ。学園のシステムも、伝わっていない流派を会得しているのも実に興味深いことだ。生徒会に知られたら一般生徒ではいられない

くなるだろうな」

「面倒事に付き合うのは端からゴメンだし。ひっそりと暮らすつもりではいるけども、ルオンといるだけで一般人とはかけ離れてしまふものなのだろうな。それに、去年の武術大会の優勝者がここにいるんだ。生徒会と何らかの関わりを持っていたっておかしくない。どうなんだ、デリタル。デリタルの返答次第では策を講じなきゃいけない」

デリタルが何を言うかなんて関係なくヒロトはデリタル自身に術式を展開しようと、記憶術式の計算式を脳内で編み出す。他人の脳細胞に干渉する記憶術式は練り上げる計算式の数が増大するため、スーパーコンピュータ並みの構成員、高い計算能力が求められる。計算能力が著しく高い一族がかつていたのだが、その一族は離散し記憶術式もまた幻の術式と扱われている展開式だ。この一族以外だとかつてアドップテイドにいたとされるドラゴリーネの種族と国を収めている直系王族が使用可能とされているが、王族に使える者はいない。といっても王族側は自身が使える展開術式の公表をしない旨が定められているために誰が使えるか把握できない。

ヒロトが使えるのは、昔使えたドラゴリーネに直接教えてもらったからだ。

「……………」

「答えぬなら、私の傍にいらなくてもいいわ。私の警護はヒロトだけで十分だ」

「もし、僕が敵だと分かった場合どうするのですか？」

「聞いてどうするのだ。反対術式を展開してみるか。私に無駄足を取らせてみるのか。どうなるかは貴様の返答次第だがな。我はヒロトが何をするか検討も付かないがな」

「いいよ、ルオン。そんなに警戒しなくてよかったばらせるのは簡単なんだからさ。返答次第と言っても俺がするのは決まっているから」

「ええええ…待って！ 録画媒体用意するから！」

「デッコピンッ！」

すいっと瞬間移動させてデジタルの前に立つとデジタルの額目掛けてデッコピンをすると同時に練り上げていた記憶術式をぶつける。受け身を取る暇もなく、デッコピンを受けてしまう。そのまま仰向けに倒れた。どうやら失神してしまったようだ。

## にの2の2

「容赦ないな」

ルオンはしゃがみ込んで失神している。デリタルの額を突く。指の腹ではなくて爪で突くルオンに悪意を感じる。段々爪の痕が額に食いこんで痕が付いてしまっている。

「何のこと？ この展開術式は作動したか確認取れないのがデメリットだな……何処で記録が取られているか分からないし。脳に何らかのダメージを与えるものだとして理解すればいいんじゃないか？ と誰かが見ているかもしれないので投げかけてみる」

周囲を伺ってみてもカメラがあるのは確認出来ない。だが何処にあるか分からない状況の中で、秘匿されている事柄を堂々と口にするのも躊躇った。悟られない程度に言葉を選んでヒロトは画面の向こう側にいる人へと話しかけた。その間にもルオンは突くのを止めない。

「コイツが起きないから大丈夫じゃないのか。去年の段階では武術大会の優勝者だったのだろう？ つまりコイツが効かなかつたら貴様はコイツよりも能力的には劣るということだ」

「幻滅するってか？ 別に俺じゃなくても守ってくれそうな奴はこの学園の中にはいっぱいいるから騎士役には困らないということだ。ルオンをどう扱うかは別としてな」

「我が危険な目にあってもヒロトは構わぬと言っのか」

ピタリと突くのを止めて、ルオンは怪訝そうにヒロトを見遣った。「ルオンも俺も利己を目的に結んだ。内容にはルオンを守るという事柄はなかったはずだ」

「……………そうだったな。忘れておったわ。我も面倒事は避けたいからな。貴様の術式の上に我の術式も刻んでおいた。これで破られることはない、はず」

「えー何その曖昧な声……ルオン様にしては有り得ないんじゃないかー？」

「我にだって、苦手とする分野があるのだ！ 誰しもが万能というわけではなかるうがっ！」

顔を真つ赤にして喚くルオンの頭をぽんぽんとヒロトは撫でた。

子ども騙しのように撫でると逆にルオンを逆撫ですると知っていないながらもついしてしまう。撫でている手を振り払おうとしないルオンもルオンだが気にせずそのままそっぽを向いて唇を尖らせたただだった。

「さて、と。このまま放置でも構わないのか？」

一頻りルオンの頭を撫でて満足したところでヒロトは放置していたデリタルへ視線を向けた後ルオンに問う。

「放置だと困るから起こすしかなかるう。確認を取らねばならないからな。ちゃんと起動しているのか我にも不安所があるわ……」

「……………」

「そ、そもそもだな。あの展開術式は門外不出の禁術だぞ。ヒロト如きが習得しているとは誰も思わないだろうが！ お前、何処で習得したんだ」

「後で教えてあげましょうか？」

くすくす笑ってルオンを揶う。

「わ、我は誰の手解きも受けぬ！ 己の力で習得するからいいのだっ！」

意地を張るルオンにヒロトはくすりと笑った。

「……………僕は一体……………」

ふと廊下で仰向けに倒れていたデリタルが目を覚ましたのか起き上がる。

「……………」

「……………」

「あの……………」

おろおろと戸惑うデリタルにはっと我に帰るとヒロトは出まかせ

を口にする。

「急に倒れたから介抱しようとしたところですよ。頭を強く打ったかもしれないから医療室へ行くのをオススメします」

「そうか、感謝するよ」

すくつとふらつくこともなく立ち上がるとデリタルはさっさと歩いて行ってしまった。何も言及されなかったから記憶に係る展開術式は上手く起動しているようだ。ほっと安心したところで、ルオンは教室へ向けて歩を進め始める。ヒロトもルオンに遅れを取らないようにルオンの隣で歩く。

「そっぴや」とぼやいた次にルオンは一つの疑問を口にした。

「……デリタルって女だよな？」

「何かしらの理由があつて男の制服を着ているのかもしれないな。男装の麗人でも魅力的ならいいと思うけどな。男尊女卑の時代は終わったとはいえ、以前男が有利に立つ場合が多い。デリタルは生徒会に関わるくらいだからこの学園内での身分は相当上のはずだ。女だからと言って邪険に扱われている場合もあるだろう。対等にされたいと思った時に至った考えが男装なのかもしれないが、ああ見えて男なのかもしれない。どっちだかは本人じゃないと分からないだろうがな」

「先程平気に胸を触っていたではないか。感触で分かるだろうよ。締め付けているかもしれないが、男という生物は本能で分かるものではないのか？」

「ルオンの口から破廉恥な言葉を聞きたくなかったよ……」

「純粹でいてほしかったのか？ 笑わせるでないわ。我も変装の一つや二つした方がいいのかえ。外見変化を掛けるのもいいな。もっと豊満な肉体にしてみるか」

「……ル、ル、ルオンさん、楽しんでません？」

ニヤリと口角を上げて、ルオンは自身の胸を鷲掴みにして持ち上げる。手のひらで隠れてしまうほどの小ぶりだがルオンの外見を考えば成長期の途中。思わずルオンの幼めの顔と豊満の身体を想像

してしまい、ヒロトはルオンから視線を逸らした。

「初心な奴だ」とルオンは笑う。

「ヒロトを誘惑してみるのも一つの手か。恋人同士に似せておけば一緒にいても問題なからう」

いつでもヒロトに引つついているのも楽しいか。と言うルオンにヒロトは頭を抱えなくなった。ヒロトを揃うのがルオンにとってはとても快感のようだ。

はああと深く溜息を吐いたヒロトはげんなりしつつも、ルオンに進言する。

「その古風の言葉をどうにかするのが一番の変化だと思うよ。古風なのはドラゴリーネの特徴として事典に載っているくらいだし」

「変えぬ。これは我を証明するものであり、変えるとなると我自身を否定していると同意義だ。ヒロトは我を否定したいのか」

「……………否定ねえ。面倒だからそのままでもいいんじゃないの？ 厳格な両親に育てられた箱入り娘だから古風の話し方は家族の影響によるものだといくらでも言える。周りの影響で言葉は方言を持つたり、考えを変えたりするからな。どうとでも言い訳は可能だ。マルーを一般人レベルまで引き下げているからな。純粋な王族から放たれるマルーの匂いは気付かれないはずだし、ルオンの顔はまだ知られていない。デリタルの記憶が戻らない限りは隠し通せるということだ」

「貴様自身のことも隠せるから一石二鳥というわけか。まったく、貴様は何処まで考えているのか我にはさっぱりだ」

「対策を事前に打っておいた方が気が楽だろうが。自分から面倒事に足を突っ込んでしまったんだ。身の危険だつてある。正直ルオンを守り切れるどうかなんて分からない。ルオンも最低限のことは考えておいた方がいい」

「慎重なのか、ただ単にビビりなだけなのかへタレなのか。ヒロトの良い所なのか。まあ、貴様に言われるまでもないわ。自分の身くらいは守るわ。戦闘種族を舐めるでない」

「はいはい、安心しましたよ」

「ヒロト君ー！ ルオンちゃんー！」

「何処行つてたの？！ 次、展開実習だよ！ 体操服に着替えてないと遅刻しちゃうよ！」

はいつと二人分の体操服が入った袋を渡してくるマニにヒロトは礼を言った。マニは顔を赤らめつつも微笑んだ。

「ルオンちゃん案内するよ！ 此処の校舎広いから迷っちゃうし！」  
ルオンの腕を掴んだサクはそのまま更衣室へ向かつて行く。またねと声を掛けてからマニも二人の後を追って行った。

離さんか、無礼者！ とルオンの怒声が聞こえてきたが、嬉しそうな声色が混じっていてヒロトは苦笑した。何だかんだ言ってもまた学園生活を楽しんでいるのだ。

「俺も行くか」

## だいさんわ

今日の内容をぼんやり聞いてたら隣の少年にヒロトは声を掛けられた。

「今日から本格的な実践だな！ あ、俺ファイント。ファイって呼んで」

すいっと右手を差し出すファイにヒロトは握り返す。

「ファイだけずい！ 私、ルキシユ！ ルキって呼んでね！」

「お前ら何勝手に自分達だけ自己紹介してんだよ、抜け駆けすんなし。あ、俺キヤリルって言うんだ。よろしくな」

「ああ、よろしく」

「おい、そこのお前達、話ちゃんと聞いてたか？！ 今から実践に向けた仮準備として木刀他を使い、陣取りを行ってもらおう。グループは各自五人ほどで作り、司令官になった者はメンバー構成を言いに来い」

「司令官まで決めるなんて本格的に構成するんだな……」

「この時期に仮準備とは名を打った訓練をするとはさすがだ。近々国取りでも行うのか？」

「ルオンちゃん、凄く物騒なことを言うんだねえ。確かに軍は公表してないけども反乱勢力が多い第七州に向けての準備はある。もちろん、育成学校としても名高いこの学園からも選抜メンバーが構成されて駆り出される。選抜メンバーを構成するためのメンバー決めを行うのも組み込まれていると思うよ。学園に入った時に検査するのもそうだし、半年に一度、実力検査を行うんだ」

「手抜きってあり？」

「もちろんあるわけないだろう。あつたら逆に軍へ仮だけでも強制入隊させられて軍人と同じ訓練メニューをこなさなくちゃいけないるんだよ。下手に動かないで学園生活を謳歌していた方がいいんだよ。過度に目立つと学園からも国からも目を付けられて一般生活

とは完全に切り離された生活だ。国によって強制的に学園に入れられた奴は大人しくしていれば一般生活を勝ち取れるし。駄目だったらアドツプテイドへ強制収容だ」

サクやマニもそうだったが、やけに内部情報に詳しい。此処に長いこといれば、それなりの内部に踏み込めるといふことなのか。ただ単に知っているだけなのか。

それよりもアドツプテイドの名前を出されて、今は強制収容場所へ変わっている事実には呆然とした。

「ふうん。で、陣取りはどうやったたら勝てるんだよ。あ、ファイが司令官ね。奇襲は俺とルオンの二人で掛けるから。後方支援はルキに任せるよ。キャリルは援護に回って」

「お前が司令官やった方がいいんじゃないのか？」

「俺よりもファイの方が頭回りそうだし。俺は前線の方があつてる。人を自分の意思で動かすのは好きじゃないんだ」

「じゃあ何でキャリルが援護？」

「だってキャリルは狙撃手だろ？」

「何で分かったんだよ」

豆鉄砲を食らったようにぽかんと口を開けるキャリルに俺はキャリルの指を差した。

「指のママだよ。弓を使うにしたって、親指の付け根にそんな傷跡やママが出来るのは武具に限られてくるし。防具だって、強固な物じゃない。少し考えればすぐに分かるよ」

「じゃあ何でルオンちゃんが奇襲側なの？」

「見れば分かると思うよ」

ルオンの実力は未知数だ。どんな術式展開するのかなんてヒロトも知らないが、あくまでルオンは戦闘種族であるドラゴリーネの王族の姫だ。ヒロトによってマルーの威力を抑えているとはいえ、威力同等の術式展開をしてくるだろう。もしくは抑えているものを破壊して本来の力を発揮してしまう可能性だってあるのだ。戦闘になれば目の色を変えるのがドラゴリーネであり、快感を得られなけ

れば止まらない。

興奮状態になってしまったドラゴリーネを静まらせたことがないので、ヒロトは今から不安に駆られた。いや、不安になっても仕方ないのでどんな手を使ってでも止めるしかないのかと自己完結させた。

へえと相槌を打ちつつ、支給されたヘルメットと防弾チョッキ、肘・膝当てを装着していく。小型イヤホンマイクとゴーグルを付ける。ゴーグルの縁にあるスイッチを押せば、相手チームの現在地が点滅してゴーグルに映し出される。支給された物のどれかにGPSが搭載されているのだろう。相手チームには自分達の居場所が筒抜けの状態ということだが、実践向きを想定した割には実践向きではないなとヒロトは嘆息した。所詮は学園の体育の授業でしかないのだ。

武器が並べられている場所に着くと様々な武術具が揃っていた。弓、自動拳銃、機関銃、小銃、散弾銃、狙撃銃、日本刀、木刀、竹刀、レイピア、サーベル、ダガーナイフと種類は様々ある。むしろここまで集めたものだとしてヒロトは関心してしまった。

「ヒロトは何の武器を使うんだ？」

どれを使おうか悩んでいると、隣でキャリルがドラグノフ狙撃銃を選んでいった。スコープを外し、重さを確認しているようだ。スコープの重さはそれほど変わらないのだが、狙撃手が命と言われているスコープを外してもいいのだろうか。

## さんの2

「真剣と言いたいところだけでも、訓練だから木刀で十分だよ。近接では刀やナイフと言った刃物系が役に立つし。その前にお前らがある程度打ちのめしてくれるのを期待していいのかな」

ヒロトは持っていた日本刀を置き、隣に置いてあった木刀を手取る。左手で振ってみるといまいち感覚が鈍っているようにも思えた。違和感はそのうち拭えるだろうと思いついて、ヒロトは他のメンバーの所へ行った。

それぞれが得意とする武器を身に付けており、ルオンは真剣と脇差の二本を刀帯に差していた。装具と古来武器である真剣と脇差がかなりミスマッチのような気もするがルオンは東洋型のドラゴリーネであることを思い出したヒロトは納得がいった。

ヒロトが疑問を呈するようにキャリルに言えばキャリルは戸惑ったように苦笑した。ふんと鼻を鳴らしたルオンがそれならばと高らかに言い放った。

「役に立つ立たない以前に使えるかは問題ありだがな。どうなのだよ？ 駄目であるならば我が指示を出しても構わぬのだぞ」

「お前に任せたら危険の範囲が増大するから遠慮願いたいな……」  
「貴様、我を何だと思っているのだ?! そこら辺にいる女共と一緒にするでないわっ！」

がるとルオンは唸り声を上げる。

「ルオンを一般生徒の子と比較してるんじゃないよ。ルオンに作戦を任したらこつちの身が持たないと言っているんだ。いくら強固の身体能力を持っていたとしても、身体強化していたとしてもルオンの体力についていけないか」

「何を?!」

「……ルオンちゃんとヒロト君ってそんな関係だったの？ 既にあんなことやこんなことも体験済みなの?!」

ルキはきゃーっと叫んでから顔を赤らめて隠す。

「知らなかったのか。ヒロトはこう見えても手が早い奴での。こんな幼女体型にも欲情してしまうのだよ」

ふんと鼻を鳴らして、高らかに言うルオンにヒロトは頭を抱えたくなった。

「欲情はしてないし、手は決して早くない方だ。恋人同士なのは認めるけども」

だがこれもルオンを守るためだとヒロトは自分に言い聞かせて、ルオンの手をそつと握った。握った瞬間に恥ずかしくなってそつぽを向く。一方のルオンは顔を赤らめることなく淡々としていた。

「と、いうわけだ。話を戻すか。私の武具も木刀で構わぬ。二本用意してくれるとありがたいのだが」

「ルオンって二刀流なんだ。くう〜！ 女の子がブンブン刀を振り回すなんて格好良いじゃないか！！ ああ、でもルオンみたいな女の子に負けるのは悔しいなあ。男としてのプライドに火が点くぜ！！」

感心したように頷きを繰り返すキュリルにヒロトは哀れんだ視線を送る。

「男のプライドよりも自分の保身を大事にした方がいいと俺は思うぞ……」

「ルオンってそんなに戦闘能力が高めなの？ レベルはSくらい？」「さあな。測定したことはないから分からん。レベルなんて気にしていられないからな。レベルが低いと思って油断したら負けを引き寄せているようなものだからな。火事場の勢いと諺で云うだろうよ。悔ったら自分の命さえも危険になるわ」

そもそもレベル区分を開始したのは最近のこと。ルオンは間違はなく最高レベルのSの地位になるだろうが、戦闘能力をレベル分けすること自体がドラゴリーネにとってはナンセンス。レベル、というよりも数字で区別したいのが人間の本质であって、動物であるドラゴリーネに当て嵌めようとしても無駄な行為なのだ。ドラゴリー

ネというのには知能を持っていたとしても動物にすぎず、戦闘が出来ればいい種族なのだ。ここまで本能に忠実な動物は野生動物は他に類を見ない。

「ルオンちゃんて意外と場数を踏んでたりするの？」

「実践を多く踏んでしまっているだけで不可抗力だ。我だってなるべくは闘いは避けたいのだ。無駄な体力とマルーを消費するし。変な奴には捕まりやすいからな」

うそつけとヒロトはこっさり思った。本能で闘っているような種族なのだ。その種族が闘いを避けたいと言うなんてヒロトには到底考えられなかった。現にこうして訓練が始まるまでの間、ルオンのマルー自体は高まっていて、ヒロトは再度ルオンのマルーの制御に当たるしかなかった。

駄々漏れしそうな良質なマルーに誰も気付きませんようにと祈るしかないが、訓練前なのにも関わらず臨戦態勢を取っているルオンもルオンだ。口に出ていることとは全く別の行動を取っているルオンにヒロトはどう言おうか考えていた。

「ヒロト君、今まで大変な目に遭ってたんだね。ルオンちゃんを守るためにヒロト君が強くなったなんて…！ 私も王子様に守られたいつ！」

「え？」

「気にしないでおいて。いつもの癖が出てしまっているだけだからさ」

「そうなのか。放っておいても大丈夫ならそのままにしておくが。で、ファイはなんか作戦でも思い付いたのか？ 妙案だったら我は乗るぞ」

「妙案じゃなかったら乗らないで突っ走るとか言わないよな」

「何故分かったのだ。機転が利かねば実践では役に立たん。窮地に陥った時は自分の感が酷く大事になるしな」

「ルオンの場合はほとんど本能で動きそうな気がするんだが俺の気のせいじゃないよな。ルオン一人での行動ならば自分の感が頼りだ

が、今回はチーム戦なんだ。個人行動はなるべく控えるよ」

「我に指図するでないわ。で、ファイの案とは何ぞや」

「そうだね、まずは自分達の発信器を攪乱させる作業から始めようか。といっても既にルキが行ってくれたから向こうに俺達の居場所を知られる心配はないよ。発信器を取り外してはいけないという規則はないんだ。実践では相手の場所も把握出来ないし、自分達の居場所も把握されない。より実践的に近付けた方が今後のためになるだろうしさ。で、案なんだけどもスタートと同時に」

「ファイから提案された案を思い出しつつ、ヒロトとルオンはスタート地点に留まっていた。」

開始となるピストルはまだ鳴らされていない。時計を見ればあと三分はある。ヒロトは木刀とは別に自動拳銃をシヨルダーホルスタ―に差し入れた。

「そついや真剣じゃないのな」

「ああ、別に真剣じゃなくても刀には変わりないだろうよ。あくまでも仮の段階だからな。真剣だと使っちゃいそうだから木刀で十分だ。そもそも真剣を使う流派は現存する中でも限られてくる。そこから炙り出されても困るし」

「ほう、是非とも見てみたいものだが真剣で見る方がいいのだろうな。楽しみは後に取っておいて、じっくり味わうものだ」

ペろりと妖艶に唇を舐める。ぎらつく瞳は見えない敵に向いているのだろう。既にルオンは興奮状態にある。

ヒロトはポケットの中に入れてあったキャンディをルオンの口の中へ無理やり突っ込んで、興奮状態を和らげようとしてみた。「馬鹿にするでない！」と言いつつもルオンはキャンディを舐めていた。少しは落ち着いたようだ。

はああと深い溜息を吐いた時、耳に付けてあるイヤホンマイクからノイズ音がし、ファイの声が聞こえてきた。

『二人とも定位置に着いたかな？ スタートと同時に瞬発加速して敵陣へ一気に突っ込むよーフラッグもゲットだぜ！』

「敵側がこつちに瞬発加速してくる可能性は？」

『向こうで瞬発加速出来る奴はいない。いてもキュリルが殲滅してくれるから安心して勝ちを取りに行こうじゃないか』

『俺って頼りにされてるねー。まあ誰も本陣には入れるつもりはないけどさ』

ケラケラと笑い、キュリルがファイとの通信に干渉してくる。

「通信が傍受されてる可能性はあるのか」

『ないとは言い切れないけども妨害電波を発生させてるし、通信範囲の設定はこちら側の本陣から五十メートル圏内だ。ヒロトとルオンが五十メートルの一番外側に位置している。君らのことだからトラップを何重にでも張り巡らせていたのだろう？　トラップも良いが、ほどほどにしておいてくれよ。味方まで引つかかったら堪ったもんじゃない』

「心配無用だ。お前らは本陣を守っていればそれでいい」

「ルオン、そのまま敵本陣へ突っ込むとか馬鹿な考えはしてないだろうな…？」

「そのまさかだ」

パアンと遠くでピストルが鳴る。スタートの合図だ。ピストルが鳴ったと同時にルオンは両足に身体強化の一種である瞬発加速を施し、駆け抜けて行ってしまった。

「やっぱし本物ははええな」

身体構造が人間と変わりなくてもルオンはやっぱり人間に擬態しただけのドラゴリーネなのだ。本来の力を抑えているとはいえ、この瞬発力と加速力は一般を遙かに凌駕している。

「って俺も暢気にしていらねえな……。このままだとルオンだけが目立つ」

ヒロトもまた瞬発加速し、ルオンの後を追って行く。

「ファイ、敵に転移テレアクセを使える奴はいるか?!」

『いないと思うよ。転移は二年生で習う展開術式だ。高度術式の一つだから一年の中でも使えるのは限られてくる。あれ、もしかなくともルオン先行っちゃった？』

「もしかしなくてもな。ルオンが先に本陣に着くまであと十秒。その前に俺は転移で敵本陣へ一気に行くぞ。キュリルは向かってくる奴をライフルで撃ち落とせ！」

『了解したー。俺の位置から敵本陣見えちゃったりするからね。そのままフラッグを落としてもいいけどもさ……。って。おいおいマジかよ』

イヤホンの先でキュリルの驚愕した声が聞こえる。それもそのはず。ヒロトはファイに確認を取った後、転移術式を展開し、敵本陣にいた。不意を突かれたのか、はたまたスタートしてなかっただけなのか敵チーム全員がおりフラッグを中心に囲んでいたのだ。狙撃手まで移動してないとは抜けすぎだろうとヒロトは思いつつも刀帯に差していた木刀を抜き去った。

本陣にはルオンはまだ到着していなかったようで、ルオンが本陣に入って来れないようにドラゴリーネ用の特殊結界を本陣を中心に張り巡らせた。特殊結界だと気付かれないように幻想付きのトラップだ。

『おい、ヒロト。一人でこの人数をやる気か？』

「背後は任せた」

イヤホンのスイッチを切り、ヒロトは右手に持っていた木刀を両手で下段に構えた。

「さすがに入学式にハルフとやり合っただけあるな……」

サブマシンガンを両脇に構えた少年が銃口をヒロトに合わせ、連射してきた。目を見開いて飛んでくる弾丸を横に飛んで避ける。

「派手に撃つのはいいけども弾の値段とか考えればいいのになー応実弾みたいだし、どれだけの予算が学園に落ちているんだよ。ペイント弾で十分じゃねえか」

「避けてばっかじゃ駄目だっつーっ！」

マシンガンの連射攻撃が収まったように見えたが、次に少女がグローブを嵌めてヒロトの前に飛び出してきた。大振りに右から狙うのは頼だ。脳天へ一気にダメージを食らわせようとするがヒロトは流し、少女の手首を掴むと飛び出してきた勢いそのままに少女を投げ飛ばす。不意を突かれた少女は受け身を取れずに背中から地面に落ちてしまう。背中を打ちつけた衝撃で少女は意識を飛ばしてしまった。マシンガンの弾倉を交換した少年は再びマシンガンを連射し始める。

避けるのも体力を消耗し、正確な判断能力も地味に奪っていく。ヒロトは防御結界を自分の前面に張り、マルーを注ぐ。避ける体力とマルーの消費を考えたらマルーの消費の方がヒロトにとっては良かった。マルーを溜めすぎても身体に悪影響を及ぼすし、なくても影響が出てくる。ヒロトの場合、マルーの余剰分があるので、マルーの消費を取った。

『おいおい、早速やられてんじゃねえか…！ 女の子を投げ飛ばすとはどんな神経を持っているんだ…！』

イヤホンからキュリルが怒鳴る。受け身の態勢を取っているヒロトの行動が気に入らなかつたのだろう。きいんと耳鳴りがし、ヒロトはイヤホンを外したくなった。

「敵だから投げ飛ばすに決まってるだろうが。他にどんな手がある

とでも言いたいんだ。一人一人の首筋に手刀を打ち込んでいけばいいのか？」

『そこまでしろとは言ってねえけどさ……。加減って言葉を知らねえのか？』

「いちいち気にしてられないよ。実践向けの仮準備なんだからさ。今から実践で訓練していた方がいいだろうし。面倒だから実践には参加しないけど」

『これだけ派手に暴れておいて実践に参加しないのは問題になってくるんじゃないか？ 生徒会から直々に言っつきそうだしな。で、ヒロトはそのまま敵を引き付けている。俺がフラッグを奪ってくるから』

「それは面倒だな……」

はあと派手に暴れすぎたかなと悔やんでみたが今更である。ルオンがまだ目立っていないだけマシなのだろう。ルオンを目立たせてしまつて、純正のドラゴリーネでバレてしまうこと自体がヒロトにとっては面倒事を引き寄せているのと同じなのだ。

ふと提案された案にヒロトは了解と返さずに三段突きを仕掛けてくる少年に向き直つた。

「デメエ！！」

前線担当であるもう一人の少年がレイピアで心臓に焦点を合わせて突いてくる。ヒロトは持つていた木刀でレイピアを弾き飛ばし、脇腹目掛けて木刀を振り落とす。少年を薙ぎ払うとヒロトはそのままシヨルダーホルスターに入れていた自動拳銃を抜き去り、サブマシンガンの銃筒を狙い二発打ち鳴らす。銃弾はサブマシンガンに向けて飛び、銃筒に着弾した途端に爆発した。サブマシンガンを持っていた少年は爆風で吹き飛び、地面に叩き付けられた。

「……容赦ないね。あくまで仮準備なのに」

「いつでも臨戦態勢でいないといけないだろ？」

ガギンと左側から飛んできたサーベルを木刀で受け止める。右手に自動拳銃を持ち、司令官の少年に向けて構えた。司令官の少年も

またヒロトに銃口を向ける。少年の銃弾を受け止めてしまった場合のことを考え、ヒロトは全身に身体強固の術式を展開する。同じ術式を司令官の少年も行っているのだろう。

「……ところでさ、この場にいるのは俺だけじゃないのを知ってた？」

「しまったっ！」

「はーはっはははー！！ フラッグは俺がいただいたぜっ！」

司令官の少年、サーベルを持っている少年が振り向いた時にはキュリルが既にフラッグを手に持っていた。

『ゲームセツトっ！！ キュリルがフラッグを手に取ったので、このゲームは転がっている者達の勝利です！！ 得手を下ろしてください。これからの攻撃は犯罪になります』

「……だつてよ」

少年二人は盛大に舌打ちをすると持っていた自動拳銃とサーベルを地面に落とした。ヒロトもショルダーホルスターに拳銃をしまい、木刀を刀帯に下げた。

張っていたルオン用の特殊結界を消すとルオンが本陣へ向けて突進してきた。

時間操作系の術式をヒロトは展開し、効果範囲指定を自分とルオンだけに設定する。

「ヒロト、貴様どういうことだ！！　ちゃんと説明しろ！」

「何が？」

「何故我を本陣へ入れなかったのだ」

「ルオンが来ると面倒だからだよ」

「我が邪魔だと言いたいのか」

唇を尖らせるルオンは不満そうにヒロトを睨み付けた。

「ルオンは自分の立場がどんなのか分かってるのか。あれを見る、訓練中でもちゃんとカメラが入っている。保存もされるだろう。一般人と同じ強さをしているからと言ってもルオンは純正なドラゴリ―ネであることには変わりないんだ。この学園にはハルフはいても純正がないのはルオンも知っているはずだ。ルオンが力を開放してみる。学園中のハルフがお前を狙いにくるぞ」

「だからなんだ。ヒロトこそ我を見くびりすぎだ。我は戦闘種族であるドラゴリ―ネの姫ぞ！　我から本能を奪うとは何事だ！　我の思いでさえも奪うと言うのか！　この鬼畜！　変態！　どS！！　時空の狭間で朽ちてしまうがいいっ！」

「いくら戦闘種族とはいえ、自重くらい覚えろ。マルーの制御をしているにも関わらず駄々漏れ状態。マルーの制御くらい基本中の基本だろうが。良質のマルーが来たらハルフはもちろん人間だって狂うぞ」

「貴様は狂ったりするのか」

「俺はルオンのマルーを制御しているんだぞ。ルオンのマルーがどんな味が一番染みてるんだ。慣れなきゃ困る」

「貴様のマルーが我のよりも上回っていること自体、気に食わぬな。本当に貴様は人間なのか。ああ、貴様は人間以上になれる物を持っていたな。我よりも貴様の方がバレたらマズいと思うんだがな」

「心配してくれるんだ？」

くすりと笑うヒロトにルオンはヒロトの脛を蹴り飛ばした。痛み  
に悶えるヒロトに構わずにルオンはふんつと鼻を鳴らす。

「黙れ、何故我が一人間であるヒロトの心配なぞせねばならぬのだ  
！ 我は私の目的を達成してくれるのかを心配しているのであって  
貴様自身の心配なぞしておらぬわ」

「何も俺自身を心配とか一切言つてないんだけども」

「とにかく、だ！ 次の訓練は我も参加するぞ。貴様は一度私の実  
力を見ておく必要があるようだからな！ 我が入れない特殊境界を  
展開するとかふざけた真似を試みる。貴様の正体を公表してやる  
からな」

ぎつと睨むルオンにヒロトは苦笑する。

「ひどい脅し文句だな。やれるもんならやってみると言いたいと  
ころだけでも俺の保身にも関わってくるからな。今回はちゃんとル  
オンに言うとおりに従うよ。そのまま狭間に置いて行かれても抜け  
出す方法はさすがに知らないし」

「貴様でも知らないことがあったのだな。万能だと思っていたが我  
の過信だったようだ」

「誰しも100%の超人なわけないだろうが。人間だろうがハルフ  
だろうがドラゴリーネだろうが関係ない。完全完璧な奴なんていな  
いんだよ。ルオンだって苦手な部分だってあるだろ」

「我に苦手な部分はないわ！」

「強がるのも大いに結構。だけでも苦手な部分があるのを認めて、  
どうりカバーするかを検討していった方が自分のためにもなる」

「負けを認めると言いたいのか」

「一度妥協するのもいいと思うよ。プライドばかり高い頭デッカチ  
のままじゃなくて、駄目な自分も認めるんだ」

「ふむ。人間のすることは理解できないが、己自身だと何処が悪い  
のか理解できないからな。悔しいが我も認めねばならぬ。ヒロトに  
は感謝しておこうではないか。ありがとうな、ヒロト」

「ルオンから素直にお礼を言われると思ってなかったからもう一回

言ってくれないか。今度はちゃんと録音するからさ」

「なっ?! ばっ…! 貴様、ふざけるのもいい加減にせぬか!!」

顔を真っ赤にしてヒロトから録音機材を奪い取るルオンにヒロトは「えー」と抗議する。

「さて、と。時間操作系の術式展開はマルーの消費にも繋がりやすい。時間の歪みにも繋がるからA+ランクを持つている生徒に気付かれるぞ。さつさと戻った方がいいな」

「時間操作系の術式展開は王族限定だからな。効果範囲を指定しないと使える者も同系列の時間空間に干渉してくる。面倒事は我もなるべくなら避けたいからな。仕方ないが付き合ってやろう」

「あくまでも、恋人に装えよ」

「言われるまでもないわ」

ふっとルオンは笑い、時間操作系の術式展開を解除した。瞬間的に時を刻むのを再開し、何事もなかったようにルオンはヒロトに駆け寄ってきた。

「……我が出るまでもなかったな。格好良かったんじゃないのか」「あ、ああ。いくらルオンが前衛でも危険な目を遭わせるわけにはいかないからな。頑張ってしまったよ」

ヒロトは恋人に装えとルオンに言った。だが、ルオンの変わり映えには目を見張るよりも腹を抱えて爆笑したい思いの方が強かった。「笑い声をあげたら殴る。シエルターの外まで投げてやる」

きつと睨み付け、ルオンは拳を上げる。

「それだけは勘弁してほしいなあ……」

「ヒロト良くやったな！」

何とかルオンから許しをもらっているとファイとキュリルがやってきた。

「まさか一人で敵本陣に奇襲掛けるとは思ってもみなかったし。武芸経験者だったりするんか？ こっちは実際に切れる刃を使っているのに木刀一本でここまでやられるとはな……」

「まさか。俺が武芸経験者だったら皆強いじゃんか。まだ俺はへボい部類に入ると思うよ。強い奴は俺以上にいっぱいいるしさ」

「それはそうだけど、入学式の時にハルフともやり合ってたし。ホント何モンなんだよ」

「ごくごくそこら辺にいそうなちよつとだけ武芸が出来るかもしれない一般人だつて。ちよつとだけ変な環境にいたのは間違いないけどもさ」

「あー分かった！！　そこでルオンと出会って紆余曲折あつて二人はめでたく恋人同士になりました！　とかそんな映画とかマンガとかの空想ストーリーを歩んじゃったわけだ！！　ヒロト、意外とやるな！！」

「は…？」

主旨の違う発言をされてヒロトは脳内にクエスチョンマークを並べる。

「キュリルは目の付け所がヒロトと違って違うな！　我とヒロト以上に知っておる！！　感心するぞ！　ヒロトもキュリルに見習ったらどうだ」

「遠慮しておくよ。変な感性が身に付いたら適わないし」

「俺が変人扱いされているような気がするんですけどー！！」

「大丈夫、気のせいじゃないから」

「二人して酷いよ！！　ファイは……」

「ちよつとヒロト、木刀貸してみろ。一発殺つてしまった方が何かしら変わるかもしれない。殴らせる」

「殺るが。殺すになつていているんですけど！　木刀で叩かれたら痛いつてば！　いや竹刀でも変わらないから四次元ポケットの如く何処からともなく竹刀取り出さないで！　殴るな　！！」

「ん？　殴つたら変わるのなら簡単な脳神経を持っているのだな。単細胞な奴らと交換してみたら、配列が変わるのかもしれない……。よしファイ、私には真剣を出すのだ！　キュリルの頭をかち割つて脳細胞を取り出して実験するのだ！」

「怖い怖い！！　ヒロト、助けてくれー！！」

両腕に笑顔を侍らせたファイとルオンに捕まえられて、ファイは

最後の望みであるヒロトへ手を伸ばす。

「……キュリル、短い付き合いだったな。次の試合あるんだろうけど俺、腹減ったから後は頼んだ！ じゃなっ！」

「ヒロト、ずるいぞ！！ 我も食べに行く！」

がっしとルオンに腕を掴まれてヒロトはルオンを引きずりつつゲラウンドを後に行行った。

「ヒロト、我はこの国のことをよく知らぬ。街を案内するのだ」  
部屋でくつろいでいるとルオンが部屋を訪ねてきて、ヒロトに高々と言い放った。

図書館で借りてきた本を読む生活も飽きたルオンは料理本を借りてきて料理をしたのだが、その腕前はそれはそれは酷い物であった。味、見た目ともに壊滅さを極めていた。

レシピ通りに作ってはいたのだが、何処で間違ったのか黒く変色した塊へと変化していた。卵すら割れずに手の中で粉碎し、中身が飛び散ることがしょっちゅうあり、見かねたヒロトがルオンに対して料理は作るなど言った。ルオンはつまらぬと言った後、ヒロトが作った料理に舌鼓を打つ毎日が続いていた。おかげでヒロトの料理の技術が格段に向上してしまったのは無理ない。

ぱらりと次のページを捲り、ヒロトは次のレシピを考えていた。ルオンにせがまれて　というよりも命令されて作っていくうちにヒロトの新たな趣味の一つとなってしまうていた。

「……何で自分から爆弾が埋まっているような地域に突っ込んで行くこうとするんだ。無謀な考えを抱く神経が俺には分からないんだが、詳しく説明しろ」

「この国の内情を一切知らないのだから知っておく必要があるだろうが。我は一族の姫なのだから国勢を知っておいても損はない。ヒロトの方が詳しい所もあるだろうがな。貴様は私の護衛でもあるのだ。丁重な案内をしてもいいじゃないか。そうだ、アドップティドに行くのもいいな」

突拍子もない提案にヒロトは頭を抱えなくなった。自分から危険な場所へ踏み込む好奇心もドラゴリーネの特徴の一つだ。

「お前、アドップティドが今どうなっているのか聞いてなかったのか。それにこの学園からは簡単に出られないぞ。俺もルオンも魔力

を登録されてしまっているから抜け出した時点で罰則ものだと聞いたがな」

「学園だけのシエルターも一種の監獄だな。これでは研究所にいた時と変わらぬではないか……つまりらぬ。武道場へ行つて極めるのも飽きたし。ヒロト、我にヒロトが持っている禁術を教えよ」

「却下だ。禁術は俺で最後にすると言っただろうが。それにこの禁術は対ドラゴリーネ用の術式なんだ。仮にもドラゴリーネのルオンが会得してもいい術式じゃないんだぞ……」

突っぱねるとルオンは眉を寄せて、ソファに座った。ツインターの尾を掴まむとくるくと擦じりながら退屈を凌ぐ。

「つまりらぬ。動けぬ身というものは実につまらぬものだな……転移系を使用したら学園の結界に引つかかるのがまたくだらぬ。そんなに学生を外に出したくないのか」

両足をばたつかせて、頬を膨らませるルオンは非常に可愛げのあるものだ。膨らませた頬を突きたくなるのを必死に堪えヒロトは自身を落ち着かせるためにも溜息を一つ吐いた。

「国にとっての強敵は今やドラゴリーネじゃなくてハルフだから仕方ない。人間の知識を持ったハルフが転覆しようとしている拠点が学園になっているのだからさ。でも不思議なのは武術大会で選抜したメンバーが軍への入隊が出来るのかだ。軍は政府にとって均衡な関係にあるべく組織だ。時にはクーデターを起こして国自体を革変してきた組織だろう？ その軍がハルフ・人間問わずに志願者を募るのは矛盾していると思わないか？」

「確かにな。その軍の内情も詳しく伝わっていないのが現状だが、ハルフの扱いは相当酷いものだろうな。ハルフもまたシエルターの外で活動出来るから貴重な動力源であるのは間違いないし」

「狭いシエルター内での生活から元の大地で戻りたいという気持ちも分からなくはないがな。少しは共存することも学んでほしいものだ。我々は迷惑しているというのに……」

ふうと溜息を吐き、テーブルの上に置いてあったショートケーキの苺だけを摘まむ。ショートケーキはヒロトお手製のものだ。

「まあ、そう言うドラゴリーネ側も食料も少なくて済むエコロジーな生活を求めて人化したんじゃないかなかったっけ？ まあ学園という鳥籠にいた生活も飽きるな。……暇だから学園に来ている軍関係者に紛れ込んで外に行こうか。今日は確かシエルターの外にいる生物調査へ行くと言っていたが。どうだ？」

学園内の見張りのために軍関係者が何人が配備されているのを入学してからの三ヶ月間で学んだうちの一つだ。それも軍関係者の中でも隠密部隊である中三隊が配備されていた。一国の学園に対しての隠密部隊の配備は異例だ。この学園が国からも危険視されているという意味だが、暢気に学園生活を満喫している生徒もいるという事を考えれば非常に滑稽な話だ。

「中三隊を張つ倒すってか？ 楽しいけどもバレたらどうなるか分からないぞ」

「お前の知り合いは生徒会に入っているのだろう？ ソイツに言えばどうにかならないのか？ それとも前の因果とは切り離しておきたいか」

ルオンに詳しく説明してはいない事柄を指摘されて、ヒロトは苦笑した。

「別にそんなことを言っているわけじゃないよ……」

「だったら何だ。何か案じることがあるなら先に申しておけ。後から愚痴を言われるのは嫌いだ」

高飛車な口調をそのままにルオンは早く言えと催促した。

「シエルターの外へ行ってルオンはどうするつもりだ？ ドラゴ化をして羽を伸ばそうとか異種生物と闘ってみようだとか足を延ばしてアドツプテイドにいる同胞を救おうとか馬鹿な考えは起こしてな

いだらうな……」

「あくまで我は貴様と契約している身だ。貴様の境遇がどうあろうと我は貴様によって縛られていることと同意義だ。政に関わるつもりはないが、貴様の身分を公表した時点で関わってしまうのだろうな。我は良い取引道具となるだろうな」

「俺はルオンを取引道具として使おうとしていないよ」

「ヒロトがどう言おうが、卑下に扱われているモノは道具として使われてきたのには変わらぬ。我が拒否したところで末路は処刑だろうし」

「ルオンを卑下に扱うつもりはないし、俺だけのドラゴリーネでいい」

「……貴様、頭でも打ちつけたか。それとも長年のシエルターの外での修行に頭がイカレてきたのか。汚染された空気だと脳に多少の影響は出ているのかもしれないな」

ハンツと鼻を鳴らすルオン。

「まあ、いい。その前に協力者を確保しておく必要があるな。ヒロトの知り合いで幻術系が得意な奴は知らぬか？ 万が一のことを考えると我らの幻影を作り出しておいた方がいいだろう。寮の点呼だつてあるのだから」

「つて抜け出す気満々なんだな」

ヒロトは読んでいた料理本からようやく顔を上げるとルオンはピクリと頬を動かした後、ヒロトの脛に向けて蹴りを放った。身悶えるヒロトを余所にルオンは話し始めた。

「貴様の知り合いもまたアドップテイドにおるのだろうか？ 何処の位置にいるのか把握しておいても損はないと思うがな。失われた書物もアドップテイドにあるのだから」

「ルオンは何処まで把握しているのか俺には疑問なんだけど……アドップテイドは動く拘置所だ。そう簡単に位置を特定されるとは考えにくいな。第一、ルオンはドラゴ化出来たとしても俺の装備はどうするつもりなんだ。生身の人間がシエルターの外にいたら三十

分は持たないぞ」

「貴様は特別なのであろう？ シェルターの外にいても耐性が出来ている人間の種族。いや違っていたな。貴様はシェルターの外でも通常の生活が出来る。違うか？」

「……酸素ボンベ無しに動いている人間がいたら、研究所直行だろ。うね。一生研究所の外に出られない生活を送る。そんな生活はゴミなんだな」

苦虫を噛み締めたような顔を見ると、ルオンはつまらないと言った後、クツシオンを抱き締めてソファに横になった。

「だから普通の学園生活を送ると貴様は言いたいのだろうか？ 面倒事はなるべく遠ざけて、そこら辺にいそうな一般人を装った生活。だが貴様の境遇からして一般人と同じ生活を送れるのは学園を卒業するまで。貴様は可哀相な奴だな。歩くべくして既に敷かれたレールがあるのだから」

クツシオンを抱き込みつつ、ルオンは笑った。

「同情してくれるんだ？」

「同情ではないわ。我は嘲笑ったのだ。哀れな少年が目の前にいるのだから、笑わなくてどうする」

「非道だね」

「ドラゴリーネに非道もクソもないわ。ただ我は浄化され切ったシエルターから出たいと思っただけだ。王族の身分にいる我からシエルターの毒素の欠片もない地で弱体化するだけの進化を遂げたくないのだ。これ以上、人間に侮られる生活を送るのはまっぴらだからな」

ハンッと鼻で笑うルオンにヒロトは苦笑いを浮かべた。

「ルオンは優しいんだな。でもって自分のことは後回しに考えるドラゴリーネらしくないドラゴリーネだ。どっちかという人間に近い知能を持っている」

「知能を持たねば生き抜けられなかったのだから仕方ないだろう。シエルターの中で暮らし、肺を徐々にシエルター外の空気に慣らす人間が使う道具を使えば役に立つと思っただろうな。第一、言葉を使ってコミュニケーションを取ることに深い感銘を受けたのだと両親が言っていた。言葉を使った方がより人間と共存が出来ると思っただけだが、今は人間から生き延びるために言葉を捨てる奴が増えているようだ」

ふとテーブルの上に置いてあったお茶受けをむしゃぼり始める。湯呑みに入っている緑茶を一気に飲みするとルオンは腹ごしらえは終わったとばかりにヒロトを急かした。

「さて、私の腹は満たされた。アドップティドに向かおうではないか。その前に学園の兵士達を張つ倒さなければな！」

ルオンの瞳は早く倒したいと決意に満ち溢れており、兵士達を倒したらアドップティドに向かわずに部屋に戻りそうだ。

兵士達の腕っぷしは学園の生徒と同等か少し上くらいの實力だと推測出来るが、ルオンにとっては赤子を捻り潰すもの。ルオンにとつてはつまらないものになってしまうが、どうか目を付けられませんようにとヒロトは祈るしかなかった。その祈りは確実に杞憂となってしまうだろうが。

「ルオンはそっちの方が楽しみそうだね」

「我は戦闘種族だからな。最近、戦闘も行っていなかったから身体が鈍りきっていたのだ。ヒロトも同じであろう。独特の呼吸式の仕方忘れていた頃じゃないのか？」

ヒロトの心配を余所にルオンはぐるぐると腕を回す。構えて右手

をヒロトに素早く突き出せば、ヒロトの顔面ぎりぎりですまされた。瞬きもせずに直視したヒロトを見てルオンはニヤリと笑った。

「まあ確かに忘れそうになっていたから困るけども。一応俺はマスクを持っていくよ。ハルフでもマスクを付けている奴が多いからな」

「ハルフは一族にとっては恥だ。シエルター外でも呼吸が出来るように進化してきたのに、いざ人間と交わったらマスク無しではシエルターの外には出られないようになってしまったのだからな。嘆かわしいことよ。……貴様は初めから論外だが」

「俺は論外なんだ」

苦笑するヒロトにルオンはふんつと鼻で笑い飛ばした。

「独特の呼吸式無しでも呼吸が出来るなんて見たことないからな。

「ま、貴様は人間であって人間じゃない。ハルフであってハルフじゃないから仕方ないか」

「一縷の可能性に掛けてみたかつたんだよ。人間じゃないけどもハルフでもない。ハルフもまたF1だから能力としてはピカイチなんだろうけどもね。エゴが推進してしまった結果じゃないのかな」

人間との共存を目指した方法が人間と交わることだった。人間側に自分達の能力を授け、人間と共にシエルター外でも生きていけるような環境を整えようとしたのだ。

「ふと疑問だったのだが、貴様は誰かに監視されていないのだな。貴様くらいの奴ならば一人や二人いるのだと思っていたよ。いないのであれば我にとっては好都合でしかないが」

「いたけど追っ払った。奴らがいたら学園生活をエンジョイ出来ないし、何より今の俺の身分は一般人と同等だからな。一般人を監視していたら俺が誤解されて学園に居づらくなる。俺をこの学園にさせた本来の意味を失うぞって脅し……じゃない、言ったら呆気なく引き下がってくれたわけだ」

「本来の意味か。まあ我が貴様に関与してしまった以上、貴様は普通の学園生活を楽しめなくなったわけだ。楽しいと思うぞー」

棒読みに言うルオンがヒロトには信じられなかった。ヒロトが望むのは普通の学園生活だったのだが、入学する前にルオンと会ってしまったことで、大きな軌道修正を求められた。ヒロトにとってはルオンとの出会いは必然だったのかもしれない。

「俺はルオンがいろいろがいますが、普通通りの学園生活を送るつもりだ。誰が何と言おうが俺には関係ない。俺は楽しむ。敷かれたレールだけが俺の進むべき道じゃないからな」

「それで、ルオンとヒロトは何処へ行こうとしているのかなー？」

「シユエ、いつからそこにいたんだ」

「ヒロト、お菓子の製造技術また上がったんじゃね？ 今度ケーキ作って俺の部屋に持ってきてよ。ベイクドチーズケーキがいいな」

お茶受けとは別に冷蔵庫にしまっておいたプリンを取り出して、シユエはヒロトの前のソファに座ると食べ始めた。

「貴様、いつからそこにいたのだ」

「学園の外に行きたいとか言ってた辺りかな？ 外に行きたいのなら俺に言ってくればよかったのに。美化委員会は害虫駆除の役目を学園から負っているんだよ。公式にシエルターの外に出られるんだ」

「つまり美化委員会に入れば自由にシエルターの外に出られるということでいいのか！？ 我にとっては好都合だ！ 今すぐ我を美化委員に任命するのだ！ もちろんヒロトもだぞー！」

「俺は嫌だ。学園内でもかくシエルターの外に出たらルオンの警護が面倒だ。俺の身にもなってみろ」

却下だと跳ね退けるヒロトにルオンは頬を膨らませて、ヒロトを睨み据えた。

「聞き捨てならないな……。我が外に出たいと言っているのだ。貴様は一応私の護衛を兼ねているのだ。もちろん一緒に来るのが当然の筋じゃないのか」

「面倒だ。そもそも美化委員会としてシエルターの外に出るのなら、ルオンは人化したまま外に出ることになるんだぞ。ドラゴ化なんて以ての外だ。気付いていなかったのか？」

「あ……」

一切考えていなかったという風に言うルオンにヒロトは溜息を吐いた。外に出られることだけが先行してしまい、自分の置かれた立場というものまで考えていなかったようだ。さすがは頭よりも身体が先に動く種族だけある。

「いちいち結界を張ればいいと言い出すところだろうが、ルオンの魔力展開は却下だ。どれだけの影響力を及ぼしているのか、いい加減分かれ」

「ヒロトはいちいちうるさいのだ。姑みたくぐちぐちねちねちとお前は苛立ちだけしか言えない残念な口を持っているというのか」

「誰が小姑だ。ルオンが本能で動くなら俺は理性で動いているんだ。少しは俺の理性を見習え」

「ルオン様とヒロトは仲が良いんだねえ」

「どうしてそう見えるのだ！？ 貴様の目はどうにかしているぞ！

我がどうにかしてやろうか？」

食ってかかるルオンにヒロトは制止の声を入れた。くすくすと笑うのを止めないシュエはルオンの頭を撫でるといふ荒技に食ってでた。頭を撫でられるルオンはピシリと音を立てて固まってしまった。

「それは止めていただきたいなあ……ルオン様のことだからちよつと残酷になつちやうだろうし。」

体育での活躍は上級生の間でも話題になりつつあるよ。凄い一年生が入ってきたが、どの部や委員会が引き抜くんだって部長会と委員会で揉めてるところだし。まあ一番引き抜いてほしくないのは生徒会だろうがね。部対抗武闘大会や委員会対抗武闘大会があるからルーキーは早めに摘んでおきたいんだよね」

「一番有力なところは何処になるんだ？」

「有力なのはもちろん、生徒会だよ。生徒会はハルフの中でもレベル上位者が多いし、どっちかかっていうとハルフの中でもドラゴリーネ寄りの者が多いんだ。闘っただけで負傷するから、生徒会と闘う時はがつつり医療保険を掛ける生徒が多いんだよ」

知らなくてもいいような情報まで教えてくれるのだが、ルオンはまだまだ固まったままなので動こうとしない。これを良かれとヒロトはルオンの顎の下を撫で始める。ハツつと我に帰ったルオンは一瞬だけ気持ち良さそうな顔をした後、ヒロトの手を叩き落とし、睨み付けた。

「ほう、体育では私の相手にならぬ者達ばかりだったから暇していたのだ。生徒会に当たれば少しは楽しめそうかもしれないな」

「不可抗力以外、全部却下だ。ルオン、話をちゃんと聞いていたのか。生徒会はお前を探しているんだぞ。自ら闘いに行こうなんて正気の沙汰か！少しは頭を冷やせ」

「我はいつだって冷静沈着を保つておるぞ。今は魔力もヒロトに制限されているから奴らには気付かれない。気付かれたとしても術式を展開すれば良い話だ」

「二度目が使えない奴が生徒会にはいるだろうか？」

「ああ、忘れていたな……」

「なんか二度目は使えない術式とか使っちゃった感じなのか？ 術式は計画的に使わないと不便な時もあるよな。掛かりにくい奴は厄介極まりないし。確か生徒会の中にも一定レベルの術式の二度目は全く効果出ない奴がいたな」

「誰のことだ。詳しく教えるのだ」

「会長のデリタルだよ」

「……………」

まさかとは思っていた。ヒロトもまた魔力レベルの測定は行っていないが、上位レベルと推定される術式を展開出来る。その術式が時間干渉の術式なのだが、通常時間干渉系の術式はその本人が許可した者以外は干渉出来ない。だがデリタルはヒロトが展開する時間干渉系の術式に侵入し、攻撃を加えてきた。一般レベルの魔力を持つている人は時間干渉どころか攻撃するのは不可能。

つまりデリタルはヒロトと同等の魔力を持っているか、はたまたその上の魔力を保持しているということになる。

ハルフ側の指揮を執っていると言っていた時点で気付くべきだった。今更気付いてしまったのだから仕方ない。デリタルに掛けたのは記憶操作系の術式であって、掛けるのであれば記憶操作系でも別の神経に作用する術式を展開すればいい話だ。とヒロトは自己完結した。

次、攻撃する時は別の術式を展開しなくてはいけないという前情報を入手出来たのだから良しとしておこう。悔やんでいても仕方ないのだ。

「何だよ、その反応。もしかしなくても一回目の術式ってデリタルに掛けたのか……ヒロトが掛けたにしてもルオン様が掛けたにしても魔力レベルとしてはデリタルより上だから破られるというのは有り得ない、はずだと思いが……絶対という言葉は有り得ないからな。もしかしたら破るかもしれない」

「有り得ない。我の術式がハルフ如きに破られてたまるか。それこそ一族としてのプライドも面目も無くなるわ」

「で、ヒロトの目的も達成したいけどもルオン様は研究所に見付かるわけにはいかない。だったらなんだけども、生徒会と対抗するべく、美化委員会に入らないかな？ 生徒会とは違って美化委員会は主に人間側で構成しているんだ」

「ほう、それで委員会対抗武闘大会とやらには生徒会と当たるのだろうか？」

「もちろん当たるよ。美化委員会のメンバーなんだけども、キャリル、ファイ、ルキシユ。バックアップ要員としてサクとマニだ。キヤリル、ファイ、ルキシユの三人は知ってると思うけど、サクとマニは知ってるかな？」

「知ってるも何も。よくご飯を食べるメンツばかりだ。三人はともかく、サクとマニは明らかに戦闘向きじゃないだろう」

「バックアップ要員だって言ったじゃないか。バックアップ要員としては二人は十分役に立ってくれると思うよ。まあ、ヒロトは実践で体感した方が信用出来ると思っっているだろうから、合同演習で決めてくれて構わないよ」

「何だ、それ。ヒロトが指揮を執れって言っているようなもんじゃないか。貴様が指揮を執るわけではないのか」

「僕が執るのは本陣、ヒロトが執るのはその他。バックアップ要員を一番使うのは前線にいるヒロトやルオン様だ。ヒロトとの連携は

たぶん取れたとしても、ルオン様との連携度は未知数に近い。バックアップ要員を巧く使ってこそ、試合に勝てる。僕は思ってるし、連携がダメだと全部が崩れる。ルオン様は単独行動が主だったと思うけども、協力してほしいな」

「ルオンのことは他のメンバーに知らせるのか？」

「知らせなくて大丈夫だと思うよ。ただハルフにバレた時に厄介なことになるから注意が必要だと思うんだよね。まあ、それだけ人間の二オイを発していれば純粹種だとバレないだろうけど。そうだが、これから合同演習をやるんだけども参加してみないか？ 対抗武闘大会まで日があまりないからね。練習は多く積んでおいた方が得になることばかりだし」

「我は構わぬ。ちょうど暇を持て余していたところだ。本当ならばシエルターの外へ行きたかったのだが、練習で我慢しようではないか」

「ヒロトはどうする？」

「どうするも何も、合同演習には俺が出ていた方がいいだろうし、早めに連携を取れるようになっておきたいから参加するよ」

仕方ないからと言った雰囲気ルオンの機嫌が悪くなる。無然に眉間に皺を寄せて、ヒロトを睨み上げた。

「いい加減、貴様は本気を出したらどうだ？ 手を抜いた動きばかりでつまらぬのだ。もっと我を楽しませろ」

「ヒロトは昔から本気を出したことがないから頼んでも無駄だと思っよ」

「自分の実力を知ってから向上するというのが。高見に達すれば、その先を目指すと思わぬのか」

「テツペンに上り詰めたらその先の結末は下るかテツペンに居続けるのどちらかだ。テツペンの先を目指すというのは俺の辞書の中には書いてないな。誰かを相手する時に自分と同等の奴がいなかったらそれ以上の高見へと励みたくない。励むだけ虚しくなるし、労力の無駄だと思わないのか」

一番上に到達してしまつたら、墮落して転がり落ちるか。後から追ってきた者に抜かされて蹴落とされるか、ずっと勝ち続けるかのどれか。自分が新たに設定すれば一番上は存在しない。高見を目指し、到達してまた設定し直すという無限ループの完成だ。

高見へ高見へとヒロトもまた果てしない頂点へと目指していた時期もあつたが、今は違う。

「ヒロトは非常に残念な思考を持っていて我の想像を裏切らない。だが向上心がないのは認めない。貴様が弱かつたら我は契約者として認めたくないわ」

プライドの高いルオンはヒロトと違い、常に一番上であることに強いこだわりを持っている。ルオンがドラゴリーネの王族であり、次代の王になるから。というのも理由の一つだろうが、王は自らがお手本となり、民を引っ張っていく必要がある。手本となるためには民以上に強くいなくてはならない。民を寄せ付けない力も必要になってくる。絶対的なカリスマ性を持っていないと王は務まらない。ルオンの高見は死ぬまで続くのだろう。

ルオンの向上心には目を見張るものだが、一千年という長い寿命の中でずっと向上心を保ち続けるのは、さすがにドラゴリーネであってもきつい。ルオンならやり遂げてしまつたろうという淡い期待を持ってしまふ。

ルオンの桁外れの向上心を前にヒロトは感心したが、ルオンに契約者と認められないと言われて困つた。ルオンの性格上、頑として譲らないだろう。だがヒロトも契約破棄を止めさせる事情があるのだ。

「契約破棄したかつたらどうぞ自由に。自分の置かれている状況が分かっているから言ってるんだよね。契約を破棄した途端にルオンはドラゴ化して制御している魔力を開放することになる。学園内にいるハルフがルオンの元へやってきて校内を巡回している兵に捕まるか殺されるか研究所に連れて行かれるかのどれかだろうね。シエルターの外へ逃げ延びたとしても、武術者がルオンを捕まえに来

「るだろっな」

「……………」

ギツと射殺しかねない睨みを見せるルオンに対して、ヒロトは冷静だった。ルオンも冷静なのだが、心は荒れ狂っていた。

「まあ、契約解除して困るのはルオンだけじゃなくて俺もけどね。ドラゴリーネの王族であるルオンと契約を結んでいるんだ。契約は同等の魔力を持つている者同士じゃないと成立しないからな。王族レベルに魔力を持つているなんて、有り得ないんだからな。俺もまた研究所なり、反逆罪で捕まるなりするだろうし。アドツプティド出身者はほとんどが研究所か牢屋か未成年は学園にいるかだ。俺は自由に生きたいからルオンも協力しろ」

「ヒロトってば俺もアドツプティド出身だっけ忘れてないかな。俺もヒロト並ではないけどもドラゴ化している奴らと闘えるよ」

「そうだった。すっかり忘れてたな。シュエ以外で闘ったことがある奴っているのか？」

「たぶんいないと思いたいけども、手練がいるのは事実だよ。アドツプティド出身者だったら分かると思うしさ。ここで会ったのが初めての奴が多いんだろ？ って思ったけど、ヒロトは人の顔を覚えなから意味がなかったな。俺が向こうで見てない奴らばかりだから大丈夫だと思っけども、早めにアドツプティドから脱出して、武術を他のシエルターで教えていたら俺もさすがに検討付かないな」

「使えぬ者ばかりだの……まあ、我にとっては使い勝手の良い手足となつてくれればそれだけで十分だ」

「後者に伝えるべくルオン様自ら指南するのも大事だと思わない？」

「何故、我が人間なんぞに教えなくてはならないのだ。我は教える立場におらぬ。我よりも別の適任者がここにいるではないか、なあヒロトよ」

「俺に教え付けると言うのか？ 俺は個人戦闘には慣れてはいるけども、団体戦はまるで駄目だぞ。指揮は執れても応用が利かないからな。百手先まで練れる奴じゃないと団体戦は無理だ。俺とルオンは

どちらかで言うと実践タイプで本能で動く。シユエやファイが適任だと思っよ」

「我が理性の欠片もない血の飢えたケモノのような例えをするでないわ。理性の無くなりやすいハルフと一緒にするでない」

「どっついう意味だ？」

「貴様、そんなことも分からずにアドップテイドにおったのか。知らないなんてモグリだぞ」

馬鹿にした視線をくべるルオンにヒロトは憚然とした。

「知らないものは知らないんだよ……実践で相手に出来れば俺はそれでよかったからな」

「簡単だよ。純粹種であるドラゴリーネと人間の半分ずつ。遺伝学でいえば、F1。ドラゴリーネの戦闘に対する本能と人間の理性と知能、思考能力の半分ずつを受け継いでいるんだ。元々ドラゴリーネは自らの進化の過程で理性を手に入れてきたんだけども抑圧しきれない本能がそのまま子であるハルフに受け継がれてしまって、戦闘時には理性がなくなりやすくなってしまっんだよ。手に負えられないのが会長であるデリタルを始めとする生徒会だ。本能を抑え込む薬も開発されてはいるんだけども、実用症例がまだないからね。しようがないからこの学園の生徒を使ってモニタリングテストをしているところなんだよ」

「つまり、この学園でも研究所と同じことをしているとどうなのか」  
思わず握り締めた拳に力が入ってしまう。

「ヒロト、忘れてるようだけどこの学園は王立だよ。国による監視で血の盛っている若輩者を一般世界から隔離しているのが学園だ。研究所と同等の扱いをしていたって、王立だから仕方ないと切り離される。まあ生徒達にはガス抜きと称して武闘大会が開催されているんだが、裏では危険度の高い生徒を見極めるための審査を兼ねているんだ」

「と、なると。危険度の高い生徒だと上が判断した場合はその生徒はどうなるのだ。軍の檻にぶち込まれるのか？ はたまた、実験道

「具とねるのか」

「正解はないよ。だって知る前に学園にいた事実や本人の記憶は消されて、社会貢献のための道具になり下がるんだから。理性を持っているなら軍に入れるんだろうけど、使役出来ないハルフなんて使いたがるわけないからね」

「で、美化委員会側の俺らはどうするんだ。実験道具を出さない努力を組み込んでいるのだろう？」

「初めから危険とされている委員会と部活はある程度決まっているからね。本選の前のリーグ戦で美化委員会と当たるように仕組んであるから、ヒロトもルオン様も楽しめると思うよ」

「貴様、初めから我とヒロトを入れるつもりで動いておったな……」  
「まさか、と言いたいところだけどルオン様に歯向かったところで俺のメリットは全くないからね。むしろデメリットの方が多い。

単刀直入に言わせてもらえば、ルオン様とヒロトに会ったその日に決めたよ。二人とも実技で必ず目立つはずだし、他の委員会や部活からスカウトが来るのは見越してしたからね。二人と接触するにはすぐの方が良いと思ったんだ」

「確かに誰かしら着けている気配はあったが、私の魔力はほとんど感知出来ないからな。ヒロトは意図して魔力を消去していたから気付かれなかったたのである」

「俺のモットーは穏便に暮らすだからね。ルオンの世話もしなきゃいけないし、余計な面倒事にこれ以上関わるのは御免被りたかったし。直接聞きたかったけど理由が分かったからこれからは拒否するよ。引き抜き対策としては美化委員だと公表すれば良い話だ」

「そうそう、バッチがあるんだよ。各委員会、部活には所属を示すためにバッチを制服に付ける決まりになっていてね、バッチを付けている生徒同士による私闘は許可されてるから一人で歩く時は気を付けた方がいいよ。血の気は非常に盛んな生徒が多いからね。引つ

搔かれたら手足の一本や二本を骨折してもおかしくないから」

「おお、正当な理由で私闘出来るのはいいな。気分転換にもなるし、瞳を輝かせるルオンにヒロトは頭痛を覚えた。気分転換と銘打って、致命傷に近い打撃を繰り返すに違いない。気分が晴れるまで、私闘を続けるだろう。武闘大会が始まる前までにルオンの危険度審査は最悪になるのは確実だ。」

「ルオン様は却下かなあ。魔力制御している限りでは一般生徒に近いし、私闘したとしてもルオン様が負けるかもしれない」  
「我は負けぬ」

キツパリと言い放つルオンにヒロトは深く溜息を吐いた。ルオンは魔力制御されてからというもの、一回も術式展開しておらず、今の自分がどの程度なのか知らないからだ。ヒロトが止めていたのもあるし、ルオンが魔力を使う前にヒロトが片してしまっていた。当然、ルオンはストレスが溜まる一方で今日になってシエルトの外へ行こうとしたのもそのためだ。

「今のルオンだと限りなく破壊し尽くして即行研究所送りにされるぞ。ルオンの場合、身分がバレたら今の段階で虐げられているドラゴリーネとしての権利が更に悪いものになるんじゃないかな」

「まあ、練習場で俺とヒロトが境界を張るからそこで暴れてよ。相手はヒロトがしてくれるだろうし」

「空間術式を使える奴はいるのか？ ルオンが全力でくるなら術式に手が回らない」

「そのためのサクとマニだよ。彼女らは空間術式のスペシャリストだからね。空間術式だけだったらヒロトの上を行くと思うよ」

「思いつきり暴れていいのだな！？ ヒロトと殺りあってもいいのだな！？」

「フラグ立っているような気がするんだけど、制限掛けていたのは俺だからな。武闘大会までは定期的に相手してやるよ」

ルオンに何回殺されるのだろうと思案しても仕方ないので諦めた。ルオンを縛っているのはヒロト自身なのだから、自分でツケを払う

義務があるからだ。ヒロトもまた自分自身と同等の相手またはそれ以上の相手と闘っていないのは事実なのだから。

「俺もヒロトとルオン様の實力見たいし、手合わせ願おうかなー」

「良いぞ、我も楽しみにしておるからな！ そうと決まれば練習場へ行くぞ！」

嬉々とした声を上げて喜ぶルオンの姿は同年代の少女のような気がした。

「あつれー。ヒロトにルオンちゃんじゃん。どうしたのー？」

間延びした口調で話してくるのはファイだった。

「ヒロトとルオン様には今日から正式に美化委員会のメンバーになったんだよ。皆揃ってるし、今日がお披露目ってわけ」

「何でルオンちゃんに様付けー？ ルオンちゃんって結構高貴な人だったりのー？」

「私も気になる。ルオンちゃんの個人情報を漁っても何も出てこないし、ヒロトの個人情報も同じようなもんだけど。二人とも学園側から直接プロテクト掛かるくらいに言えない身分だったりしたの？」

椅子に座ってパネルを弄っていたサクが言う。パネルに今映っているのはルオンの個人情報なのだろう。パネルを見る限り、ルオンの個人情報名前は名前と生年月日以外は真っ白だった。あとの項目には閲覧不可の文字が踊っている。

「俺はそんなに面倒な身分じゃないよ」

「まあ、誰にだって言いたくない秘密の一つや二つあるだろうが。なあシユエ先輩」

わざと先輩付けにして呼ぶと、シユエの顔が嫌悪に浮かぶ。幼馴染みでありイトコである人に急に先輩付けで呼ばれると複雑な気分になる。シユエもまた同じだった。

「確かに、言いたくない秘密の二つや三つくらいあるのは普通だけど。ルオン様の正体だけは知っておいた方がメンバーもやりやすいと思うよ？ それ以上を言うのはヒロトの自由にすればいいし」

「理に叶っているな。我は構わぬぞ。ヒロト自身に関わる物事に我

は干渉するつもりはないからな。我が置かれている現状以上にヒロトの問題には関わりとうないんでな……」

「ルオンちゃんはその古風な喋り方にも何か関係がもちろんあったりするんだよね？ 古風な喋りをする部族なんて人間の中でも限られてくるし、ルオンちゃんがもしハルフだとしたとしてもだよ」

「我を本能だけで生きていくような下等なハルフと一緒にするでないわ。マニ、今言ったことを訂正して詫びるのだ！ 我は純粹種のドラゴリーネの姫ぞ！」

正式名称で言わないのは名前を糧にして術式を生まれ、縛られるのを防ぐためだ。名前は束縛術式には欠かせない材料の一つであり、本名を名乗るのはパートナーまたは主従関係を結んだ者達のみに限定されている。術式を扱う者は本名を誰にも教えてはいけないという規定があるのだ。

「ルオンちゃんがドラゴリーネ？ しかも保護対象の純粹種なんて……」

「ルオンちゃんにはドラゴリーネの魔力が全く感じられないんだけども。誰が制御してるといふのさ」

「はいはい！ と手を伸ばして訊ねるのはキヤリルだ。肩には狙撃銃を構えている。もちろんスコープと赤外線カメラは装着されていない。」

「ヒロトだ」

キヤリルの質問に一言だけルオンが答えると、一同は呆気に取られた。

「ヒロト君が？」

「ヒロトにドラゴリーネの純粹種と渡れる魔力があるってことか。まあ確かに術式センスは半端なかったものはあったけども。なんか納得したわ。通りでハルフの先輩とやり合えるわけだよ……」

「ああ、それなら納得」

「ドラゴ化したハルフなんて、特殊な武芸を学んだアドップティド出身者じゃないと厳しいし。一般人を装って手を抜いたとしてもバ

レバレだよな」

「俺はルオンと対等じゃないぞ。ただ制御系の術式が得意なだけでアドップテイド出身なのは否定しない……」

「アドップテイドって純粹種のドラゴリーネが生息してたんだよな。前王政も敷かれていたというし、王族関係者も多く住んでいたと聞くし。……ヒロトつてもしかして、王族の関係者だったりしたのか？」

「まさか。俺は何処にでもいるただの凡人だよ。ちょっとだけ武芸が出来るだけの能無しだよ。俺以上に出来る奴は数多くいるし」

俺の弟とか、とまで出かかったが喉に押し留めた。悠々自適に傲慢な暮らしをしているのだろうと思うだけで、実の弟と言えども腹が立つ。

ただヒロトは計算違いをしていた。今は強制収容所として名を馳せているアドップテイドの前の状況を知っている者が多かったことに驚いたのだ。以前のアドップテイドに関する書籍のほとんどは処分されたか、封印されたと聞いていたから。自分の住んでいた所を他人が知っていただけで嬉しくなるのはヒロトだって同じだった。

「ヒロト以上に出来る奴がいたら見たいもんだけどね。もしいて相手にするなら御免被りたいわ」

「止めておいた方が身のためだと思うがの。対ドラゴリーネの戦闘術に敵う奴はほとんどいないからな。我だって危ないわ」

「対ドラゴリーネの戦闘術？ それってドラゴ化したハルフ及び純粹種に対するものなのかな？ それはS M O Dで穴埋めしたと聞いたことがあるけども」

「おいおい、S M O Dって言ったら禁止術の最高レベルじゃないか……」

S M O Dとは、Scopilliot potentiator  
Medicine Of Dragorine / スコピリオットのドラゴリーネに対する強化剤として名を馳せた物だが、強化剤はその後改良を重ねて肉体活性化、一種の興奮剤として変えた術式で

人工モルヒネを糧として使われる禁術である。

術式はスペル式と数少ない動植物を展開術式の糧として使う禁術がある。禁術は一般的に使用が禁じられているものが多く、糧が入手困難な物も含まれる。人工モルヒネは国家取引で厳しく制限されており、栽培及び製作することも禁じられている。その人工モルヒネを使った術式が『SMOD』と呼ばれるものだ。

ドラゴリーネと共存していたことで有名なアドツプティドだが、万が一のためにドラゴリーネとの戦闘術を身に付けていたのもアドツプティドだ。ドラゴリーネとの戦闘目的のために移住してきた者も多かったため、アドツプティドは武芸の街として栄えていたのだが、ある日強制収容所として名前を変えざるを得なかった。ルオンは強制収容所となっているアドツプティドへ戻り、ドラゴリーネの治世を復活させようとしているのだ。

「S M O D 以外にもドラゴリーネを戦闘不能にさせる技なぞ、山ほどあるがな。ただハルフは純粹種と違って、理性が無くなってしまふのが特性だからな。過去の進化の過程でドラゴリーネが克服した苦手なモノを嫌う傾向にある」

「ルオンちゃん、さすがに詳しいね……」

「詳しくなければ、誰だつて治められるわ。で、だ。我は弱点を貴様らに教える。このことは他言するでないぞ。したら、どうなるか分かっているだろうな？」

はあつと溜息を吐いた後、ルオンは空間操作系の術式を練習場いっぱいに広げる。ルオンを中心として術式が編み込まれ、複雑な紋様を構成していく。術式に描かれているのは現代語ではなくて古代語。ルオンは禁術の一つを展開し、掛けようとしているのだ。だが、禁術を展開出来るほどの魔力は制御下に置かれた状態のルオンでは厳しいものがあつた。

バチリと術式が跳ね返り、ルオンは目を見開いた。展開していたはずの術式がエラーの文字を展開し、ルオンに襲いかかった。ルオンは呆然と襲いかかってくる文字を見ているだけしかなく、千本の矢となった文字は術式展開者であるルオンに攻撃を始める。

「ルオンっ！！ シールデイル！」

ヒロトは咄嗟にルオンへ向けて防御展開式を放ち、術式展開解除の展開式をルオンが敷いた展開式の上から書き、強制的に術式を解除させる。

「なっ？！ 何故展開出来ないのだ!？」

ルオンは自分の手のひらを見て、カタカタと身体を震わせた。普段なら有り得ない失敗にルオンは意気消沈していた。犯すはずのない事象に情報処理能力が追いつかないのだ。

「今の魔力レベルを考えればすぐに分かるよ。ルオンちゃんの魔力

レベルは一般人と変わらない大きさ。ヒロトによって制限が掛けられている状態で禁術を展開させれば魔力不足で、拒否される。ヒロトも分かってたはずなのに」

ファイが嫌味をチクリと言う。

何とも言えないヒロトは明後日の方向を見た。隣にいるルオンから殺気を帯びた視線を感じるが知らないフリを決め込む。

「貴様、どうということだ。知っていたなら止める」

「ルオン様なら自分の魔力の量がどれくらいなのか把握していると思いますので、まさか禁術を展開するとは思いませんでしたし。

禁術は一番ドラゴリーネとしての本質の魔力を糧にするものだと自覚していると思いますし？ まさか自分が置かれている状況を忘れていたとは俺も全く思っただけですし」

棘のある言い方で次々と言うヒロトに対してルオンはただ睨むだけだった。反論してくると思っていたヒロトは拍子抜けした。普段なら言い包められるのはヒロトだ。注意はするが逆に言い負かされてヒロトが引き下がるだけ。だが今日のルオンの気分は違ったようだ。

「ルオン様が何をやらかしてもいいように水風系のシールドを張っていたのは誰だよ。ルオン様がどう動くか分かってないと出来ないよな」

くすくすと笑いつつシユエは言う。ヒロトは黙ったまま、練習場の傍らにあった竹刀を取り、素振りを始める。真つすぐに竹刀は撓り、肩、肘、手首が一直線に並ぶ。二三度振り下ろした後、右手を後ろに回し、左手だけで竹刀を持つ。

左手に竹刀を持ったまま、振り被るとシユエの頭目掛けて振り下ろす。自分の頭目掛けて振り下ろされる竹刀を見たが、シユエは避けずに微笑んだままだった。ピタリと後数センチの所で竹刀は止まった。じつとヒロトはシユエの瞳を見た。

「……………」

「あつぶな……………例え竹刀でも当たったら痛いと思うんだけども」

「いくら石頭の委員長でも怪我しちゃうよ!」

「本物じゃなくて残念だな」

ルオンはちえつと残念そうに舌打ちをする。ヒロトの本来の得手が日本刀であることをルオンは知っているからだ。

「ヒロトは当てたりしない……よ」

まさにフラグだった。後数センチを素早く埋め、パシリと軽い音を立てて竹刀はシュエの頭に落ちた。

「俺だって、当てることもあるんだよ」

「ヒロト君がちょっとだけ本気になったってことでいいのかなー？ 私もヒロト君の本気が見たいし。いつでも本量の一割も出してないしさ。今日くらい出してもいいんじゃない？ 私らにルオンちゃんよの正体を教えたってことは、ちょっとは信頼してるってことだしよ」

「どうなんだろうね。本気で人を信頼したことがないから何とも言えないけども。ルオンのことは知っておいた方が俺としてもやりやすいだけだし。もちろん、巻き込まれるのは覚悟しておいてほしいルオンが持つ魅力的な魔力の匂いにハルフが気付かないわけがないんだ。気付くのは時間の問題になってくるだろうけどもさ。その時間を引き伸ばしていきたいんだよね。俺のためにも、ルオンのためにも、さ。だから出来ることなら協力してほしい。俺も守れ切れない時が出てくるだろうからさ」

「貴様が弱音を吐くとは思っていなかったぞ。我は我の力で守る。」

いざとなったら貴様が掛けた制御術式だつて解くぞ」

「それは本当にルオンちゃんの身が危険になったら、の場合にした方がいいよ。ルオンちゃんが気高いのは分かるよ。でもヒロト君はルオンちゃんの身を案じて制御術式を掛けたんだし。ヒロト君が駄目で、私達が駄目な時、ルオンちゃんがどうしようもないという時にだけ解除すれば良いと思うんだ」

何処か遠くを見詰めてサクは言う。瞬間、虹彩が蒼く映つたのを見て、ヒロトは勘付いた。

「サクはもしかして予知者なのか？」

「ヒロト君は何でも知ってて怖いね。知らないものはないの？  
って聞きたくなっちゃうよ」

眉をへの字に下げて、バレちゃったと舌を出す。言っただけでほしくな  
かった、と言わんばかりの表情をするサクにヒロトは思わず謝った。

「この学園は何でもいるんだな。さすがは押し込まれた学園と謂れが付いて回ってくるわけだ。で、だ。他の奴らも俺に隠してたモノ持つてるんだろ？ 謂れ付きの学園に入ってきたんだしさ。誰から始めに行く？」

ニヤリと笑みを浮かべて表情を一変させるヒロトを見て、ルオンはにこやかに笑った。

「そうだな、まず練習場の防御術式を水球に移動させようか。ヒロトの実力がどんなものなのか気になるメンバーも多いだろうし。僕もヒロトがどれだけ成長したのか確認したいしさ。もちろん、ヒロトは十キロの錘を付けて動いてもらおうよ」

「全力のヒロトが我は見たいのだ！ 動きの鈍いヒロトなぞ見たくもないわ！」

だんだんつと地団駄を踏む。

「いいよ。錘を付けて練習とかご無沙汰だったし。足腰鍛えられるしさ」

「そうだな、フィールド設定は野営戦にするか。ヒロト対僕達で構わないかな？」

「それだったらヒロト君が不利じゃないですか?!」

マニが反対の声を上げる。

「マニはヒロトの闘い方を人伝で聞いただけかもしれないけども、俺達が束になってヒロトを襲撃したとしても敵わないと思うよ。アドップティド出身者は実戦主義だからな。本物のドラゴ化したドラゴリーネとシエルターの外で闘うんだ。並大抵のスタミナと瞬発力、戦闘センスがなければやっていけなかった世界だから。ヒロトがどの実力なのかは知らないけど、もしかしたら大怪我を負うかもしれない。油断は禁物だぞ」

「酷い言い様だな。俺はアドップティドの中でも弱者の方だったぞ。

確かに練習はほとんどなしのぶつつけ本番だけどさ……」

ヒロトは自分と一緒に闘った叔父の顔を脳裏に過らせる。一日一日、死ぬ恐怖と闘い身に付けていった技術。一人で倒せた時は泣くほど嬉しかった。

アドップテイドにいた時は駆除を名目で倒していたドラゴリーネの総親玉と今は契約関係を結んでいるなんて、叔父が知ったらどんな顔をするか考えただけで寒気が走った。

呆れるだろう、溜息を吐かれるだろう、また巻き込まれたのかと言われるだろう。叔父の癖である後頭部を掻く姿を脳裏に浮かべて、ヒロトは感傷に浸った。

「なんだ、貴様も泣くのか。怒り以外表現を失くしているのだとばかり思っていたぞ」

「泣いてなんか……！」

グイツと袖を目元にやり、拭くと袖が染みて変色していた。泣く行為自体は何年ぶりだろうと数えてみたら、アドップテイドを出た後以来だった。

「貴様はいつでも虚勢を張ってばかりだな。私の胸に来い！ 今回ばかりは慰めてやろうぞ！」

くいくいつと顔をニヤケさせながら手招きするルオンにヒロトは「要らない」と一言言ってベンチに座る。舌打ちをして最大限に顔を歪めるルオンはぶつくさ文句を言ってくるがヒロトは無視した。

「ヒロト、練習出来そうか？」

「大丈夫、始めようか」

ヒロトは立ち上がると、シュエから錘を受け取って両手首と両足首に付けた。一歩前に出るだけで重量感が伝わり、ヒロトは一瞬だけ顔を歪める。二三度竹刀を振って重さに慣れたところで竹刀を下ろし、目を閉じて精神統一する。

深呼吸した後、ヒロトは目を見開いて突進した。向かう先はキャリル。キャリルがいる位置は室内の中でも一番遠く高い所で浮遊しており、狙撃手である彼を先に潰しておいた方がヒロトにとっては

やりやすかった。

「俺からかよっ！」

狙撃銃を構えていたキュリルは腰に下げていた短距離の拳銃に持ち替え、振り被った竹刀を受け止める。

ビリビリと銃身で竹刀を受け止めたはいいものの、酷く重たかった。ヒロトの一振りが重く、これが竹刀ではなく本物の切れる日本刀であったら銃身は真っ二つに裂けていただろう。キャリル自身も怪我していただろう。

「狙撃手だけだと思っな、よっ！！」

キャリルは上段蹴りを繰り出す、ヒロトは読んでいたのか水系の防御術式を無詠唱で展開し防ぐ。

「無詠唱でも展開出来るとは……器を持つ者は違っな。そう思わないか？ シュエ」

ルオンはヒロトが座っていた青色のベンチに座ると、傍らに立つシュエに話し掛けた。頬杖を着いて、ニヤニヤと様子を伺っているルオンは何を企んでいるのか。立て掛けられていた日本刀を手に取ると刀身を抜いた。歯零れもなく、研磨された日本刀をうっとり眺めつつ、ルオンは鞘に納める。

「本人はそう思っていないと思いますけどね。他のメンバーは各自防御術式を展開して、ヒロトからの攻撃に備えつつ左後方を重点的に攻撃せよ」

「何故、左後方なのだ？」

「見ていただければすぐに分かりますよ」

左後方を重点に置かれたヒロトへの攻撃。氷粒手の矢が次々と放たれ、ヒロト目掛けて飛んでいく。ヒロトは炎系の防御術式を展開したところで動いたのはキャリルだった。キャリルは右手に持っている拳銃の弾に水系の粒子を充填するとヒロトに向かって撃つ。一瞬ヒロトがニヤリと口角を上げたが、キャリルは気付かなかった。

今のヒロトが張っている防御術式は炎系であり、水と真逆。防御術式はすぐに打ち消され、ヒロトは無防備になってしまった。ヒロトを中心として水蒸気が立て込み、ヒロトの姿は見えなくなってしまふ。水蒸気が練習場内に充満し、視界がゼロになったところでシユエはヒロトの目的に気付いて、先に防御術式を展開する。

ルオンはヒロトの姿を確認できなくなった時点で防御術式を展開していた。

「各自、無系防御術式に切り替える」

「残念、遅いよ」

各自の目の前に同時にヒロトが出現し、瞬きが終わらぬうちに背後に回り込むと刃交い締めた。先に防御術式を展開し終えたルオンとシユエの前にヒロトが現れたが無系防御術式に阻まれて霧散する。「ほう、よく出来ているな」

各自の後ろに居るのは本物のヒロトではなくて、ヒロトが作り出した幻影。幻影は主とする糧がなく、人の錯覚や恐怖心を巢窟として作り出す場合が多い。今の状況から言えば、メンバーのヒロトへの恐怖心が幻影のヒロトを作り出した、と言っても過言ではない。

「ヒロトの勝ちだな。シユエ他のメンバーの弱点も分かったし、ヒロトの弱点も分かった。だが、自分の弱点を昔の知り合いに知られているとしたら、シユエはどうするのだ？」

「弱点を克服しようとする……」

至極当然の模範解答にルオンは笑った。

「そうだ。シユエとヒロトが仲良かった昔というのは五年も昔の話だろうよ。五年もあれば自分の弱点を克服するのは簡単なことだ。それに気付かないのは鈍感の域を通り越しているな。目測を誤ると危険な目に遭うぞ」

「っ」

ジロリと睨まれてシュエは息を飲んだ。ひたりと放たれるルオンの殺気に怖気付いたわけではないが、抑えられているとはいえ、間近でドラゴリーネの魔力を浴びてしまったのだ。威圧感に圧倒され、シュエは俯いた。

「つてことはヒロトはわざと炎系の防御術式を張ったつてことかよ」  
刃交締めにされたまま、キャリルが訊く。持っていた拳銃も得手も地面へと転がされていた。

「幻影系の術式は最初に目くらましさせてからの方が掛かりやすいからね。これが本番だったら瞬殺だった。まず最初の攻撃で狙うわけのない狙撃手を狙ったのもヒロトの作戦だったのかな？」

「制空権を掌握している狙撃手を撃っておけば、上からの攻撃はなくなる。3D空間よりも平面の方が一人だとちょうどいいからね。

本物だと翼を折って地面に落とす方法を対人用にアレンジしただけだよ」

「で、肝心のヒロトは何処にいるんだよ。ヒロトが作り出した幻影なら本体だっているはずだろう。なのに何でヒロトの姿がないんだ？」

「貴様ら、ヒロトの姿が見えてないのか？ ヒロトへの警戒心を撃ち消さない限りはヒロトの姿は見えぬよ。ヒロトは幻影から蜃気楼に術式を変化させたからな」

「ルオン、余計なこと言うなよ……」

ルオンにネタばらしされ、ヒロトはルオンの座っている隣から姿を現した。

「ちよつと待て。幻影系の中でも最高レベルの蜃気楼を使える奴なんて王族以外聞いたことないぞ。ヒロトは王族の関係者なのか？

王族の関係者だとしたら、純粹種であるルオンの魔力の上を凌駕してもおかしくない。アドツプテイドでも有力なドラゴリーネ狩りの一族は王族と深い親族関係にあると聞いたことがある。ヒロトはどつちだ？」

「どちらともないよ。蜃気楼を扱えた人がいたから強制的に叩き込

まれたただけだよ。それ以外何も無い、ただの一般人さ」

師匠である叔父の顔を思い出して、ヒロトは眉尻を下げた。

「まあいいよ、今は言わなくても。ヒロトが喋りたくなったら言えばいいし。人には言いたくない秘密は誰にだって抱えているし。ヒロトの秘密聞いたら最後、一般人の生活には戻れないような気がするしさ」

「ルキ、それは女としての勘か？」

「サクまでに当たるとわけてではないけどもさ。踏み込んだじゃない領域がヒロト君にはあって、私達はその一線を越えてはいけない。ヒロト君は私達との差を見せてわざと引き離しにかかったかもしれないけど、無駄だよ。そりゃあさ、恐怖したよ。自分の命が危険に晒される経験なんて早々しないわけだし。武闘大会でもこんな危険な思いをしたことはないし。おちよくられているのは分かっているけど、温室の所でのびのびと居た身としては避けたいというのが本能でしょうね」

ルキはサクをちらりと見てから答える。ビクリとサクの身体が震えたが、ルキは知らないフリをした。

ルオンから指摘があったように、見せられた攻撃で恐怖を抱いてしまったのは本当だ。

「それでも！……あつ、私はそれでも……ヒロト君とルオンちゃんのに役に立ちたいと思っているよ。私は攻撃術式も防御術式も皆よりも低いかもしれない。私なりに出来ることがあれば協力したいと思っているから……私が視えていれば、ヒロト君の幻影だつて避けられたかもだし……私の能力がまだ劣っているからだけど」

がつくりと肩を下ろすサク。自分の力が十二分に発揮出来なかったことを悔やんでいるのだ。一心に悔しかった。ただ仲間が攻撃を受けるのを見ているだけの自分が悔しかった。自分の力が発揮していれば、ヒロトの攻撃も予測出来、避けられたのだ。

「確かにサクの能力は五分咲きといったところか。自分の能力に自信がないから持っている能力を引き出せないのだ。貴様らに共通し

て言えるのはまず、自分に克て。自分に克てなければハルフとやり合つのは危険だ。シュエ、貴様ももつと臨機応変に手段を考えないと首を絞めかねない。弱みを徹底的に突いてくるのがハルフだからな。本能の赴くままのハルフを見くびつたら致命傷を負うぞ」

「それはルオンでも厳しいってこと？ 自分の家臣に当たる奴らを賤け出来ないなんて領主として失格なんじゃないのか？」

「我を卑下にするつもりか。制御された状態の我では厳しいと言ったまです。あくまで今の我は一般人と同等の魔力レベルなのだろうか？ 一般人と同じならば、我は貴様が守るのが当然だ。最も我が貴様を頼ることはないと思うがな」

ふんつと鼻で笑うルオンにヒロトは苦笑した。素直に自分を守れと言つてこないルオンが凄くじれったかったし、いざ素直なルオンを想像して、ヒロトは笑みを深くする。ヒロトを見て、怪訝そうに顔を歪めた後、ルオンはヒロトの脛を蹴り飛ばした。物理攻撃にヒロトは防御術式を張れずに諸に痛みを受け、悶絶した。

「っ」

「今のは相当痛いと思うんだけど……」

「我を見縊ったヒロトが悪いのだ。もうちょっとは我を敬いたまえ」  
ほとんどない平らな胸を張り出しても、ヒロトは敬うつもりなど毛頭なかった。痛みを何とか堪えて、ヒロトは竹刀を杖変わりにして立ち上がると室内を見渡した。

「練習時間は限られてくるんだし、早めに練習を始めようよ。練習場も貸し切りと言ったわけじゃないんだろう？ 本来の美化の仕事もあるわけだしさ」

「そうだな。さっさと練習を済ませて実践に取り組もうじゃないか。我も学園の内部情勢をもっと知っておきたいのでな。我はキビシイからちゃんとしてくれるかの？」

傍らに置いてあった木刀をズビシと皆の前に掲げるルオンの瞳は生き生きとしていて、すぐにでも始めたいと言った心持ちだ。

「じゃあ、今度は俺が見てるからルオン対全員で。ハルフ並のレベルまでルオンの魔力を解除するからさ。ルオンはドラゴ人のレベル

までいざとなつたら解放してね」

「おいおい、純粹種のドラゴ人相手に俺らが闘っていいのかよ……」  
ファイが不安そうに声を上げる。ドラゴ人の知識は持っていたとしても、実践では闘ったことがないのだ。闘い方も分からなければ、危険と隣合わせ。自分の身が可愛いのはヒロトも同じだが、ヒロトの場合、生計が関わっていたので必死だった。ファイはまだ必死に何かを実行したことがないからこそ言えるのであって、自分の意思と反してでも闘わなくてはいけない時が今なのだ。

「軽い指揮は取るから大丈夫だよ。俺が危険だと判断したらルオンの力を抑えるさ。ルオン、それでいいよな？」

「ヒロトの命令に従いたくはないが、本番で我を開放してくれるのなら構わぬよ」

「まず、ルオンを追い詰める前に倒そうか。ドラゴリーネは追い詰められると理性を失い、ドラゴ人となりほとんど本能として闘う。本能として動くドラゴ人の死角を突くのはほぼ不可能に近い」

「ということは人間のままの状態で突いて一気に叩きのめすという方法か。単純だが難しいな……」

「無理に実行しろとは言わない。本来ドラゴリーネの対戦は大人数で四方八方から攻めるといふものだからな。一人で戦おうとするのは大馬鹿か自分の腕に自信がある奴のどちらかだ」

「ヒロトはただの馬鹿ということか。確かに一人で向かって弱点を突いた方が早いな。ドラゴ化したドラゴリーネの鱗を破壊するにはちよーつとした小技が必要だからな。小技を習得するには時間が足りないし、習得したとしても魔力不足でエラーを起こすだけだ」

「そんな危険な術式が世の中に存在するのか？ この世に存在する術式はデータとして魔法院のデータベースに記録していると聞いたことがあるのだが……」

「魔法院に記録してあるのはごく少数であって氷山の一角でしかないよ。そもそも術者が魔法院に記録として申請するか、監視カメラに記録されていた術式をデータベースに記録として残すだけのもの。

シエルターの外で行われるドラゴリーネとの対戦の術式はほとんど記録として残されていない。シエルターの外の監視カメラ自体、軍直轄の管理だからね。対ドラゴリーネとの術式は軍事機密として扱われているよ。軍関係者でも上層部しか知らない」

そもそも対ドラゴリーネの術式は禁術が多く、ほとんどの術式が口伝だ。術者が伝える意思がなければ、その術者しか使えない幻の術式となる。術者がデータサーバに登録しないのも法律的には違反しておらず、罰則もない。ただ新術だと発覚した場合の際、魔法院から苦情が来るだけだ。

「さすがにマニ詳しいのう。軍内部まで詳しいってことは、誰か知り合いが軍にでもいるのか？」

「ちよつと知り合いがいるだけね。今は退役してるけど、それなりの地位にいた人が私の師匠なの」

「ほう、そなたの情報が幅広いのはその人が関係しておるのだな？もつと我に聞かせて教えるのだ。この学園の抜け道ももしや知ってるのではないだろうな？」

「それは後でこつそり、とね？ 美化委員会限定で伝わる地下通路とかその他諸々学園にはあるらしいからね…… 結構引かれる物もあるよ」

その人は簡単にマニに教えるほど溺愛していたようだ。

ヒロトとヒロトの叔父も慕う慕われる関係ではあったが、ヒロトは実践的なことが多く、軍内部の状況がどうなっているか教えてもらったことがなかった。最もヒロトの叔父は軍に所属していたとしても前線に立つ場合が多く、その場の状況を掴むだけで精一杯で軍内部まで深く踏み込めなかったというのはあるのかもしれない。（もつと教えてもらいたかったことばかりだ……）

叔父から教わってもらったことはヒロト以外に教えるなど言われた禁術ばかり。S M O D に関係している術式も多く、当然登録されていないからどのような効果があるのかヒロト以外知る者はいない。斃したドラゴリーネが死の代弁者として語らない限りは。

「美化委員会限定の地下通路とな……そこでサボりたい放題ではないか！ 教えるのだ！」

「サボることを目的としてないからね。学園中のほとんどに行けて、外部からの侵入はほとんど知られてない道ばかりだ。美化委員会の本部も地下に設置してある」

「何で地下にあるんだ？ ちゃんと委員会室が設置してあるわけではないのか？」

「もちろん、仮の状態の美化委員会室はあるよ。ただ校舎の中にあると都合が悪いと造った人は思ったのだろうね。表向きの美化委員会室は特別棟にある生徒会室と対極にあったとしても、生徒会からの妨害を食らって作業が滞ることが多いからね。地系に秀でた当時の委員長が地下通路と地下本部を作ったわけさ」

美化委員会と生徒会の対立は昔からあるようだ。美化委員会と生徒会と銘打っているものの、実体は人間対ハルフ。実力としてはハルフに敵わない美化委員会は地下通路を作ることにより、自由に動くハルフを地下から監視していると云ったところか。

校内に通常より多く設置している監視カメラも美化委員会が管轄に置いているようだ。ハルフ側には学園の運営を任せてはいるものの、生徒会・美化委員会への反感が強く、反感への払拭を兼ねて武術大会を頻繁に行っているらしい。

「上には伝えてあるのか？」

「伝えてはいるさ。ただ地下通路がどのように張り巡らされているかは上も知らないままだよ。軍にも報告していないからもしかしたら学園の外やシェルターの外にも繋がっている可能性は否定しない。美化委員会は生徒会に秘密裏にシェルターの外へ出て、害動物の駆除に当たっているからね。生徒会への名目は視察としているけども、生徒会が一緒に行った時は散々だったよ。外気に触れてハルフが凶

暴化したんだからね……」

あの時は思い出したくないと言ったようにファイが語る。

「凶暴化したのではなく、本来の姿に戻ろうとしたのかも……ドラゴリーネの進化過程で人間の肺では耐えられない有害な物質を体内で浄化する器官を新たに作った。いくら人の血が混ざり、身体は人であつても半分の血は濃いからな。普段は使われていない器官が目覚まして本来の役目を思い出して、理性が働かなくなり暴走した。と考えるのが妥当だな」

凶暴化してしまったハルフは、人に戻れないのをヒロトは知っていた。この様子だとこのメンバーも凶暴化した生徒のその後を知っているのだろう。

「シエルターの外へ出てはしゃいだ末が死とはな……。同胞として情けないわ」

「ルオンも、その生徒のことは言えない立場にあることを忘れてないよね？」

「……我は負けぬぞ」

「ルオンの場合、他人を狂わせるの方が大きいのかもしいけれどね。甘い蜜を持っているのを自覚してほしいものだよ……」

「なにに、ルオンちゃんの魔力ってそんなに良質なのか？」

「一度味わったら病みつきになると、その魔力以上の味が現れるまで物足りなくなるだけで生活する分には何ら問題はないよ。普段より吸引力は出てしまう可能性はあるけども。吸引力が強いと惨たらしく本能が働くんじゃないかな」

「つまり暴走する、と？」

「そうなるね。当てられただけでも匂いを覚えてしまうから厄介極まりないよね。五感は遥かにハルフの方が上だから一度ルオンの魔力の匂いを覚えたハルフはどうなってるんだらうね？」

ヒロトはデリタルのことを遠回しにルオンに言う。ぎつと睨まれたがヒロトは無表情のままだった。今にも戦闘が始まりそんな雰囲気、疑問を持ったルキが尋ねる。

「どうなってるの？ 既に覚えた人がいるみたいない口調じゃないか。まさか学園の中にいたり？」

「厄介なことに一人だけね。ソイツさえ抑えれば学園のハルフはこちら側のものになるんだろうけども、ソイツは一度掛けた術式は二度目は効かないようなんだ」

肩を竦めてヒロトは答えた。

もしかして、とサクが誰か勘付いたようで、おそろおそろ答えを言う。

「それって会長のデリタル……？」

「ご明察」

「とんでもない奴に遭遇したもんだな……よく無事でいたもんだよ」呆れた声を上げるのはキャリルだった。

「そんなに悪名高い奴なのか？」

「学園の中で一番ドラゴリーネに近い血筋を持っているとされているよ。純粹種を敬う気持ちはこの学園で右に出る者はいないんじゃないかな。ドラゴリーネを探して保護する活動を独自で行っているようだよ」

「へえー。そんな奴に捕まったらお姫様も最後かもな。変態な行為をされるかもよ？」

「そうなる前に叩きのめしてやるわ。ハルフはドラゴリーネとしての誇りを失っているとみた。我が徹底的に指導する必要があるな！」

意気込むルオンにヒロトは不安感を拭いされなかった。

「今日こそはシエルターの外へ行くぞ！　ちゃんと許可取ってきた！」

「あー今日は俺らの番なのか……明後日、武闘大会というのに……」  
「体力だけには自信がある貴様でも憂鬱なのか。もっと楽しめばいいのだ！」

嬉々と目を輝かせて早く行くこうと言ってくるルオン。

美化委員会に入ってからというもの、地下通路を覚えるために校内巡回の任務しか与えられず、ハルフとの接触もほとんどなく、揉め事もなく、ルオンの溜まりに溜まった鬱憤は練習で発散するしかなかった。

ヒロトもルオンが暴走しないように見張るだけで、身体を動かしておらず、シエルターの外だったら監視カメラが付いていないので、徐々に身体を動かそうかなと一瞬だけ思った。

「シエルターの外に行くのはいいよ。呼吸法も忘れそうになってたし、新しい害虫がどんなのか気になっていたし」

二三日前、ヒロトは第一洲シエルターの近くで害虫を発見したとニュースを見た。どんな害虫で、まだ有害とされている空気をどのように浄化するのか。

「そうだな！　我も気になっていたので！　害虫と殺り合えたら我も楽しめるのだがな！」

「今回はそうもいかないんじゃないかな。害虫の駆除には専門機関がもう調査し始めているだろうし、もし接触したとしても一般生徒である俺らの役回りは無しだ。斃したところでニュースに取り上げられたら誤魔化しが効かなくなるぞ」

「ヒロト、貴様はつまらぬ男だ。実につまらない。本当に貴様は弱肉強食、下剋上がモットーのアドブティドの出身者か！？　ぬくぬくぬくぬく暮らしていただけではなかったのか？！　答えてみよ

「！」  
「ルオン、ルオンは自分の置かれた現状を分かっているというのか？ ルオンは現在進行形で追われている身なんだぞ？！ そんな奴がお茶の間のニュースに突然出てきたらどうなると思っているんだ！ 少しは考えろ！」

はああ、と深く溜息をゆっくりと吐いて、ヒロトは指を突き返した。

儼然と表情を歪めるルオンは舌打ちする。

自由気ままの性格であるドラゴリーネにとって束縛されることを一番に嫌う。ヒロトもまた誰かに束縛されるのも束縛するのも苦手だった。だからこうしてルオンを縛っているのはヒロト自身も驚いているのだ。

「仕方ない。我も少しだけ妥協しよう。シエルターの外へ行ける機会を我は逃したくないからな。我もまた揉め事に関わるのだけは勘弁願いたいからな。特にヒロトが持ちこむであろう問題は我も首を突っ込みたくないしな」

ルオンはさっさと学園の外へ出る。校門の所で守衛と配備していた軍人に生徒個人IDを見せ、シユエから支給されていた美化委員会所属のカードを見せた。軍人には好奇心に満ちた目で見られ、いくつかの質問をされる。質問の中には侮辱を含んだものがいくつ含まれていて、ルオンの逆鱗に触れたがルオンを黙らせて切り抜けた。

「……私のことを愚弄しおって……あのハルフの軍人ただでは済まぬぞ……」

「まあ、ルオンの身体を見ればチームの中でも守備側だと思っただろうね。もっとマッチョな女の子の設定にすればよかったかな？

もしくはナイスバディで……」

つるぺたの胸板と一五〇センチほどの華奢で小柄な体型。いつもはツインテールに結ばれている黒髪だが、今日は一つに縛り、尻尾を揺らめかせている。

ヒロトはルオンの姿を爪先から頭まで見ているとルオンの顔が一気に紅潮し、ヒロトの脛目掛けて蹴りを放った。

「この変態が！ 我をそんな制的対象の目で見ておったのか！ ケダモノが！」

「いつて、いつてえ！！ ルオン、本気で蹴ってくるな！ 折れる！」

「貴様のようなケダモノの足など折れてしまうがいいわ！！」

一点集中で一ヶ所の脛を攻撃するルオンにヒロトは早々に根を上げた。

「悪かった！ 悪かったから！！ 許してくれ！」

「……土下座しろ。這い蹲って許しを乞うのだ。そうだな、シエルターの外へ行くのだから我のリミッターをドラゴリーネ遭遇検知器に引掛からない限度で解除するのだ。そうすれば許してやるう」

「それは断る」

即答すればルオンは盛大に舌打ちをする。流れで通ると思っっていたのだろう。

「つまらぬ。わざわざシエルターの外へ行くのに我は身体を動かさぬまま時を過ごせと言うのか。我の本性をなんだと思っっているのだ」  
頬を膨らませてぐちぐちと文句を垂れ流すルオンにヒロトは苦笑した。

「シエルターの外へ行ってみないとどうしようか対策が練られないだろう。他の奴がシエルターの外にいてドラゴ化してみるよ。即行捕まるのがオチだ。TPOに応じてルオンのリミッターをギリギリまで解除してやるから我慢しろ」

専門機関の中には良いように使われているアドップテイド出身者もいるはずだ。出身者にヒロトの知り合いがいたらヒロト自身の身も危ない。ルオンを守るどころではなくなってしまうのだ。

「駄目だったら異空間を作り出して暴れてやる。相手がいないとつまらぬからヒロト、貴様が相手をするのだ」

「分かったよ。妥協しまくってルオンじゃないみたいで気持ち悪い

が気のせいだと思っておこうか」

シエルターの外へ出るには専用のスーツに着替える必要があり、シエルター出入り口近くに設置されている浄化プログラムセンターに入る。

ここはシエルター内部と外部を繋ぐ通用口であり、公の場合はこのセンターを通さなければならない。ヒロトもこのプログラムセンターを通じて第一洲に入った。ルオンの場合、捕まっていた研究所が第一洲にあるため、プログラムセンターを利用するのは初めてだ。正式な戸籍がないとプログラムセンターへ入ることも出ることもしゃれないのだが、シュエに頼んでルオンの分は偽造してプログラムセンターに入った。シュエのルートは馬鹿にならないものばかりで、ヒロトもまた頻繁に利用させてもらっている。

戸籍確認を行った後、ヒロトとルオンは支給されたスーツとヘルメットを受け取って更衣室へ入った。防塵と酸素マスク兼ヘルメット。このヘルメットはドラゴリーネの呼吸法を応用し、開発されたもの。言わばドラゴリーネを利用した実験結果がこのヘルメットだ。ヘルメットは初期に開発され、今は普通のヘルメットと変わらない。ヒロトもルオンもヘルメットを使わずともシエルターの外で活動出来るのだが、用心に越したことはない。シエルターの外で活動出来る人間がいてはいけないのだから。

誰もいなかったらヘルメットを外すかと決め、ヒロトはヘルメットを被った。

「やっぱり、呼吸しづらいな……」

更衣室から出ると先にルオンが出ていた。白のスーツに色を合わせたのか膝より上のニーハイブーツを履き、アクセントとして黒のニーハイを合わせていた。動きやすいように短パン。露出が多い気がするが、気にしないように努めた。

白のスーツのルオンと違い、ヒロトは紺色のスーツだ。膝下のブーツに長袖長ズボン。ズボンをブーツの中に入れ、ダボつかせた。腰のベルトに実用弾と麻酔弾、術式を込める用の空弾、四五口径のオートマチックをガンホルダーへセットし、左腰に日本刀と脇差しを差す。

「ほう、貴様の本気が見られるのか。楽しみだな」

ルオンの腰のベルトもヒロトの装備とほぼ同様だが、右腰と左腰の両腰に同じ長さの日本刀が差さっていた。銃は背面のガンホルダーにセットしてあった。

確かに華奢なルオンが日本刀と銃を扱っているところは一見想像しにくい。日本刀も銃も自由自在に扱う姿を見れば、一瞬にして考えは改めるだろうが。

「じろじろと下賤な目で見るでないわ！ このケダモノが！」

頭から爪先までじっくりと見ているのに気付いたルオンは、げしりと脛目掛けて蹴りを放った。以前ルオンに蹴られ内出血を起こしていた場所でじんわりとした痛みがヒロトを襲い、脛を摩った。

「人をケダモノ扱いたくないで欲しいな……ただ単に守衛さんとかが言っただのは本当だったんだなーと思っただけじゃないか」

「貴様もアイツらと同じくただの奴だと愚弄しておるのだろうか？」

貴様は一度記憶を忘却させた後、正しい認識を植え付けた方が良さそうだな。覚悟しろ！」

「ルオン、この前術式の展開に失敗したこと忘れてるわけではないだろうな……リミッターが課されている状態では記憶操作系術式の展開は無理だ」

盛大に舌打ちをし、ルオンはもう一度ヒロトの脛を蹴り上げた。

「っっっ」

身悶えるヒロトを余所にルオンはさっさと出入り口へと向かう。

久々にシエルターの外へ出るのだから気分は最高潮に高揚していた。今すぐ人化を解き、自分達だけに許された大地を掛け回りたい。つたし、大空を飛んで上からシエルターを見下ろしたかった。汚染されているとはいえ、ルオンにとっては汚染前の大自然と変わりないのだから。

「今、十五時なので二時間後の十七時になっても戻らなかつた場合には軍へ遭難したと連絡が入るようになっていきます。今日は他に害虫駆除専門機関のFIREAR PROが出勤しています。くれぐれもポイントFAには近付かないようお願いします。命の保証は出来ないと連絡がありましたので」

出入り口に立てば、入り口の門番を務めている青年が声を掛けてきた。更衣室を境にして、ヘルメット着用が義務付けられているのでこの青年もまた任務中はヘルメットを着用している。

FIREAR PROと聞いてヒロトの表情が曇った。

ポイントFAというのはシエルターを中心と考えて出入り口を起点として、時計回りにAからZまでを区切ったエリアポイントのことだ。ポイントFAの方角はちょうどアドプティドに近いポイントであり、第七洲シエルターとの中間地点になる。

もしかしたらアドプティドから脱走したか、はたまた捕獲しそこねたドラゴリーネが他の害虫と交配し、新種を生み出した可能性だつてあつたのだ。害虫は進化することに人間と近い外見を持つようになつてきており、あと何回かの交配が進めば言語や理性を持つ、現存する人間・ドラゴリーネに次ぐ第三種の生物が生まれるだろうと推測されていた。

次々と新しい害虫が発見されているが、基礎となつたのは人が保管していた絶滅した動植物の遺伝子だ。遺伝子交配をしていき、元の生物を生み出した後シエルターの外へ放つことよつて野生に帰していたのだが、人にとつて害を及ぼすモノへと進化してしまつた。

新種の害虫が発見される度にFIREAR PROが派遣され、一部献体を採取した後、駆除される。

「命の危険が心配されるほど凶悪な駆除方法なのか……」

ルオンもまたFIREAER PROの駆除現場を目撃したことがなかった。専らルオンの興味は一度、現場を見ておきたいに移っていた。

「駆除方法が一般人に見せたら失神するとか精神的におかしくなる方向での保証だと思うよ。発見されたのは新種のようなだから出動してくるのは多分、FIREAR PROの中でも精鋭揃いだろうし。何処の部隊が出動しているのかは分かりますか？」

「すみません。彼らの情報は軍事機密なので公表出来ないので……」

「じゃあ、強行突破させてもらいます」

ヒロトは監視カメラが設置していないのを確認すると、神経操作系の術式を指先に乗せ、青年の喉元に付けた。本来は額のだが、ヘルメットを着けているので一番肌と接触している喉に付ける。

「何を……」

急に理解出来ない言葉を言ったヒロトに対抗しようと青年は防衛術式を展開させるが一步遅かった。喉元に付けた指先から術式が喉から脊髓を通り、脳へと伝達する。脳の神経を掌握された青年は強制的に防衛術式の展開を解除した後、催眠状態へ陥った。

「もう一度、聞きます。何処の部隊が出動しているのですか？」

「悪名高いツヴァイだよ。害虫が存在していたのかすら分からないくらいに散り散りにするようだからな」

「何分前に行つたのですか？」

「今から十分前だ。くれぐれもポイントFAには近付くなよ」

「どうもありがとうございます。気を付けます」

お辞儀をして、ヒロトは出入り口へ向かう。自動ドアが開いて一歩足を踏み出せば、すぐさま草一つ生えていない荒地。かつて繁栄した街とは思えないほどに荒れ、本当に人が生活していたのか疑問になってくるほど何もなかった。荒地が地平線の先まで広がり、第一洲シエルターの近くには水辺もないため、乾燥した大地は広大な砂漠へと変わりつつあった。

久々に地面を踏む感触を確かめっているとルオンが口を開いた。

「ツヴァイとはどのような隊なのだ？ 悪名高いと言われているのだから、残酷な駆除の仕方をするのだろうか……」

「ツヴァイはサンプル採取を目的としていないからな。自分達の殺戮欲求を満たすためにシエルターの外に出ているような凶悪な奴らだ。俺が相手になつたとしても勝てる見込みはないな」

「ほう、貴様でも弱腰になるくらいに強い奴らなのか。是非見に行こうではないか」

嬉々とした声を上げてルオンは飛翔系術式を足に纏わせ、浮いた。飛翔系術式はその術名の通り、移動手段として一般的に使われている術式だ。

足に纏わせて浮く方式と、飛翔系術式専用の板に乗って浮遊する方式、背中に魔術式の翼を幻出させて羽ばたく方式の三つに分けられる。一番簡単な飛翔系が足に術式を纏わせる方法。

ヒロトもルオンと同じく飛翔系術式を足に纏わせて浮遊した。

「ちなみに捕まった奴らは現在生存確認されていないそうだ。自分達の任務を他人に見られたくないのもあるがFIREAER PR Oの任務自体が他言無用だからな。見付かったら抹殺されるな……」  
「機関名通りなら炎系術式なのだろうが無難に無系術式の最高レベルを展開させておいた方が得策か。ということではヒロト、我のリミッターをギリギリまで解除するのだ。どうせ貴様は魔力がドラゴリーネではなくて、人間の魔力のままに出来るのであるろう？ 我の魔力を制御しているのだから貴様にとっては何ら動作ないことだ。ただ、自分の防御術式の展開が少々手薄になるくらいでな」

気付かれていたか、とヒロトは無言で肯定する。

ルオンに掛けている術式は防御術式の流れを組む特殊なモノで、ヒロトの持つ魔力の半分を術式に当てなくてはいけないものだ。と言っても制御されているルオンの魔力を少々もらっているので、ヒロトの負担分は三分の程度。防御術式は他人に掛けている時も自分の防御として術式は発動出来るのだが、強固なものでは無くなってしまうし、展開が遅くなってしまうのが欠点だった。ヒロトは何とか自分の防御を固くしようと改善しているのだが、まだ完全に改善されていなかった。

ルオンに掛けていたりリミッターの上限を設定し直すと満足そうにルオンは笑顔を浮かべる。その笑顔を一瞬にして無へと変換させ、ルオンは左腰の刀の鍔に手をやる。

「さて、と。ツヴァイのお手並みを拝見しに行こうかと思ったが、向こうから来たようだ。行く手間が省けた」

こきんと軽快な音を立てて、手首を鳴らせば一陣の風がルオンとヒロトの間を切り裂き、砂塵を巻き上げる。ヒロトは咄嗟に防御術式を展開し、ガンベルトに収まっている銃を抜き、構えた。巻き上

げた砂塵が収まれば、ヒロトとルオンは囲まれていた。

二人を一周、囲むようにして配置された完璧な布陣にヒロトは苦笑するしかなかった。彼らの気配に一切気付けなかったのは実践から離れてしまっていた証拠である。

それぞれが得手を構え、ルオンとヒロトへ向ける。変な動きを見せれば、即行殺されるだろう。久しぶりに味わう殺気立った空気にヒロトは胸が高揚していくのを感じていた。ヒロトもまたルオンと同じく戦闘狂なのだ。

「貴様ら一般人のくせにシエルターの外で何をしている。IDを見せる」

リーダーだと思われる青年の声に、ヒロトは暴走寸前の本能を押し込めて名乗り出た。構えていた銃をしまい、敵意がないと両手を上げる。

「俺達は王立学園の美化委員会です。今日はシエルター外の警備を任されている、ヒロトとルオンという者です」

「我らのことを知っていて、このポイントまで来たと言うなら生かしておけないのを知っているな？ それにヒロトとルオンという生徒が美化委員会に在籍していると聞いてないんだが」

ここで切り掛かったらさぞかし面白いことになるのだろうなと考えたところで欲望を抑え込む。ルオンもルオンで、闘ってみたい気持ちの方が強いのだろう。未だに手は刀へと掛けられたままだった。「自分達が入ったのはこの間のことだからまだ周知されてないのだと思います。それと、自分達が知っているのは害虫駆除を行うことだけです。俺達、軍も興味はありますが、FIREAER PROにも興味があるんです。是非、見学させてもらえないでしょうか？」

この道化師が、とルオンがテレパスで伝えてくる。人とドラゴリーネ、ハルフではテレパスは契約を結んでいる同士でなければ使えず、使ってきたのは初めてだった。ドラゴ化したドラゴリーネとハルフ同士ならば契約なしに会話は出来る。

「見学だと？ 物好きもいるもんだな。言っておくが、見学だとし

ても命の保証は一切出来ないから自己責任で見学してくれ」

あっさりとした承され、呆気に取られた。

「意図も簡単に了承するのだな。何か隠しているとしたか思えない」

「我らの目的は害虫駆除だからな。貴様ら一般人の命の保証まで請け負ったつもりはない。シエルターの外に出てくる一般人なんて物好きしかいないからな。知らないところで首が飛んでいたとかザラだ。貴様らもそうならないように気を付けるがいい」

つまりツヴァイは一般人の護衛はしない。自分達の命は自分達で守れのスタイルであって、彼らにとって一般人は石や砂粒と同じ扱いなのだ。

（我がただ見学だけのつもりでいると思っているのか）

ニヤリと口角を上げ、ルオンはテレパスを飛ばしてくる。

ルオンのことだから何かやらかすのはヒロトも重々承知していた。黙って見学しているほど、生易しくない奴なのだ。シエルターの外へ出てきた目的は自分の欲求を満たすため。ツヴァイに敵だと認識されたとして、ルオンは即刀を抜き闘っていたらう。欲望が前面に出てしまったら、さすがにリミッターを掛けていたとしても簡単に解除されてしまう。

それを防ぐために自ら名乗り出て見学を申し出たのだが、ルオンは甘くなかった。

（ドラゴ化したドラゴリーネは言葉を口に出さず、他者と会話をしていた。元はドラゴリーネの遺伝子を持っている生物であれば会話出来るのだ）

まさか、と一つの案が脳裏を描いた。

ツヴァイは自分の配置に着き、アンモニア臭を漂わせて近寄ってくる害虫を討とうとしている。硫酸を吹き、身体中の気孔から劇的物を放出し続ける。六対の翅を羽ばたかせれば、突風が吹き付け、得手を吹き飛ばした。地面に足を固定させようと地系術式を展開していたが、害虫に解除術式を広く展開されてしまい、地面に立っているのが精一杯の様子だ。

ヒロトとルオンは解除術式が展開されていない場所に立っているため、影響なく地系術式で足場を固める。術式展開には自分の持つ魔力レベルに左右されやすく、魔力レベルが高ければ高いほど広く術式を展開出来る。多くの場合、

（害虫であっても変わらない。ドラゴリーネの遺伝子を持っていれば、我の声一つで寄ってくるのだよ。飛翔系を使うのが面倒だったからな。アレから来てもらったのだよ。人の良いようにされて生まれてしまったモノなのだ。我が土に還してやるべきだ……）

「危ないっ！」

リーダー格の青年が叫び、雷系攻撃型フレイヤを放つ。バシリと害虫に届く前にルオンが無系防御術式を放ち、相殺させた。

「手を出すでないっ！！ 出したら貴様らの首を刎ねるぞ」

一言だけ言い放てばツヴァイの面々はそこから動けなくなる。

自分達の異変に気付いたのか、各自治療系術式を放つも効果が見られなかった。次々と術式を自分に掛けていくが一切通用しない。それもそのはずルオンは術式ではなく、束縛系の言霊を使用したのだから。束縛系の言霊は術者よりも魔力が上でなければ自由が効かない。しかも束縛系術式はある一定以上の一族にしか使えないし、術式を展開しようにも術式自体を知らない者が多いのも特徴だ。この場で動けるのはルオンより魔力が高いヒロトだけになる。

ルオンの前に立つ害虫は背丈が三十メートルを余裕で超え、長い首を下げるルオンの前へと顔を近付けた。害虫は大きく裂けた口を開くとルオンを飲み込もうとしてきた。害虫の口から涎代わりの硫酸の雫が垂れてきて、スーツやヘルメットに穴を開け始める。

生身の状態だったら臭いもそうだが、硫酸で火傷を負い始めているところだ。

きついアンモニアがヘルメットを越えて鼻に着き、ヒロトは眉を顰める。

「ルオン、どうするつもりだ？」

「……………言っただろう？ この者はまだ、生まれてはいけなかったんだ。だから……………」

垂れてくる硫酸を諸共せず悲しそうな笑顔を浮かべ、刀に手を掛けた。抜いた刀は目にも見えぬ速さで害虫を切り刻む。害虫は呻き声一つ上げずに千々に引き裂かれた。害虫だったモノの肉片はやがて砂となり霧散した。ルオンの宣言通り、害虫は土に還ったのだ。「我が統治した時に、また生まれてくるのだ」

白いスーツが蒼い体液で覆い尽くされた。否、ルオンを中心として辺り一帯に広がる。ルオンの隣にいたヒロトも体液を全身に被った。肉片が砂へと変化した後、体液もまた砂となり、地面へと流れ

ていく。

ピツと体液が付着した刀を振って体液を払うとルオンは刀を収め、束縛系術式を解除した。

「貴様、何者だ……害虫の鱗はドラゴリーネ並なんだぞ。それをただの刀で切れるわけがない。もしかアドップティド出身者か？」

「我はただ正当防衛のために切っただけだ。正当防衛で咄嗟だったので覚えてない」

白を切ったルオンにヒロトは頭を抱えなくなった。誰がどう見ても正当防衛に見えず、自分から向かっていったように見えた。

「そんなことを聞いていない。俺はアドップティド出身者かと聞いたんだ。質問の回答次第では拘束して尋問させてもらおうか」

「すでに尋問しているではないか。殺されるかもしれないから切った。自分の命は自分で守れと言ってきたのは貴方の方だ。我は自分の命を自分で守っただけにすぎない」

これ以上ルオンに言わせても埒が明かないと悟ったヒロトは助け舟を出した。

「たまたま、彼女は襲われただけです。彼女は危険だと思い、反撃に出た。と、いうことにしておいてください。俺らも害虫に興味があった。シエルターの外へ出てくるような人がどんな思考を持っている人達なのか理解していると思っただけですが」

若干助け舟になっていないような気がするなとヒロトは思いつつも言った。

相手は自分のような一般人ではなくて害虫専門機関のプロなので、シエルターの外へ出てくる奴がどんななのか詳しい。ヒロトもまた昔、シエルターの外へやってくる馬鹿な人達を大勢見て、生きて帰った人の少なさに驚愕した。

危険を顧みず、シエルターの外へやってくるチャレンジャーは後を絶たない。何がそんなにシエルターの外へ行きたがさせるのかヒロトは疑問だった。

青年はヒロトやルオンもまた、チャレンジャーのうちの一人だったのだと納得させた。

「……俺の考えが甘かった。確かにシエルターの外へ出てくる一般人のほとんどは害虫やドラゴリーネに興味を持ち、あわよくば自分達が闘って手柄を上げたいという者だ。大体は自滅して食われるか、保護されるかのどちらかだ。斃したのはお前達が久々だな。咄嗟の割には所作が良かった気はしたが。……最近、学園で噂になっている強い生徒というのはお前達のことなのだろうな。ハルフに押され気味な学園の勢力図が変わるかもしれないな」

「貴様、一体何を知っていると言うのだ。場合によっては強制的に吐かせるぞ」

ぎゅっとルオンの眉が寄る。

「学園の勢力図は国内部と違ってハルフが台頭しているんだ。その勢力図が人寄りに変わると言いたいんだよ。つまり生徒会側から美化委員会へのシフトチェンジだ」

「我は……」

ルオンは何かを言い掛けて噤んでしまった。ヒロトには何を言わんとしているのかわかり、黙った。

「まあ、俺らの任務は終わったから後の見回りは頼んだよ。あ、そうだ。俺ら設置されてた監視カメラは全て排除したからって報告しておいてもらえる？ 獲物を奪ったんだからそれくらいのことをして当然だよな？ もちろん、害虫は俺らが斃したとしておくからさ」

これで等価交換成立だろう？と青年はにこやかに言う。

任務で来ていた彼らの仕事を奪ってしまったのだ。それくらいしてもいいかとヒロトは思い、頷いて了承した。監視カメラも全て壊

してくれたのだから、ヒロトとルオンにとっては都合がいい。自分達で破壊する手間が省けたのだ。

「んじゃ、また会う日までー」

踵を返して青年はツヴァイのメンバーを引き連れてシエルターへと戻っていった。

「……ルオン、外へ出たかった本当の理由はなんだ」

「外に出て空気を吸いたかった。これだけでは不満か」

カポリとルオンは被っていたヘルメットを外す。さらりとポニータールが風に吹かれて靡いた。外したヘルメットを小さく畳み、ポケットの中に戻すとルオンは背伸びする。改めてルオンとの違いを実感せざるを得なかった。

独特の呼吸法を用いて、ヒロトもルオンと同じくヘルメット無しでシエルターの外へ出られる。だが呼吸法を一度でも止めてしまえば、ただの人と同じなのだ。形態は同じ人であっても、中身が違う。人とドラゴリーネは内臓組織、果ては細胞・遺伝子が全く違うので外見が人であっても、シエルターの外で自然に空気が吸えるのだ。

「やっぱり、生身の方がいいな。落ち着くわ」

「得手も、自分の鱗から精製した代物だろう？ いつの間に取り変えたんだ」

スラリと左腰の刀を抜き、切っ先をヒロトへ向ける。銀色に光る刀身は一瞬光った後、黒く光る刀身へと変化させた。元のルオンも黒だったなとヒロトは思い出す。

「我のモノでないで、害虫を屠れないだろうよ。一瞬にして痛みを与えず安らかな眠りを与えるためには借り物では対応しきれない。スピードに追い付けず砕けてしまうのだ。さて、ヒロト。此処には邪魔者が一切いない。貴様の実力を存分に我に見せてみよ」

「いいけど、ルオンが逆に怪我しないようにね。俺、治療系術式はあまり得意ではないから」

「とことん、攻撃型というわけか。せいぜい私の期待を裏切らない動きをせよ。手を抜いたら分かっておるだろうな？ 契約解除して

貴様の正体をバラしてやる」

「んーバラされるのは面倒だからお言葉に甘えて全力で行かせてもらおうよ」

ヒロトもヘルメットを外して畳んでしまった。

一息、深く深呼吸し肺に空気を取り込む。久しぶりに取り込むシエルトターの外の空気は有害で肺を蝕んでいく感触が分かる。目蓋を閉じて、精神統一してから再び目を開ければ、風も呼吸もスローモーションのように感じられた。

腰を深く落とし、ヒロトは鎧に手をやり、引き抜いた後ルオンとの間合いを詰める。ルオンは自分から間合いを詰めようとせず刀を構えていた。

ぎいんと鈍く金属音が響き、重なった金属から火花が散った。

「これが我を抑えている力かえ？ もっと我にヒロトが持つ力を見せてみるのだ！」

ぎちぎちと刀が鳴り、力で圧倒しようとしてヒロトは刀を持つ手に力を込めるがルオンは鼻で笑い飛ばした後、ヒロトを押しやった。

「つつ」

「貴様、本当に我が同族を狩っていたのか？ 今のヒロトには覇気がない。我が知っている者は毒々しいまでに覇気を持っていたぞ」

「狩人は引退したからな。ひっそりと平凡な暮らしを過ごそうと思つたところだったんだ。腕も鈍るわな……」

以前は毎日のようにシエルトターの外へ出る生活をしていただけいか、今の換気・浄化された空気では肺が元に戻ってしまったようだ。前感覚に戻すには少々時間が掛かってしまう。本気を出したくても身体が追い付かない。今のルオンは本気を出していて、このままではヒロトは負けるだろう。

（負けるのは嫌だな）

動きたいのに動けない。身体と心が一致しないジレンマに襲われて、ヒロトは自嘲した。

「我が現れたからと言いたげだな。我の存在がそんなに邪魔だと言

うならば我は即行契約を破棄しようぞ」

「破棄したかったら今すぐにも破棄すればいいじゃないか。何で今すぐにしようとするの？」

「っ！？ うるさいっ！ そんなの私の勝手だろうが！ 我も一応は逃亡している身なのだぞ？！ 私の都合だつてあるのだ！」

激昂し、顔を真っ赤にしつつ言うルオンに説得力がないなとヒロトは思った。

ヒロトも甘い所がある。だがルオンはそれ以上に甘い。

「はいはい、分かったから続きな」

慣れるまでに時間が掛かると案じていたが、身体はすぐに順応してくれたようだ。

左手だけ持った刀を振り、感触を確かめれば納得がいく。

防御術式を張っておいた方がいいよ」

ヒロトは再び腰を低く落とし、刃先を自分の方へ向ける。最大出力の瞬発加速を足に施し、広がっていたルオンとの間合いを詰めた。インタラクセ

「ふんっ我が防御術式なぞ張るとでも思ったか。　っ?!」

全てをスローモーションにする動作効果系術式を身体に纏い、先程と同じ攻撃にルオンは避けようとしたが、間に合わず腹に食らった。受け身を取れず、まともに食らった腹は痛みを発し、ルオンは膝から崩れ落ちる。げほりと息を吐いた後、ルオンは刀を杖変わりにして立ち上がった。治癒能力も圧倒的に高いドラゴリーネは峰打ち程度だけでは失神しない。腹筋に力を入れるだけで、当たると予測される部位に硬度の高い鱗が出現する。今のルオンの身体も同じ仕組みを取っているだろう。

「動作効果術式が掛からなかったと……」

「ルオンに掛けたのは反動作効果術式。つまり解除術式だ。あとは普通の峰打ちしかしてないよ」

「部位限定で鱗を出したのは貴様が初めてだ。見るよ、顔にも出てしまったじゃないか。鱗出たら通常に戻るのに時間掛かるんだぞ」

「尊麻疹みたくぼつぼつと頬に浮き出た鱗。致命傷を負う可能性がある」と本能で感じた時に出てしまう鱗は有意識下で戻すには少々時間がかかってしまう。

「へえ、ルオンちゃんってハルフかなんかなの？　でも出してる気がハルフじゃないんだよなあ。ねえ、ルオンちゃんって何者？　ヘルメット被ってないお前も何者？　人間？」

突如、ヘルメットを被った、聞いたことのある少年の声が響く。右手にはオートマチックの銃を持ち、左手には両刃の剣が握られていた。

「返答次第では軍に突き出すよ。と言っても、軍よりも先に研究所

がお前を連れていくだろうな。ヘルメットを被っていない人間なんて研究所か収容所以外の外で存在しちゃいけないんだから……もしくは現王族以外か。それ以外に属しているお前って一般人？」

銃口はヒロトにだけ向けられていた。ルオンの魔力を感じ取っているとしたら、ヒロトにとっては非常にマズい状態だ。

「……………」

「ああ。自己紹介してなかったね。僕は王立学園の生徒会長を務めているデリタルだ。君達の名前と所属は？」

致命傷を負ったドラゴリーネは本能で魔力を最大限に発し、威嚇する習性を持っている。ルオンもまた例外ではなくて、抑えているもの以上の魔力を発している状態。それがデリタルにどう作用するのか、分かっているからこそどうしようか迷う。

デリタルは術式の二度目は効かないという特異体質の持ち主だ。

つまり前掛けた記憶操作系術式はデリタルには通用しない。禁術とされているだけに使用者も少なく、データベースに登録されていない術式だ。使用者からヒロトの身分が割れるということはないに等しいが、使っている一族自体に問題があった。

「ただの一般人ですよ。ただ有害物質を取り込んでも大丈夫な特異体質だけです。けどさすがにこれ以上吸っては害なのでヘルメットだけでも被っていいですか？」

白を切り通すしかなかった。下手に刺激して、以前の記憶を思い出されても困る。

それに顔を覚えられても困った。

畳んだヘルメットを復元し、被ろうとする。

だが。

「名前は、と聞いている」

ぎつと殺気を放ち、デリタルはヒロト目掛けて撃つ。弾はヒロトの顔ギリギリを飛び、頬に一筋の傷が走った。シエルターの外で傷を作ることがどんなに危険に晒されるのかデリタルも知っている。傷口から有害成分が侵入したら最後辿る道は死だ。

ヒロトはすぐさま治療術式を掛け、傷口を塞ぐ。シエルターへ戻ったら、ワクチンを打たねばと思いつつ、煙を漂わせて尚も銃口を向けているデリタルに向き直った。

「すみません。会長のような人が知って得するような名前ではなかったもので。俺はヒロトと言います。こちらはルオン。俺達は美化委員会に所属していて、シエルターの外には見回りとして来ていましたが、ルオンに無理やりヘルメットを外されてしまったのです」

「貴様！ 方便もいい加減に……！」

ルオンが違うと否を唱えるが、ヒロトは一瞥しただけでルオンを黙らせた。

「ヒロト、ね。ヒロトはただの人間だって分かった。じゃあルオンちゃんは？ 同胞？ 最上位種？」

デリタルはルオンの正体が何のか本能で感じ取っているのに問う。意地汚い奴だとルオンは溜息を吐いた。

「最上位種だったなら、どんな行動を取るんだ？」

「聞かれるまでもない。今すぐにでも我々ハルフが保護する。貴様ら人間の監視下に置かれている状態に晒す真似なんて出来るか。せつかく人間からハルフの聖地を作ったんだ。良い用に活用しない手はないだろう。お前だったらどんな学園にする？」

「どんな学園かあ。そうだな、人間もハルフも関係なく平等にする学園にするかな」

「無理だな。学園はこの世界の縮図のようなものだ。縮図を変えたければ、世界をも変える自信を持たなくてはいけない。その覚悟がお前にあるとは思えないな。人間はハルフを従えることで自分の地位を獲得しようとしている。お前もそうだ。ルオンちゃんと契約術式を締結している。この意味がなんだか分かるか？」

「言ってる意味がさっぱり分からないよ」

分からないと両手を挙げる。あくまでも白を切り続けるヒロトにデリタルは顔を歪めた。

学園が世界の縮図というなら、学園という箱庭を瓦解出来たら世

界も変えられるのだろう。

ヒロトが言ったのは半分冗談であり、本心でもあった。ヒロトが学園にやってきた理由もこの一つになる。

ヒロトはルオンを自分のエゴのために契約したつもりは一切なかった。ルオンとヒロトの利害が一致しただけの協力関係でしかない。待ち受けるだろうヒロトの面倒事に関わらせたくなかったし、面倒事が起こると分かった時点でルオンとの契約を破棄しようとしていた。

「契約術式を結べるのはドラゴリーネかハルフかのどちらかになる。ドラゴリーネ自体の固有数は減っているから保護している最中で、街中にいるドラゴリーネはゼロに等しい。ハルフと人間は関係自体が良好でなくなってきたから契約を結んでいる人も少ない。学園でも人間とハルフ同士が契約を結んだ時、申請が必要なんだがヒロトとルオンちゃんは申請をしていない。そもそも、ルオンちゃんの分類は人間になっている。だが君達二人は契約を結んでいる。この矛盾をどう説明してもらおうか」

「自己納得しているのにわざわざ聞くとはとんだ茶番に付き合うつもりは全くないぞ。はっきり自分が思っていることを述べればいいのだ」

デリタルは自分の推測を訊こうとせずになんか言わせようとしている。業を煮やしたルオンが進言した。

「じゃあ、言わせてもらいます。ルオンちゃん、いやルオン様。僕と一緒に来てください」

「その頼みは聞き入れられないな。我はこの学園ですることがあるからな。ハルフ側の拘束があつては不便だ。どうせ保護という名目で、私の能力を搾り取るうとするのは明白だからな」

「どうということだ？」

ハルフが敬う対象としている純粹種のドラゴリーネの能力を搾るという行動が理解出来なかった。まだ知らないハルフの特徴があるのか。ドラゴリーネとハルフの立場が逆転してしまったか。人間側につくにしてもハルフ側につくにしてもルオンは安全に過ごせないということ。

「ハルフは半分が人間、もう半分がドラゴリーネという中途半端な存在だ。中途半端を無くすためにハルフは上位種である純粹のドラゴリーネの血肉を奪って完全なモノになる術式を編み出したのだよ。」

研究所で我も何人かのハルフを完全なモノへと進化させた。完全なモノと言っても紛い物に過ぎぬ。一部能力をドラゴリーネと同等のモノへと変えるだけだからな」

「それでも！ ドラゴリーネには変わらない。ハルフはシエルターの外で自然体のままで活動出来ない。だがドラゴリーネになれば出来る！ 侮蔑を含んだ視線を受けることも罵倒されることも屈辱を味わうことも無くなるのだから！ 軍に入れば一気に将校レベル結婚して子どもが出来ればその子どもはハルフではなく純粹種のドラゴリーネとして扱われるのだ！ 得をすることばかりじゃないか！」

「メリットは知っていてもデメリットは知らないのか。純粹種の血肉はドラゴリーネの血を活性化する以上に人間の血をも活性化する。活性化させる比重がドラゴリーネか人間かによつては人間になり下がることだつてある。デリタル、貴様はどちらになるのだろうな？」

ニヤリと笑うルオンの顔がやけに毒々しい。  
「実際にハルフから人間になった奴がいるつてことなのか？」

ルオンが仕様を知っているということは逆になってしまった人が少なからずいるということ。

「どうだろうな。我はまだ見たことないが風の噂で耳にしたことがある」

「とにかく、ルオン様には来てもらいます」

「断る。ヒロト、お前は手を出すでないぞ」

「はいはい」

右手を前に差し出したデリタルは拘束系術式を展開してルオンに向けて発動させる。ルオンは即座に無系の防御術式を展開し対抗した。バチリと術式同士が反発しあい、跳ね返る。

「ぐつあつ！」

一瞬の隙を突き、デリタルの術式がルオンの手足に絡み付く。樹木の蔭がルオンの身体を伝い、気道を圧迫させる。

詠唱、無詠唱の共通点は術式を頭の中で描くことが最重要だ。脳

の酸素濃度を減らし、思考させないようにすれば術者は呆気なく拘束されてしまう。術者同士の闘いで気を付けることは首にダメージがないようにすることだ。

全身に鳶が巻き付き、ルオンはぐったりと手足を投げ出した辛うじて意識はあるだろうが、術式展開は難しそうだ。ルオンの真白い肌が本来の姿であるドラゴリーネの鱗に覆われていく。

防衛本能が作用しているのだろう。ルオンの爪は鋭利に尖り、骨格も変わり始めていた。

デリタルは別の術式を展開し、ルオンのドラゴ化を防いだ。術式が展開された後、ルオンの鱗と爪は正常に戻った。

「助けようとしませんか」

一歩も動かないヒロトを不思議そうに見るデリタルは言った。

「んー。ルオンは『手を出すんじゃない』と言ったもんでね。手を出したら後々面倒だしさ。……今度、武術大会やるよね？ 俺、美化委員会で参加するからさ。そこで勝負しないか？」

「へえ、美化委員会に所属しているんだ。……いいよ。あそこのいけすかない奴らには痛い目を合わせてやろうと思っていたところなんだ。最初に当たってたけど、楽しみは最後に取っておいた方が余興として楽しめそうだ。その試合に勝ったら、ルオン様を返してやつてもいいよ」

ニヤリと口角を上げ、闘うことに喜んでいるデリタルにヒロトは嫌気が差した。

ルオンも闘いに反応して無邪気に瞳を輝かせていた。かと言うヒロトも闘いとなると心を躍らせていた時期があった。今は踊らすまではいかないものの、楽しんでいる自分がいるのも事実。同族嫌悪というわけではないが、人間の本能とは違う何かを感じてヒロトは嫌がる。

「生徒会が負けたら？ 生徒会が負けたらどうするんだ？ ルオンと同等の対価のモノなんてないだろう」

「僕らが負ける?! 馬鹿言うのも大概にしてくれよ。ここ何年か

は僕らハルフが勝っていたんだ。人間相手に負けるはずがないだろう?！」

ゲラゲラと腹を抱えて笑い始めるデリタルにヒロトは眉を顰めた。プライドが高いのもドラゴリーネの特徴だが、逆に仇となることが多いのが玉に瑕だ。

「下駄を履いてみないと分からないって言葉知ってるか?」

「何を……」

「勝負事はな、本番になってみないと分からないんだよ。何処でどんでん返しがあるか分からない。始まって状況が一変することだってあるんだ」

「どんでん返しは起こらない。起こる前に君ら美化委員会を倒せばいいんだからね。じゃあ、楽しみにしてるよ。それまで少ない能力を高めておくことだ」

フンと鼻でデリタルは笑い飛ばし、シェルターへ戻っていった。

「 ということで、ルオンが生徒会側に引き取られてしまったんだ。ルオンを取り戻すために協力してほしいんだが良いかな？」

シエルターの外での出来事を大まかに美化委員会のメンバーに話せば溜息を吐かれた。もちろんFIREAER PROに遭遇したことは言っていない。言ったら溜息だけで終われなくなってしまっただろう。

落胆の溜息が次々と上がったので、ヒロトは疑問符を頭に並べる。

「で、易々とルオンちゃんを引き渡した言い訳を聞こうか」

お前にも考えがあったのだろう？ と訊かれ、ヒロトは言った。

「ルオンが手を出すなど言ったからそれに従ったまでだけど？ それにいつまでも、ハルフ側に負けているのもプライドが許せない。勝敗を決めるには公式で闘った方が人目に着いていいだろうし、不正行為も出来ない。公式試合なんだからハルフ側はドラゴ化の制限がある。ドラゴ化の状態だと特殊な術式を使用しない限り鱗をカチ割るなんて難しいし、俺らに勝ち目は無い。それに何かしらの褒美があった方が燃えないか？」

ルオンの意見を聞いたと言った途端、メンバー全員に呆れられた。ヒロト自身もルオンの命令がなかったら実力行使して、擦じ伏せていただろう。しなかったのは生徒会と美化委員会の立場を大いに利用して一気に問題を解決しようと考えたからだだった。

頭痛がしてきたと、ファイは眉間を揉みほぐす。

「ヒロト……性格変わったね。前は鬪いに固執してなかったのに。ルオンちゃんとの出会いがきっかけなのかな」

ふっと笑ってシュエがぐりぐりとヒロトの頭を撫でようとする。ぺしりと叩き落とすとヒロトは照れ臭そうに言う。

「ルオンと出会ったのもあるが、色々決めないと面倒な時期に来ているだけだ。これからスパルタで扱いてやるから覚悟しておけよ。」

……あまり他に教えたくないがドラゴ化した場合に備えての術式を教える」

「その術式ってアドップティドの武人が使うやつなの？ 俺らが使っても問題はない？」

サクが心配そうに訊ねる。

「ちゃんとデータセンターに登録されているものしか教ええないから安心しろ。使用しても違法にならない。ただちよつと習得に手間が掛かるだけだ」

「……そう言ってヒロトは何も話さない、頼らないで自分だけで解決しようとするんだ？」

「……………」

ベンチに座って状況を見守っていたキャリルがぼつりと口を開く。ちくりと苦言を差されてヒロトは黙ってしまった。

「そつだよ！ 十分ルオンちゃんのこと話したくせして、これ以上は危険だから首を突っ込むな？ 大事な友達が拉致されてつたの指を銜えて待ってるって言うなんて、性格悪すぎない？」

ルキがじろりと口を尖らせて言うてくる。

「ルキの言った通りだな。困っている戦友を助けるのが友達として当然だろ？ それにさ、これはヒロトとルオンちゃんの問題だけじゃなくなつたんだよ。ヒロトは武闘大会でルオンちゃんを取り返すと啖呵切つたんだ。啖呵切つた時に少しは俺らを信用してくれたってことじゃないのか。」

それに始めからルオンちゃんが攫われることを前提で事を進めてきたようにしか思えない。ヒロトは何のためにこの学園に来たんだ？ 目立ちたくないのなら体育の時だって指揮をしなければよかったんだし、わざと負けることだって出来た。ルオンちゃんを意図的にハルフ側に分らせるようにした理由はなんだ？ これだけのヒントを与えたんだ。ヒロトは答える義務があるだろっ？」

ファイに出会った時からの疑問をぶつけられ、溜息を吐くのに留まった。

ここまで追及されるとは、と感心してしまうが始めから協力者を仰ぎたくての行動だった。

今、言ってしまうえば協力してくれるのかもしれない。言うのはルオンを取り返してからでもおかしくない。

ルオンと契約を結ぶという意味が最大のヒントとなっているが、何が答えかまだ導き出されていない。それは軍最大、いや国家最大の機密事項に関わる事柄だ。知ってしまったら反逆認定を受ける可能性だつてある。

仲間を犯罪者にしたところで、今のヒロトでは覆す力がまだない。「もうちょっと、もうちょっとだけ待つてくれないか？ 取り返す前でギクシャクしたくないし、気まずいまま大会に臨みたくないんだ。油断したら一気に畳みかけられて負けるなんて、啖呵切った手前で無様な負け方したくないし」

態度を百八〇度変えられるのは目に見えているし、気まずいままだと上手く連携が取れにくくなってしまふ。生徒会相手だと小手先の技だけでは通用しない。

単騎攻めの戦法を取りやすいドラゴリーネ特有のプライドを瓦解するには、連携と確実な予測が必要だった。

予測データは過去の試合分と、三か月に一回測定される個人データで大体の予測は付ける。あとは臨機応変に対応するまで。ハルフは特に攻撃パターンが一定になってしまふから一つの予想を組めば一気に落とせる。

ヒロトが大会前の今は話したくないと言えば、微妙な空気が練習場内を包み込む。

そつだと手を叩いて、シュエに訊ねたのはキャリアルだった。

「シュエ先輩は知っているんですね？ 幼馴染みと聞いていますし、幼学校だつて一緒だと言っていましたし」

「んー。僕の口から言っているとは思えないからヒロトが言うまで待つよ。ただ、皆の人生を大きく左右するかもしれない事柄、という進言だけはしておく。それでも知りたいなら大会が無事に終わっ

てルオンちゃんと一緒に祝杯パーティーが開けたらヒロトも話してくれると思うよ。ね、ヒロト」

「ああ、必ず。じゃあ、始めようか」

床に座っていたヒロトは立ち上がった。

「生徒会メンバーは補欠メンバーを入れて六名ほどの少人数だ。会長のデリタルが指揮と前衛、会計のラムナも前衛、副会長のシオンが防衛、書記のメルンコリニックが狙撃手だ。他の二名補欠メンバーで後方支援を担当している」

「ポジション変えの可能性は？」

「ゼロに近いけども確率としては捨て切れないよ。属性としてはデリタルが炎系、ラムナが土系、シオンが水系、メルンコリニックが闇系だったかな。メルンコリニックは特に幻影系が特徴で狙撃手だけど近距離戦も行える。自分の姿を隠して、最終防衛ラインまで一気に突っ込んできて旗を奪取される、というパターンも過去にあるよ」

「メルンコリニック対策としては防衛ラインに闇系と幻影系の解除術式を展開しようか。各個人は闇系・幻影系術式を跳ね返す魔術具を付けておくべきだな」

「魔術具形成は任せてくださいっ！メルンコリニックが登録している術式を全部跳ね返すのを作ってみせます」

マニが手を挙げて言う。

「マニの得意分野なんだよね。マニの目指している職業が魔術具製作師。マニの家は魔術具製作師の業界でもトップクラスなんだから！」

「ちょっと、サク……そこまで私は優秀じゃないよ。まだ修行中だし……」

「頼もしいや。じゃあ、武具も大丈夫なんだよね？ 後で作ってほしいものがあるから頼んでも良いかな。日本刀なんだけども、学園からの支給品だと合わなくてさ」

「もちろん！ ロストテクノロジーと言われてるけど、口伝で教わったから鱗さえあれば精製出来るよ」

持つてる？とヒロトに訊いてくる。

ポケットの中からルオンと出会った時に剥いた鱗を差し出す。

目映く金色に輝く鱗は持ち主の身体から離れていても、輝きを失わずに光り続けていた。

「これって、もしかしてルオンちゃんの？」

「幼生体の鱗だから日本刀一本精製するにはキツいかもしれないけどさ……っ！？」

瞬間、ルオンからテレパスが送られてきて、ヒロトは頭を押さえた。激しい耳鳴りがし、まるで耳元でルオンが喋っているかの如くルオンはテレパスを飛ばし続ける。

「ヒロト君？」

「せ、精製出来るのに何枚くらい必要なのだ？ ってルオンが……。自分の鱗を剥ぎ取られるのにやけに積極的だな……。まあ、枚数は多い方が良いのが出来上がるというのが最低どれくらい必要なんだ？」

「幼生体なら一〇枚くらいあれば脇差しまで作れると思うけども。一般的な長さで、色は銀色に加工しちゃって良いんだよね？ 一部だけ金色を残すことも可能だけでも」

「分かった。ルオンから直接送らせるよ。武器申請で止められたくないしな。金色の鱗を持っているドラゴリーネなんてルオンくらいだし」

「わかった良い物を作るね！ ということでシュエ先輩！ ヒロト君の日本刀を作るのに暫く離脱します」

了承されるとマニは練習場を後にして行った。

「ところ、でさ。ずっと気になっていたんだけど。何で右手だけグローブ嵌めているんだ？ 確か座学の時もグローブ嵌めっぱなしだったよな？」

「あー気分だよ。気分で付けているだけのものだからファイが考えられているような深い意味はないから」

外してみせて、ヒロトは右手を振る。

勘繰っているような疑念を抱いたままでは明らかだったが、

今は逸らしておきたいのがヒロトの本音。

「なんか、グローブの下に秘密でもあると思ったわけ？」

「王族の特徴に似ていると思ったただだよ」

ファイがじつと右手を見詰める。傷一つない右手は何ら変哲もなただの右手のように見える。だがファイにはファッションで身に付けているとは到底思えなかったようだ。

「特徴？ 目立つ特徴が術式展開とドラゴリーネ以外に何か関係していることがあったのか？」

「王族は基本的に無系術式を使い、言霊術式と呼ばれている古代術式で人を従わせる。一番の身体的特徴と言ったら王族は必ず身体の何処かに紋様の入った宝珠を持って産まれてくるんだよ。一般的には知られてない、これも機密事項の一つに数えられるらしいがな」  
その機密事項を一体何処で入手したのだと聞きたかったが、余計な詮索は避けた方が良さそうだ。

「話が飛びすぎてて訳が分からないんだけど。もつと具体的に分かるように説明してくれないか？」

疑問符が頭を覆い尽くして理解出来ないと根を上げたのはキヤリルだった。

「キヤリル、お前は狙撃だけの能力しかないのか……」

「なんだと?!」

唸るキヤリルに溜息を吐いてから簡潔に説明したのはルキだった。  
「簡単に言えば、グローブの下に宝珠があるんじゃないのかって聞きたかったんでしょ？」

「ええ?! それってつまり……」

ヒロトはぶつ飛んだ発想に頭痛がしてきた。

「王族の一人で、学園内での問題を解決するのが次の王になれる条件だって言われてきました……って言ったら信用してくれるものなのか？ 俺はあくまで一般人でちよつとだけ術式とドラゴリーネに詳しいだけであって、それ以上の身分はないよ。って、笑わないでくれる？」

最初の方を言うと各々が緊張したような驚きを見せるが、間を十分に開けて言えば安堵したような素振りを見せた。

やけに大笑いしたのはシュエだった。大笑いしたシュエを一瞥し、シュエは悪びれを感じせずに言う。

「ごめんごめん。確かにヒロトは無駄に知識や術式を知っているけど、王族レベルには達してないよ。王族はもつと術式の知識も豊富だし、プライドも高いしさ」

「シュエ先輩、王族に知り合いがいるみたいなのぶりですね？」

サクが突っ込む。サクも軍上層部に知り合いがいて、少なくとも王族のことを小耳に挟んでいるのだろう。

「美化委員長をやっているとどうしても学園外の接触が増えてくるからね。王族だけじゃなくて王の側近やらにも会う機会が増えるし。今度、他の美化委員会のメンバーとも会っておきたいと言われているから行くよ」

「え……………」

戸惑いを見せるのはヒロトで。

「ヒロト、何か不満でもあるのか？ 行きたくないなら別に行かなくても良いと思うけど後先パイプを作っておいた方が楽だぞー」

暢気にコネ作りには最適だと言うのはキャリアルだった。

コネ目的に近付きたいのなら王族に気に入られるのが先決だろうが、ヒロトは一切興味がなかった。

「パイプねえ。まだ俺には必要じゃないからいいよ。上辺だけの付き合いとか面倒臭いしさ」

「ヒロトが俺の下で働くことになるかもしれないんだぞ?!」

「それは有り得ないから安心しておくよ。使つてやるのは俺の方だからな」

「ヒロトが言う現実になりそうで怖いよな。本当にこき使われそうだ……………」

苦笑するキャリアルにヒロトは空笑いする。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「で、ヒロトはどう瓦解しようとしているのか話を聞かせてもらおうじゃないか」

ずいっと身体を前に出すとキャリルは聞き手に回った。

## 5の10：前哨戦

「ヒロトってホントに何モンだよ……。生徒会に次ぐ強さを誇っているのに意図も簡単に陣形を崩すわ、内部分裂を生み出すわ。かと言ってこちら側の防御と攻撃は完璧だし。どんな生活を送ってりやあんな奇策を思い付くんだが」

キャリルはスコープを外したPSG-1と短距離射撃に向けたグロツク17を備え、木の上で待機していた。

今は硬式・軟式野球合同部との対戦。これに勝てば次、決勝で生徒会と当たる。

準々決勝の相手は生徒会に次ぐ実力を持っているとされた、三年運動委員会。引退したが運動を続けたいという主に三年生で結成された委員会だ。

様々な部に所属してただけあつて、個人能力的には生徒会と同等の能力を持っているが、団体戦には不向き。ヒロトは弱点となる、そこを徹底的に突いただけ。

バックアップと連携が思ったように取れていないチームは一人一人を困い込んで倒した方が早い。ヒロトはまず一人になりやすい狙撃手から落とし、バックアップと順々に落としていった。

最後はフラッグを守っている指揮官の生徒だけになりジエンド。鮮やかとも取れる指揮にキャリルは舌を巻くだけだった。

情報伝達係を担っているルキの使い方が上手いのだ。ゲームスタートと同時にルキの情報収集の術式をグラウンド全体に展開し、敵味方の位置と攪乱を同時に行う。攪乱の術式をルキに渡しているのはサクの役目。

本陣にいるシユエが全体の指揮。ルキとサクは第一防衛ライン。第二防衛ラインにマニ。中央に狙撃手のキャリルで第三防衛ライン。前衛にヒロトとファイという陣形を取っていた。

『本人はその場で思い付いたって言うたけど、俺らより回転スピードがおかしいと思っておくのが無難じゃね？ 場数を踏んでなきやあんな策思い付かねえよ』

イヤホン越しに話しているのはヒロトと別行動を取っているファイだ。

『キャリル、次西北西の方向を射撃してね』

『はいよー西北西っ』

PSG-1を構え、キャリルは指示された方角へ銃を向ける。三百メートル先の西北西の所にAK47を構えた敵がいた。

『おおっ。ちゃんというなあ……。俺には目の前に見えるのに、敵は見えてないんだよなあ。俺に見付かったことを後悔しとけ』

一発放てば、潰されたような声と人が倒れる音が聞こえる。

『ルキの情報は完璧だなあ……。ヒロトもそうだけど、シユエ先輩もまた攻撃するの得意というか。あんな長距離術式打てるって聞いてなかったんだけど』

防衛ラインを一気に潰せる長距離の攻撃術式を扱える生徒は学園内でも少ない。

『ちまちま潰していくのは面倒だから一気に潰そうか』

なんて、笑顔で軽い一言で打てるような術式ではないし、術式発動するために錬成術式を描く必要がある。事前にシユエが長距離の攻撃術式を使えると知っていないとヒロトもシユエの配置を本陣に置かないだろう。

ゲームが始まってすぐに発動された術式だったから意表を突くにはピッタリだ。

スタートの合図と同時に長距離攻撃を行い、着弾して敵が混乱している間に瞬発加速し敵陣へ一気に突っ込みフラッグを奪取して終わったのが初戦。一発目に打ち上げたものは大きすぎた。

『キャリル、東北に移動して。その位置からだ二人倒してるから。十五分後に防衛ライン突破して本陣へ一気に攻め込むから長距離弾道撃てるようにしておいてね』

「了解！。長距離攻撃を敵陣地に打ち込むなんて、シユ工先輩の戦術はおっかないな」

キャリルはPSG-1を肩に担ぎ、地面に降りる。幻術系の術式を自分の周囲二メートルの範囲で効果指定すると周囲の音に気を配りながら移動を始めた。

## 5の11：前哨戦2

「こちら、ファイ。第三防衛ラインに到達したよ。今から防衛ラインの突破を図りますーヒロトは今何処にいる？」

敵が指定している第三防衛ラインが見渡せる木の上にファイはAK47を構えて、指示を待っていた。

味方限定の音声チャンネルを開き、次の指示を待っているのだが。俺も第三防衛ラインの別ポイントに到達してる。というか今突破しちった。十五分後に作戦開始するから準備よろしく。キャリルの準備が出来たら瞬発加速して一気に突っ込むから」

てへっ、と舌を出してヒロトにしては珍しく、ふざけた表情が浮かんだ。

「はあ。お前なんのつもりでいるんだよ。作戦開始時刻まだでしょー？」

「そう言われても。遭遇しちゃったんだから不可抗力だよ」

「あっそ。じゃあ私も突入開始するわ。目の前に出てきちゃったし、仕方ないよね！ キャリル、援護頼んだー」

「はあ?! ヒロトの他にファイまで突っ込んで行くなんて聞いてないんだけど！ 俺は一つの身体しかないんだけど。どっちをフォーローしろって言うんだよ」

イヤホンの反対側でキャリルが怒鳴り込んでくる。そのまた共有回線の向こうでシュエが叫んでいる。しかしシュエの命令を聞かずにファイは潜んでいた木の上から飛び降りて、第三防衛ラインに足を踏み入れた。

「私もいつちよ踏み込んでみましょっか！」

AK47を構えて突っ込んでいく。

さすがに防衛ライン。いくつかの術式が設置され、ラインを踏み入れた瞬間迎撃システムが作動し始める。

ただの足止めにすぎないトラップや人一人足止めを用意出来る

トラップ、一斉射撃可能なシステムと一つ一つを解除していく。

「第三防衛ラインなのに防衛体制は盤石だなあ。だけど全部解除していかないと、戻る時不便だからな。ヒロトは一斉に解除可能だと思っけど、私は一つずつじゃないといけないのが難点かなあ」

一つ一つ解除術式を発動していき、AK47の弾として撃ち込んでいく。膨大な数の術式展開に一つ一つ潰していたが面倒になっってくる。

「確かに長距離と大規模攻撃の術式を取得しておいた方が便利だなあ……使えなくはないけど魔力回復に時間掛かるし、次の生徒会戦がメインだし。戦力欠けて迷惑掛けるのもなあ」

ヒロトと違って移動術式を取得していないので、一気に敵陣地へ襲撃を掛けられない。

自分の力不足を痛感して、ファイは舌打ちした。

トラップを展開しているバックアップを担当している敵チームの生徒を倒せば、一気に片付くが。その生徒が出てこないかという期待を込めつつ、自分の魔力を最大限に出す。

わざと自分の魔力を放出することによって、相手呼び寄せる効果があるがこの技は危険行為と云ってもおかしくないほどの危険技。イヤホン越しにシユエが魔力放出を止めると指示が飛んでくる。

「んー俺も一応は瞬発加速出来たりするんだよ、ってことで。ファイ、一気に突撃しまーすっ」

放出した魔力を両足に集中させ、インタラクセ瞬発加速する。

瞬発加速は一番にヒロトから教えてもらった術式で、学園の授業で習うのは二年に上がってから。一年の段階では術式をよく理解していないから取得不可、という方針だ。身体効果系でも最上位にくる瞬発加速は飛行術式とも密接な関わりを持っている。身体の負担も大きく、始めのうちは術者の魔力量を大きく削る。

魔力活性剤も普及している現代において、魔力が極端に減ってしまい、飢餓状態に陥るのはほとんどなくなったが、ファイはまだ瞬発加速を取得して日が浅い。魔力が一気に削られてしまう可能性の方

が高いのだ。何よりもファイは魔力放出状態であり、最大量の魔力を保持していない。

木々を擦り抜け、敵陣地へ近づく。加速して走っている時でさえ、行く手を阻むトラップの数に相手チームの嚴重さと臆病さが垣間見えてファイは苦笑した。

第二防衛ラインが近付いてきた頃、腕に着けていた魔力量計測機が鳴り出す。けたたましい音を鳴らしてファイに警告してくる。これ以上の瞬発加速は危険だと知らせる警告音にファイは自らの魔力量の少なさに嘲笑うしかなかった。

ファイの魔力量は少ない方ではない。武術大会参加者の魔力量だとしたら少ない部類になってしまうのだろう。

警告音が鳴り、足を止めた瞬間に感じるのは全身の倦怠感だった。魔力が減ると同時に体力を魔力へと変換する。身体の負担を感じていると、第二防衛ラインを担当しているらしい生徒がAK47を連射し、襲いかかってきた。

「ちいつ！」

タイミングが悪いとばかりに相手を睨み、ファイは水系術式水床を弾丸に籠め、相手の足場中心に撃つ。お互い一步も譲らずに撃ち合い、魔力を削る。

辺り一面、水浸しになったところでファイはニヤリと笑った。

マガジンを変えて、ファイは地面に向けて、同じ水系術式氷矢を放つ。

氷矢が地面に到達した途端、生徒はしまったと飛び避けようとしたが一步遅かった。

足から氷が伸びていき、固める。火系術式に対する解除術式を次に展開し、足に向けて放つ。当たっても痛くない弾丸を使用しているにしても、当たると多少の痛みを伴う。

火系術式を撃ち込もうとしたのに展開出来ず、生徒は舌打ちして両手を上げた。降参した場合、した時からの攻撃は違反扱いになる。生徒は救難用信号を空に向けて放つたのを確認して、ファイは先

へ進んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7225s/>

---

双壁の背中

2011年11月22日00時37分発行